

長崎県文化財調査報告書 第127集

黒丸遺跡 I

都市計画道路杭出津・松原線改良工事に伴う発掘調査報告書

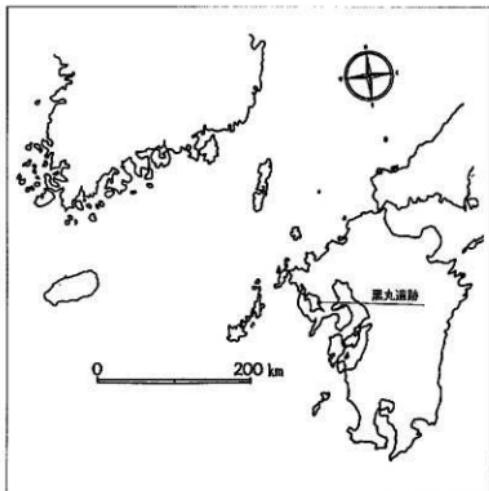
1996

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書 第127集

黒丸遺跡 I

都市計画道路杭出津・松原線改良工事に伴う発掘調査報告書



1996

長崎県教育委員会

序

文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もって国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することは、文化財保護法の趣旨とおりであります。

県教育委員会は、これまで、各種開発事業にあたって必要な場合、関係機関と協議・調整を重ね文化財の保護・活用に努めてまいりました。

都市計画道路杭出津・松原線改良事業につきましても、道路計画当初から文化財の保存について関係機関と協議を重ねてまいりましたが、計画変更が不可能な区域について、平成5年度から3年間緊急発掘調査を実施しました。

これまでの調査で、平成5年度に中世の柱穴、土壙、溝等の生活遺構を確認し、平成6年度は弥生時代のカメ棺墓9基、石棺墓1基、土壙墓1基を検出し、墓地の実態解明の貴重な資料を得ました。また、平成7年度は縄文時代晚期のドングリ貯蔵穴62基を検出し、全国的にも注目を集める遺跡となっております。

今回の黒丸遺跡調査報告書は、平成2年度の範囲確認・平成5年度・平成6年度の本調査を収録したものです。

本書が文化財保護や地域の歴史を知る資料として、活用いただければ幸いに存じます。

平成8年3月31日

長崎県教育委員会教育長

中川忠

例　　言

1. 本書は、長崎県大村市黒丸町587番地1外に所在する黒丸遺跡に関する緊急発掘調査報告である。
2. 調査は、都市計画道路杭出津・松原線改良工事に伴って長崎県教育庁文化課が平成2年度に範囲確認調査、平成5年度～平成7年度に本調査を実施した。なお、平成7年度調査分については、平成8年度に報告を予定している。
3. 平成2年度・平成5年度・平成6年度の発掘調査担当

平成2年度（平成2年12月3日～12月14日）

主任文化財保護主事 宮崎貴夫

文化財保護主事 町田利幸

平成5年度（平成5年10月25日～平成6年2月15日）

文化財保護主事 町田利幸

〃 岡大博

平成6年度（平成6年11月15日～平成7年2月3日）

課長補佐 田川肇

文化財保護主事 村川逸朗

〃 古門雅高

〃 岡大博

文化財調査員 松尾昭子

〃 高原愛

4. 本書の執筆は第1部を町田が第2部のI-1～3を高原がI-4を古門で担当し、3部の自然分析は、古環境研究所に委託し結果報告を記載した。
5. 写真撮影は、第1部の遺構・遺物を町田が第2部は村川が第3部は古環境研究所で行っている。
6. 本書の編集は、町田が担当した。
7. 本書の作成にあたっては、文化課内業整理員による遺物洗浄、注記、実測、トレース等と現地の作業員、内業整理員の方々による協力によって作成することができた。ここに深く感謝いたします。

本文目次

序

第1部 平成2年度・平成5年度調査

I 地理的歴史的環境	1
1. 地理的環境	1
2. 周辺の遺跡	1
II 本調査に至る経過	2
1. 調査の経緯	2
2. 範囲確認調査	3
III 一次調査	5
1. 調査の概要	5
2. 土層	5
3. 遺構	5
4. 遺物	19
5. 小結	37

第2部 平成6年度調査

I 二次調査	53
1. 調査の概要	53
2. 土層	54
3. 遺構と遺物	58
4. V区出土の遺物	96

第3部 自然科学分析

I 黒丸遺跡の植物珪酸体分析	103
1. はじめに	103
2. 試料	103
3. 分析法	103
4. 分析結果	104
5. 考察	104
6.まとめ	105
II 黒丸遺跡における花粉分析	108
1. はじめに	108

2. 試 料	108
3. 方 法	108
4. 結 果	108
5. 花粉分析から見た植生・環境	109
III 黒丸遺跡出土材の樹種同定	113
1. 試 料	113
2. 方 法	113
3. 結 果	113

挿 図 目 次

第1部

第1図 大村市の位置図	1	第17図 I—2区遺構出土	20
第2図 黒丸遺跡及び周辺の遺跡	1	第18図 I—2区遺構出土	21
第3図 黒丸遺跡調査会報告発表・打製石斧	2	第19図 I—3区遺構出土	22
第4図 黒丸遺跡範囲確認調査	4	第20図 I—4区遺構出土	23
第5図 調査区	5	第21図 I—5区遺構出土	24
第6図 I—4～6区・II—4区東壁土層図	6	第22図 I—6～8区遺構出土	26
第7図 I・II区遺構図	7	第23図 I—5区遺構出土	27
第8図 I—1区遺構図	9	第24図 I—10～13区遺構出土	28
第9図 I—2区遺構図	10	第25図 II—1・2区出土	29
第10図 I—3区遺構図	11	第26図 II—3区出土	30
第11図 I—4・5区遺構図	12	第27図 II—4区出土	31
第12図 I—6区遺構	13	第28図 II—5区出土	33
第13図 I—7・8区遺構図	15	第29図 II—5区出土	34
第14図 I—8区遺構図	16	第30図 II—5区出土	35
第15図 I—9区遺構図	17	第31図 II—6～9区出土	36
第16図 I—1区遺構出土	19		

第2部

第1図 調査区周辺	53	第6図 III—1区の土器	58
第2図 調査区	53	第7図 III—1区の石器	59
第3図 ピニールハウス内出土の甕胴部片	54	第8図 III—2区の土器	60
第4図 III・IV区遺構図	55	第9図 III—2区の石器	61
第5図 土層	57	第10図 III—3区の土器	61

第11図	III—4 区の土器	62	第29図	III—8 区の石器①	81
第12図	III—4 区の土器	63	第30図	III—8 区の石器②	83
第13図	III—5 区の土器	64	第31図	III—9 区の土器	84
第14図	III—5 区の土器	65	第32図	III—9 区の石器	85
第15図	III—6 区の土器	66	第33図	III—9 区の壺棺群	86
第16図	III—6 区の石器	68	第34図	壺棺 1～9 号検出実測図	87
第17図	III—7 区の土器	70	第35図	壺棺実測図①	88
第18図	III—7 区の石器①	71	第36図	壺棺実測図②	89
第19図	III—7 区の石器②	72	第37図	III—9 号壺棺群の副葬品	90
第20図	III—7 区 3 層土壇配置図	74	第38図	III—10 区の土器	91
第21図	土壤 1 の石器	75	第39図	III—10 区の石器	92
第22図	土壤 1 の土器	76	第40図	III—11 区の土器	93
第23図	土壤 2 の土器	76	第41図	III—11 区の石器	94
第24図	土壤 2 の石器	77	第42図	IV—1・2 区の石器	95
第25図	土壤 4～6 の土器	77	第43図	IV—12 区の石器	95
第26図	土壤 4 の石器	78	第44図	V 区の土器実測図	97
第27図	土壤 6 の石器	78	第45図	V 区の石器実測図	98
第28図	III—8 区の土器外	81			

第3部

第1図	黒丸遺跡 II—4 区東壁の植物珪酸体分析結果	107
第2図	黒丸遺跡における主要花粉組成図	112

表 目 次

第1部

表 1	遺構出土遺物一覧①	9	表10	押岡遺物の特色一覧④	24
表 2	遺構出土遺物一覧②	10	表11	押岡遺物の特色一覧⑤	25
表 3	遺構出土遺物一覧③	11	表12	押岡遺物の特色一覧⑥	25
表 4	遺構出土遺物一覧④	13	表13	押岡遺物の特色一覧⑦	26
表 5	遺構出土遺物一覧⑤	16	表14	押岡遺物の特色一覧⑧	26
表 6	遺構出土遺物一覧⑥	16	表15	押岡遺物の特色一覧⑨	27
表 7	押岡遺物の特色一覧①	23	表16	押岡遺物の特色一覧⑩	27
表 8	押岡遺物の特色一覧②	23	表17	押岡遺物の特色一覧⑪	28
表 9	押岡遺物の特色一覧③	24	表18	押岡遺物の特色一覧⑫	28

表19	押岡遺物の特色一覧⑬	31	表23	押岡遺物の特色一覧⑯	36
表20	押岡遺物の特色一覧⑭	31	表24	押岡遺物の特色一覧⑮	36
表21	押岡遺物の特色一覧⑯	32	表25	押岡遺物の特色一覧⑰	37
表22	押岡遺物の特色一覧⑱	32	表26	押岡遺物の特色一覧⑲	37

第2部

表1	III—1区石器組成表	59	表8	土壤1・2の石器組成③	80
表2	III—2区石器組成表	61	表9	III—8区石器組成	82
表3	III—4区石器組成表	63	表10	III—9区石器組成	84
表4	III—5区石器組成表	64	表11	III—10区石器組成	92
表5	III—6区石器組成	69	表12	III—11区石器組成	94
表6	III—7区石器組成	73	表13	IV—12区石器組成	95
表7	土壤1の石器組成①	79			

第3部

表1	長崎県、黒丸遺跡II—4区東壁の植物珪酸体分析結果	106
表2	黒丸遺跡における花粉分析結果	111

図版目次

第1部

図版1	I—1・2区遺構	39	図版7	I—3～5区遺構出土	45
図版2	I—3～5区遺構	40	図版8	I—6～13区遺構出土	46
図版3	I—5区3・4号溝	41	図版9	II—1～3区出土	47
図版4	I—5・7・8区遺構	42	図版10	II—4・5区出土	48
図版5	I—2・8区柱穴内遺物	43	図版11	II—5区出土	49
図版6	I—1・2区遺構出土	44	図版12	II—6～9区出土	50

第2部

図版1	III区の調査	99	図版2	III区の遺構	100
-----	---------	----	-----	---------	-----

第3部

図版1	黒丸遺跡植物珪酸体の顕微鏡写真1	115	図版4	黒丸遺跡の花粉・胞子I	118
図版2	黒丸遺跡植物珪酸体の顕微鏡写真2	116	図版5	黒丸遺跡の花粉・胞子II	119
図版3	黒丸遺跡植物珪酸体の顕微鏡写真3	117	図版6	黒丸遺跡出土材の顕微鏡写真	120



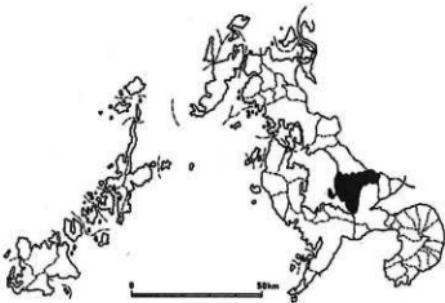
第 1 部

平成 2 年度・平成 5 年度調査

I 地理的歴史的環境

1 地理的環境 (第1図)

遺跡の所在する大村市は、長崎県の中央部に位置する。市の東側を経ヶ岳・多良岳・五家原岳など多良山系で佐賀県とを遮蔽している。西側は大村湾によって囲まれ、現在湾南西側に箕島を削平して長崎空港を開設している。地質は、第三紀堆積岩を基盤に安山岩・玄武岩質の火山性岩石が覆う。河川は、郡川・鈴田川があり、市内最大の郡川は肥沃な扁状地を形成し、稻作と人參を主体とした農業經營の基盤をなしている。



第1図 大村市の位置図

2 周辺の遺跡 (第2図)

埋蔵文化財に関する遺跡は205遺跡を周知しており、周辺の遺跡としては、旧石器時代の野岳遺跡をはじめ20箇所があげられる。縄文時代の遺跡は、九州横断自動車道路建設に伴う調査で後期から晚期の葛城・野田の久保・上八竜・東光寺遺跡が明らかとなっている。弥生時代は、昭和55年から61年に発掘調査を実施した富の原遺跡がある。遺跡の内容は、豪棺墓、住居跡等の構造に伴って弥生時代中期から後期前半にかけての鉄弋3本が豪棺内より出土している。古墳時代は5世紀頃の黄金山古墳や7世紀頃の寿古遺跡等の調査が行われている。中世は、郡川北岸に好武城跡があり周辺の寿古遺跡調査で玉縁口縁の白磁の外に石鍋・土師器等が出土している。また、遺跡の南端には、五輪塔を寄せ集め



第2図 黒丸遺跡及び周辺の遺跡

黒丸遺跡 I

た箇所がありキリシタン大名の大村純忠（第18代大村領主1533～1587年）以前における仏事・仏閣等に関連した場所を示唆すると思われる資料がある。

註1 長崎県企画部企画課1974 土地分類、基本調査「大村」

註2 長崎県教育委員会1989「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書VI」

註3 大村市教育委員会1987「富の原」

註4 小田富士雄1970「九州考古学

39・40長崎県大村市、黄金山古墳調査報告」

註5 大村市教育委員会1999「寿古遺跡」

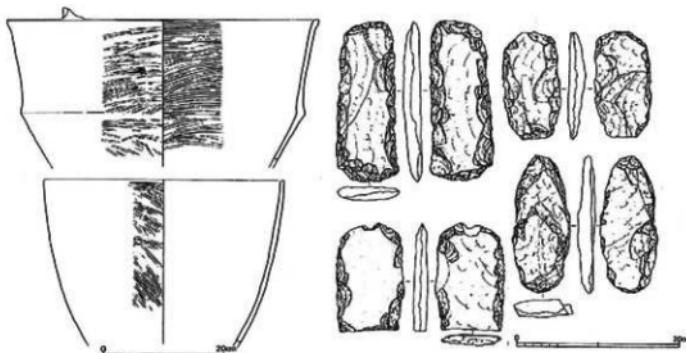


黒丸遺跡内の五輪塔群

II 本調査に至る経過

1 調査の経緯（第3図）

黒丸遺跡の調査は、黒丸遺跡調査会によって昭和52年7月4日～13日の第1次試掘調査に始まり、昭和53年2月14日～3月11日に第2次試掘調査を行っている。この結果、黒丸都市下水路工事に伴う本調査を昭和53年11月21日～昭和54年5月31日の間に黒丸遺跡調査会が3,600m²を実施している。本調査において、縄文時代晩期の壺棺、打製石斧や弥生時代中期の土器及び古墳時代の古式土器、木製品等と中世の白磁・青磁・石鍋等を出土していて、縄文時代～中世の長期にわたって扇状地を利用した生活が営まれていたことが明らかになった。



第3図 黒丸遺跡調査会報告カメ棺・打製石斧 ※註1より転載

このような黒丸遺跡の歴史経過が確認されつつある状況において、県都市計画課から杭出津・松原線改良工事計画の報告を受け平成2年12月3日～平成2年12月14日に試掘場30箇所の120m²を調査した。

2 範囲確認調査（第4図）

長崎県教育委員会が主体となり、調査を実施した。調査の結果、北半部の試掘場（TP 1～11）は、郡川の氾濫によって堆積した土砂や疊に覆われていた。

南半部は、縄文時代晚期～中世にわたる遺物・遺構を確認した。

TP 12～14は、2層～4層に縄文時代晚期の土器・石器の包含状況を確認し、TP 16～21は、弥生時代～古墳時代の土器がまとまりをもって出土し、柱穴や溝状の遺構を確認した。TP 25～28は、中

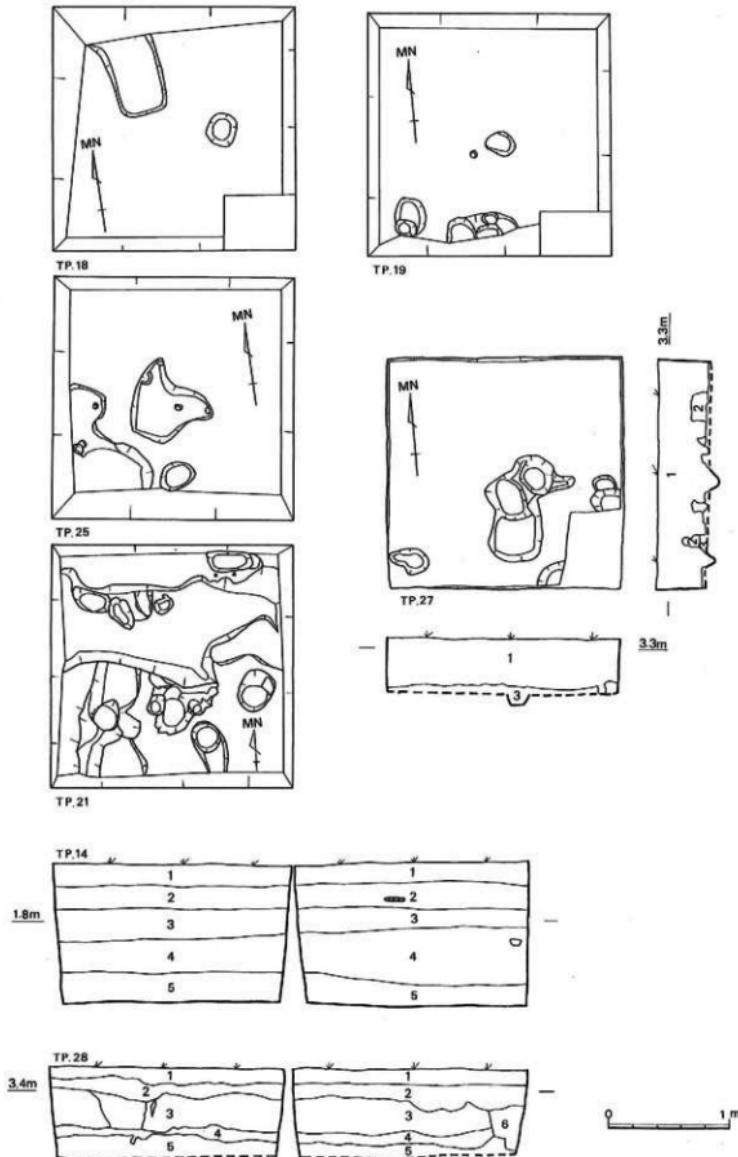


調査風景

TP 21
遺構検出

平成2年度範囲確認調査

黒丸遺跡 I



第4図 黒丸遺跡範囲確認調査

世建物跡の柱穴を検出した。以上の状況から南半部の3区間(TP12~14, TP16~21, TP25~28)と条里造構が係る部分の7,200m²の地域について、事業の計画変更協議を行った。

III 一次調査

(所在地: 大村市黒丸町587番地1~352)

1 調査の概要 (第5図)

調査期間は、平成5年10月25日~平成6年2月15日の間に実施した。

平成2年度の範囲確認調査を踏まえ、道路建設設計画の年次事業に先行する形で3ヵ年計画の発掘調査の実施にあたることになった。

調査方法は、南北300m×東西16mの建設予定区域をI区・II区と設定した。また、区内を10m間隔で区切りI区を13ブロック、II区を9ブロックに分けた。

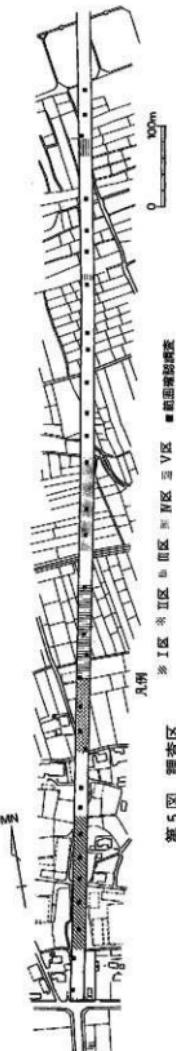
調査は、このブロックごとに堆積層を精査し、ブロック間に畔を残し東壁と併せて土層の確認を行い層ごとに遺物・遺構の取り上げ検出を行った。

2 土 層 (第6図)

I・II区の層序は、1層に耕作土が10~20cm堆積している。2層は、黃灰色を呈し、I区では畑地が多いためか1層と2層が混じりあった状況を示すが、II区は40cm前後の堆積が認められた。3層は基本的に黒色を呈しているものの、色調に変化がみられるとともに出土する遺物に時期的な差が認められ、3層・3a層・3b層の名称をつけている。3層は中世の遺物が主体に出土し、3a層の色調は暗灰黑色土で古墳から弥生時代の遺物が出土する。3b層は、黒色の小礫混じり層となり弥生から縄文時代の遺物が出土している。4層は、基盤層の黄色土となっていて、この上面に4a層とした灰黄色の粘質土が堆積しており縄文時代晚期の土器が出土している。

3 遺 構 (第7図)

I区は、1~13ブロックで白磁碗、青磁、石鍋等の遺物が柱穴内より出土している。また、4・5・6ブロックは、古代の溝が調査区内で南北に長さ28.5m、幅0.5m構築され、4・5ブロックは鎌倉時代から室町時代にかけて土師器皿、青磁、東播系鉢等が溝3号から出土している。7・8・9・10ブロックにかけては、朝鮮系陶磁器、染付の碗・皿類、土師器皿類が柱穴、土壤等から出土している。



黒丸遺跡 I

II区は、1ブロックに中世の柱穴を検出した外は木の根による倒木痕と部分的に円礎の集中箇所を認める程度である。

次にI区の1ブロックから順次遺構の性格及び時期について触れて行くこととする。

I-1 (第8図, 表1)

この地区は、柱穴23基、土壤8基、集石4基、溝1基、焼土1基から遺物の出土があった。

柱穴は、Pit 23号以外は中世に所属する時期と考えられ、柱穴内の充填土の色調は黒色土であった。

土壤は、1・3・6・8号が中世に属し、2・4・5・7号については遺物に陶磁器、ガラス、プラスチック、瓦等が混入しており現代のものである。

集石は、3号が中世の遺物を含んだ黒灰色土が充填し、1・2号は現代の遺物に中世の遺物が混入し、充填土は灰茶色を呈している。

溝1号は、近世陶磁器と瓦片が混入しており所属時期は近世から現代にかけてと考えられるが黒曜石剝片、須恵器、石鍋、黒色土器Bが出土している。

焼土1号は、石鍋片、近世陶磁器等が出土するが、ガラス・プラスチック等が混入しており、近年に土壤を掘られたものであろう。

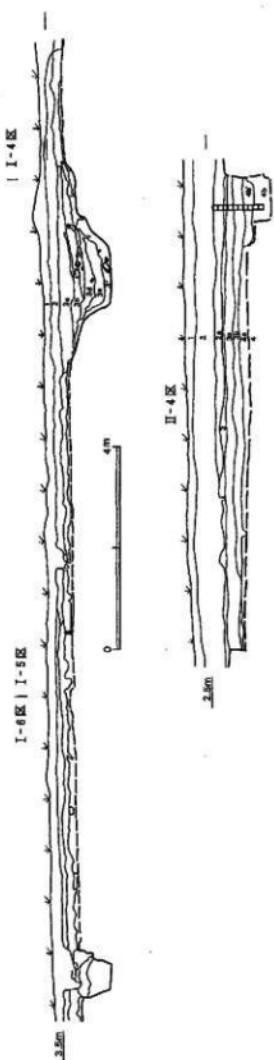
I-2 (第9図, 表2)

柱穴36基、土壤1基、井戸1基、溝1基に遺物の出土がある。

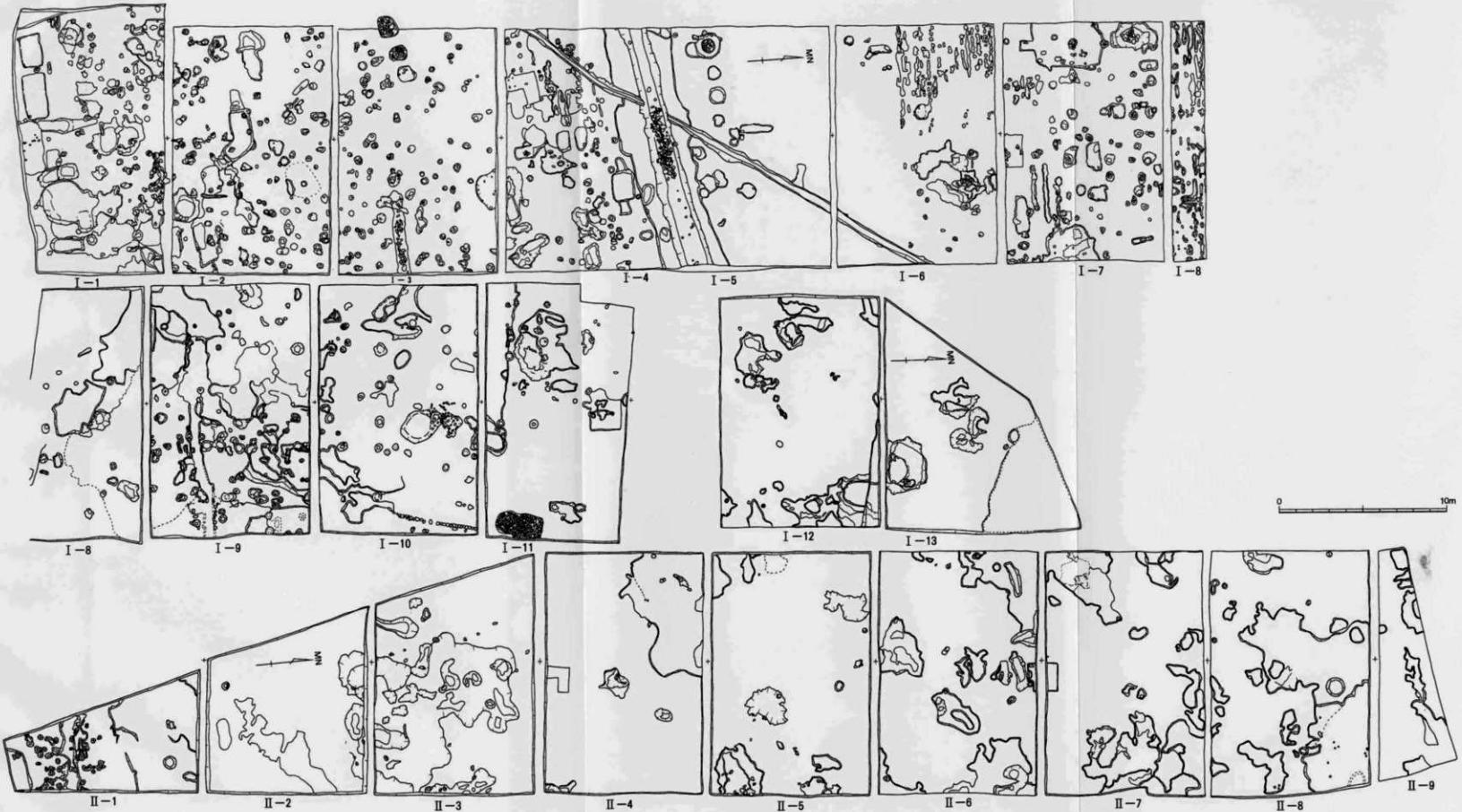
柱穴は、サヌカイト剝片の出土がpit11、須恵器出土のpit9、土師器、青磁、石鍋片等の出土がpit2~6・10・16・17・19~22・25・27~36、近世陶磁器片がpit1・24からそれぞれ遺物の出土があった。

土壤1号は、第二次世界大戦中に防空壕として利用していたもので陶磁器片、ガラス瓶、昭和17年銘-銭の出土があった。

井戸1号は、戦後も使用されていたものであるが周

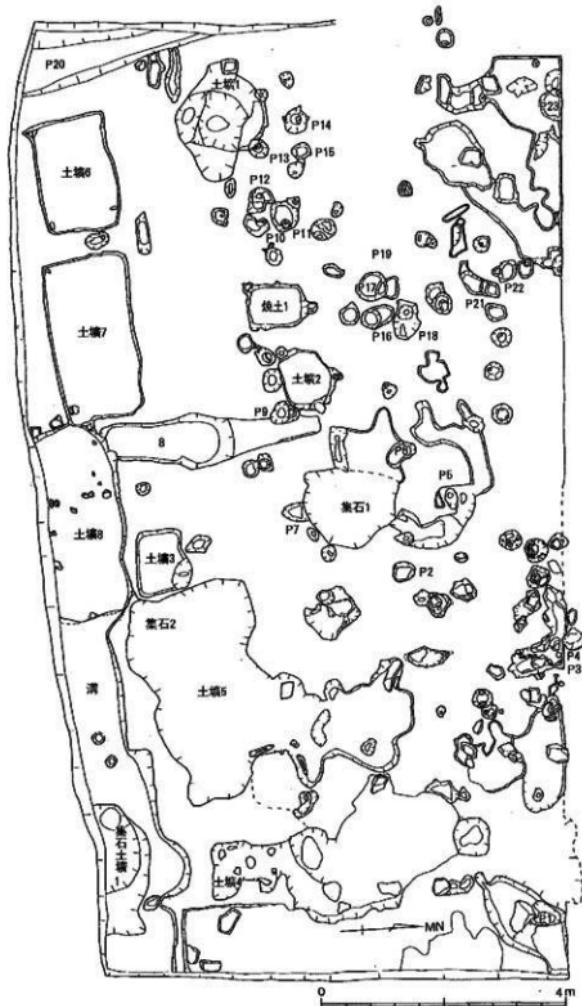


第6図 I-4・5・6区・II-4区東壁土層図



第7図 I・II区造構図

黒丸遺跡 I



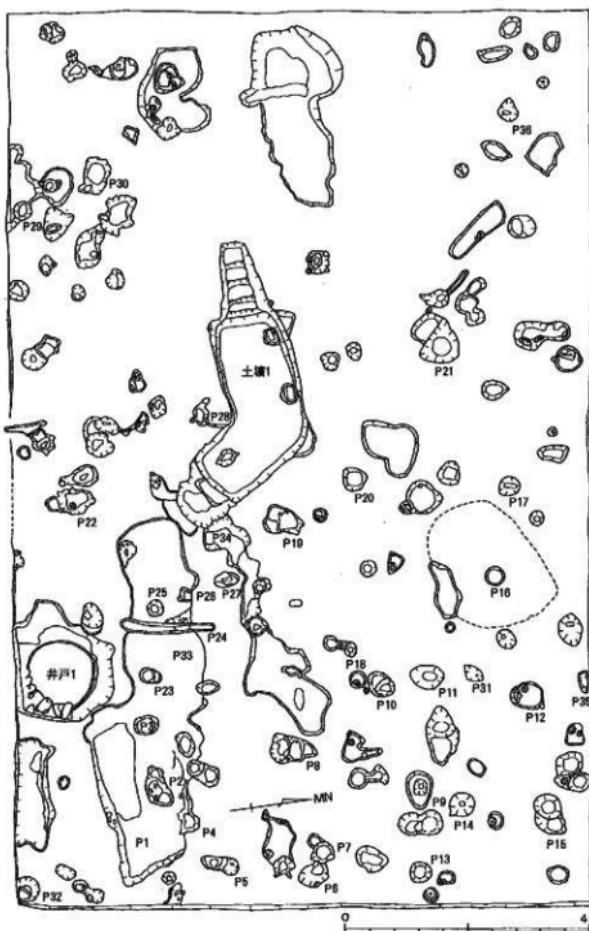
第8図 I-1区遺構図

辺からは18世紀の近世陶磁器の出土がある。

溝1号は、井戸南側に浅く残っていたものである。井戸と同時期に作られたものであろう。

表1 遺構出土遺物一覧①

遺構名	遺物名と点数	遺構 深度(m)	時代
I 1			
柱穴1	土3	5	古代
2	白1土1	16	中世
3	石1土1	16	中世
4 /		6	/
5 青1		27	中世
6 土2		19	中世
7 /		12	/
8 青1土1		22.5	中世
9 青1		25	中世
10 土1		41.5	中世
11 土12石1青1		17	古代～中世
12 /		14	/
13 青1		38	中世
14 土1		7	中世
15 /		21	/
柱穴16	土5石1	34.5	中世
17 土42青1石1		11	中世
18 土2		1	中世
19 土1		7	中世
20 上7石1		13.4	中世
21 土1		23	中世
22 青1		22	中世
23 土4陶1		22.5	中・近世
土壤1	青1石2陶1	38	中世
2 瓦・鉄		27.5	現代
3 /		22	/
4 陶罐5瓦2土1		49.5	現代
5 陶罐2ガ1土1		38	現代
6 /		29	/
7 陶罐2		31	現代
土壤8	土21青5鉄2	35.5	中世
溝1	71ガ3	40	現代
黒石1	陶罐1±1	23	現代
黒石2	陶罐・土13	59	現代
黒石3	陶8陶罐13	38	近世
溝1	鉄漿器3外34	26	現代



第9図 I-2区遺構図

I-3 (第10図、表3)

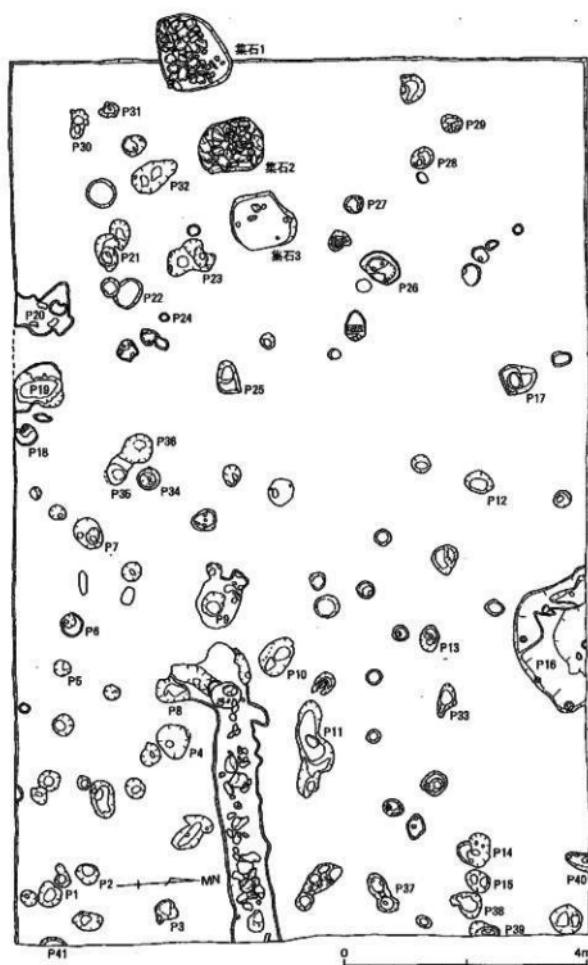
柱穴41基、集石3基、石列1基を検出し、それぞれから遺物の出土がある。

柱穴は、中世に所属する時期が pit 2 ~ 5・7 ~ 16・19 ~ 31・33 ~ 36・38 ~ 40・41である。pit37は縄文時代の土器片が出土している。pit18は近世陶磁器が出土

表2 遺構出土遺物一覧②

遺構名	遺物名と点数	遺構 深度(cm)	時代
I-2			
柱穴1	近陶1土1	34.5	近世
2	石1土1	22.5	中世
3	白2	42	中世
4	土1	11.5	中世
5	青2土6	69.1	中世
6	青2質1	37	中世
7	/	46	/
8	/	35	/
9	須恵器2	31	古代
10	青2	29	中世
11	石器	38	縄文
12	土1	24	中世
13	燒土塊1	42	/
14	須恵器1土1	50.3	/
15	石器1	39	中世
柱穴6	白磁1	43	中世
17	土1	65.3	中世
18	/	18	/
19	石1	18.5	中世
20	青1	27.5	中世
21	青1土6	4	中世
22	土1	22.5	中世
23	/	16	/
24	南磁器1陶器1	28	現代
25	青1	14.7	中世
26	土器器(系切)	28.5	中世
27	石器1	39.5	中世
28	青器1	16	中世
29	土器器7	34	中世
30	上土器(系切)	29	中世
柱穴31	土器器(系切)	16.9	中世
32	土器器1	33	中世
33	朝鮮系青磁1	20.3	中世
34	土器器1	22.5	中世
35	土1質1	36.2	中世
36	土器器1	24	中世
土器1	陶器9ガ3	77	昭和17
井戸1	陶器10瓦1	44.5	近・現
井戸1	陶器2土1鉄1	23	近・現

表3 造構出土遺物一覧①

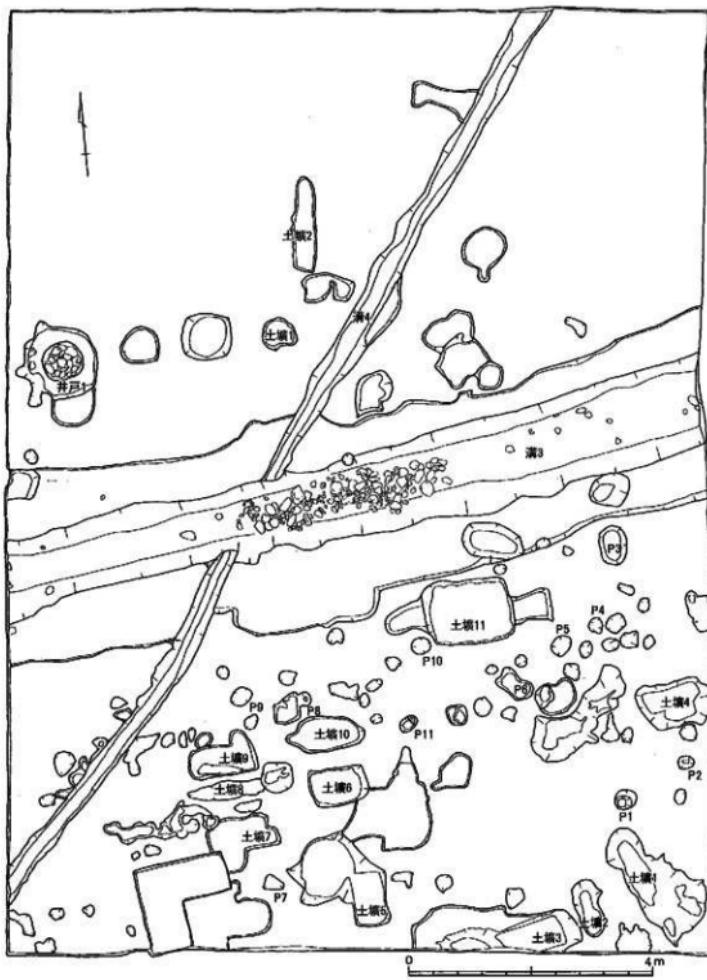


第10図 I-3区造構図

している。

集石は、3基の内3号が瓦質土器を出土し、1・2号は近世陶磁器、瓦、ガラス瓶が出土している。

遺構名	遺物名と点数	遺構 面積(m ²)	時代
柱穴1	白1	40	古・中世
2	土師器2	25	中世
3	土師器1	18.5	中世
4	白1青1±3	32	中世
5	土師器1	26	中世
6 /		41.5	/
7	青1土2	35	中世
8	土師器5	2.9	中世
9	石鍋1土瓶器	34.5	中世
10	白1青1土6	14	中世
11	土師器1	53	中世
12	土師器2瓦質1	42	中世
13	石鍋1	37	中世
14	土師器1	33	中世
15	白3青1石鍋6	33	中世
柱穴16	須土1青1青1	39.5	中世
17	陶器器1	30	近世
18	土師器6	31	中世
19 /		31.5	/
20	土師器2	23	中世
21	白1±6石鍋1	2	中世
22	土師器6	10	中世
23	白1土1石鍋1	48	中世
24 /		15	/
25	土師器8	48	中世
26	土師器1	48	中世
27	土師器1	29.5	中世
28	白1土6石鍋3	35	中世
29	土師器1	26	中世
30	土師器1瓦質1	28.5	中世
柱穴31	土師器2	28	中世
32	土師器1	38.5	中世
33	土師器1	27.5	中世
34	土師器2	28.5	中世
35	土師器9	38	中世
36	土師器2	43.5	中世
37	土器2青1	34	中世
38	土師器1	28	中世
39 /		7.5	/
40	青1土2石鍋1	14.7	中世
41 /		32	/
集石1	縦器4土1瓦3	76.7	現代
集石2	ガラス陶器9	33.5	現代
集石3	瓦質1石鍋1	33	中世
列石1	火鉢、土3白2	34	中世



第11図 I-4・5区遺構図

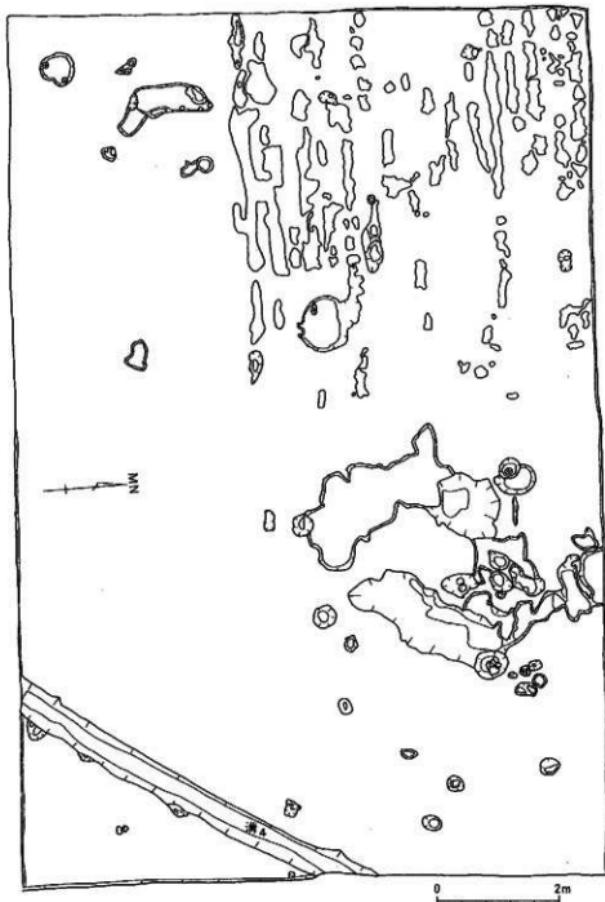
石列1号は、火鉢と石鍋片が出土する。

I-4 (第11図、表4)

柱穴11基と、土壤11基、溝4基から遺物の出土があった。

表4 遺構出土遺物一覧④

遺構名	遺物名と点数	遺構 深度(m)	時代
柱穴1	陶磁器1	32	近世
2 /		40	/
3 白磁1	陶器1	26	中世
4 青磁1		25.5	中世
5 土器1		30	弥生
6 陶磁器1		25	近代
7 土師器2		19	中世
8 上師器3		15.5	中世
9 スリ石1		30	獨・赤
10 白磁1		23.5	中世
11 /		34.5	/
土壙1	陶磁器1	37	中世
2 青磁1 土師器1		31.5	中世
3 青1土1石1		45.5	中世
4 青2土10石1		54.5	中世
土壙5 土1石鍋1鉄1		21.5	中世
6 陶器1 陶磁器5		18	現代
7 青磁1 爆弾1		33.5	中・現
8 白磁1		39	中世
9 鉄		66	/
10 鎔晶片岩1		29	/
11 ピン1 金鉢1		65.5	昭和17
溝1 陶磁器2石鍋1		24	近世
溝2 瓦2		18.5	現代
溝3 銀質4外43		92.5	中世
溝4 /		59.5	古代



第12図 I-6 区遺構図

柱穴は、pit10からスリ石、pit 5 から弥生時代の土器が出土し、pit 3・4・6・8・9・11に白磁、青磁、土師器の出土があった。また、pit 1・7 は近世陶磁器を出土。

土壙1～5・8号は白磁、青磁、土師器の出土があった。土壙6号は陶磁器、7号は爆弾の信管、11号は防空壕に利用していたもので一升瓶、陶磁器

等が出土した。

溝の1号・2号は、陶磁器、瓦片の出土があり現代の溝であろう。溝3号は、須恵器、白磁、石鍋等の遺物が出土し、構造は調査区内の東西方向に伸びて現状で東西の長さ16m、南北の幅が約3.5mを測る。断面はU字形をなしている。溝4号は、I-4区～I-6区に長さが南北30m、幅が0.5～0.6mとなっている。充填土は黒色を呈し、I-6区の溝から土師器の口縁部が出土している。

I-5 (第11図、表5)

造構は、土壙2基、井戸1基、溝2基を検出している。

土壙1号は、陶器、陶磁器、青磁が出土しているがいずれも現代の資料である。土壙2号は龍泉窯系青磁片と土師器が出土する。13世紀中葉頃と思われる。

溝3号は、I-4区の北側部分にあたり系切底の土師器、白磁、石鍋等が出土している。I-5区の溝4号からは、出土遺物を確認していない。

I-6 (第12図、表5)

この地区は、溝1基、倒木跡を検出している。また、西側はゴボウ耕作で搅乱を受けている。

溝4号からは土師器の夢片が出土する。

I-7 (第13図、表5)

柱穴14基、土壙5基に遺物の出土があった。

柱穴はpit 2・5・6・7・9～14から白磁、青磁、染付椀、朝鮮系青磁等の出土があった。

土壙は、1号に青磁、石鍋、土師器の出土があるが小片のため図化していない。2号は土削器の夢形土器片出土。3号は、糸切り底の土師器、青磁皿の出土。4号は器種不明の鉄製品、5号は、滑石製品の出土がある。

I-8 (第13・14図、表6)

柱穴6基から遺物の出土があった。

pitは、朝鮮系陶磁器出土。pit 2は土師器片2点、pit 3は黒曜石片、pit 4・5は陶磁器、陶器、白磁等の近世遺物が出土している。pit 6は土師器の皿が出土している。

I-9 (第15図、表6)

柱穴2基、土壙2基、溝3基から遺物の出土がある。pit 1は土師器、白磁、弥生時代の土器が出土。pit 2は糸切り底の土師器の出土がある。

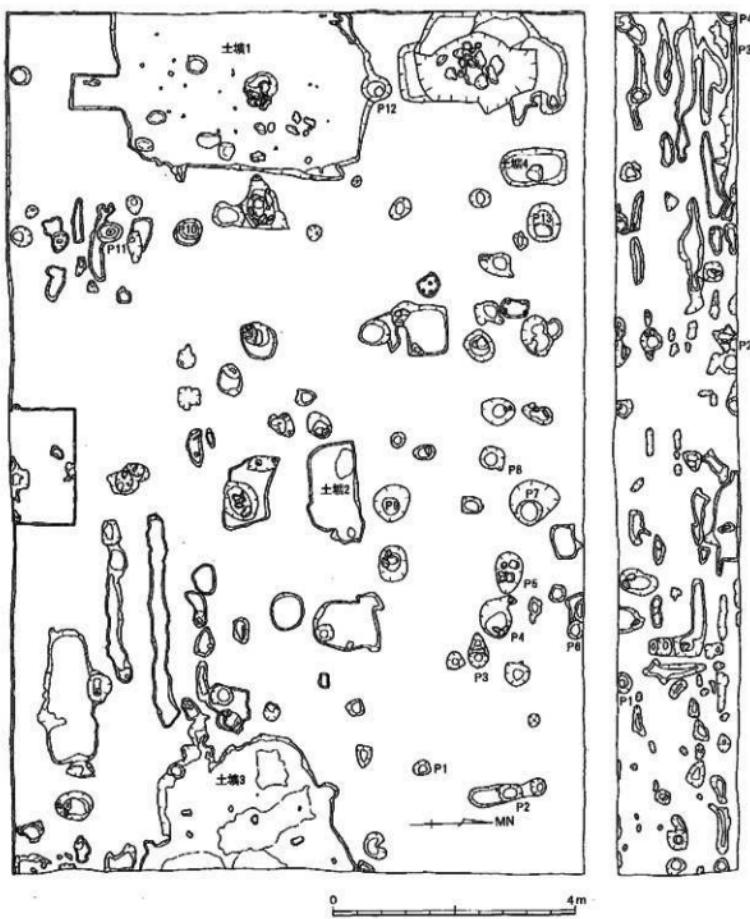
土壙は1号が土師器、白磁小片の出土。2号は、石鍋・青磁片が出土している。

溝は、1号が龍泉窯青磁15世紀代の資料の外に石鍋・土師器・白磁・弥生時代の土器が出土している。2号は、弥生時代中期から後期前半にかけての夢形土器と中世の瓦質土器・糸切り底の土師器・瓦質の茶釜・土錐の出土がある。溝3号は、土師器、石鍋・瓦質土器の出土があった。

I-10 (第7図、表6)

柱穴9基に遺物の出土がある。

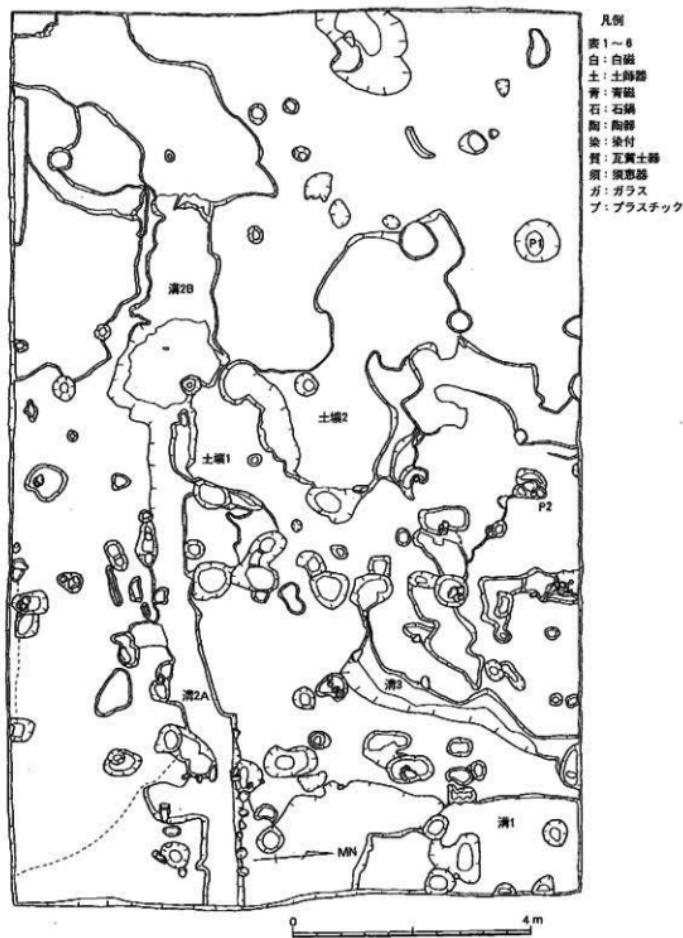
pit 1・2は、土師器の出土があり、pit 3は陶器の皿が出土。pit 5は、瓦質土器・土師器・陶器の出土がある。pit 6は染付皿が出土している。pit 7は、土師器の出土がある。pit 8は白磁が出土している。pit 9は土師器小片が出土している。



第13図 I-7・8区造構図

I-11 (第7図)

2層より、瓦質土器・滑石製石錘・土鍤の出土があったが、柱穴3基と集石1基から遺物の出土は認められなかった。



第15図 I-9区遺構図

I-13 (第7図)

倒木痕を4箇所検出するが、遺物の確認はできなかった。ただし、3層から白磁IV類の玉縁口縁を有する椀が出土している。2層からは、16世紀前半の青磁の出土があった。

II-1 区（第7図）

柱穴及び溝状遺構を検出しているが、柱穴からの出土遺物は確認できなかった。溝状遺構からは、土師器の皿や弥生時代の壺形土器の出土がある。その外は、3層より弥生時代中期の土器、4世紀代の土師器が出土している。2層は、須恵器の杯身、土師器（ヘラ切り縁）、石鏃等が出土している。

II-2 区（第7図）

浅い溝が4層上面に認められた。遺物は、4a層に滑石混入の縄文時代中期の阿高系土器、リボン状の突起を付けた縄文晩期の深鉢形土器等の出土がある。3層は、須恵器、黒色土器Aが出土している。2'層（黄色砂層）からは、土錐の出土がある。2層は、弥生時代中期の土器、須恵器、白磁の皿及び椀類、石鍋、糸切り底の土師器、明代の染付皿等の出土がある。

II-3 区（第7図）

この地区も、浅い溝がほぼ4層全面に認められ川の流路と考えられる。遺物の出土は、全く確認できなかった。4a層からは、粗製の深鉢形土器、磨製石斧、打製石斧、石鏃等が出土している。3b層は、弥生時代中期、古墳時代後期の土器の出土がある。2層からは、土師器、白磁椀類等が出土している。

II-4 区（第7図）

礫の集中箇所が4層上面の西側に、東西7m、南北6m程に認められたが遺物の出土は、認められなかった。遺物は4a層に縄文時代中期の阿高系土器、晩期の土器、石鏃、スクレイバー、凹石の出土がある。3層に弥生時代中期の土器、古墳時代前期の土師器が出土する。

II-5 区（第7図）

礫の集中箇所が4層上面の西側に3箇所認められた。その外に倒木痕が東側と北側に認められる。遺物は、倒木痕の周辺に集中して出土し、弥生時代中期の土器が主体を占める。石器は、石鏃、磨製石斧、スリ石の出土があった。3a層は、古墳時代前期の土師器の出土があり、3層は古墳時代末期の須恵器が出土した。

II-6 区（第7図）

4層上面に浅く倒木痕が残る。4a層はII-6区からII-9区かけては消失し、3b層に弥生時代中期の土器が出土する。3a～3層は、古代の遺物が出土する。

II-7 区（第7図）

4層上面の東西に倒木痕が残る。3b層に弥生時代中期の土器が出土する。遺物の量が極端に少なくなる。

II-8 区（第7図）

4層上面の北東隅に円礫の集中箇所がみとめられ、弥生時代中期の遺物が20点程出土。また、倒木痕にも弥生時代の土器、陶磁器が混入していた。

II-9 区（第7図）

倒木痕が残り、3層に弥生時代中期の土器、叩き石が出土する。

4 遺 物 (第16~31図, 表7~26)

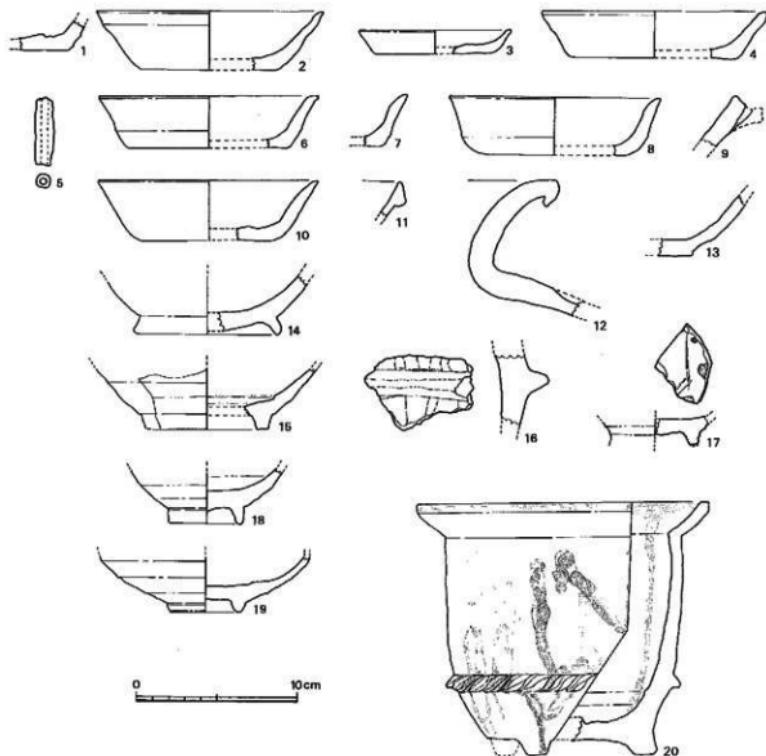
I 区は、遺構からの出土遺物を主に II 区は、土層ごとの出土遺物をまとめて掲載している。

I-1~I-5 区は、相対的に 11世紀~13世紀代の遺物が主体を占め、I-6~I-10 区は 15世紀~16世紀後半の遺物が主体となる。

II 区は、縄文時代中期~11世紀代の遺物が 4a 層~3 層の間に出土している。

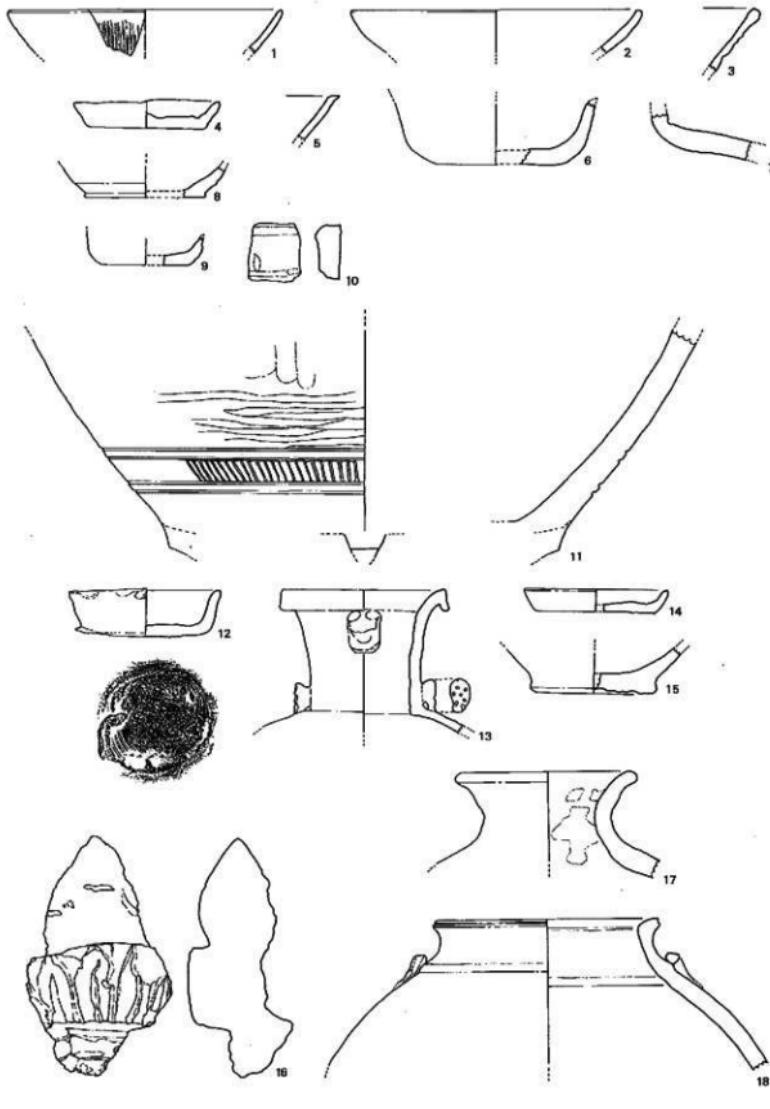
I-1 区で、時期の求められる遺物は、糸切り底の土器器が 2・3・4・6・7・8・10 で 13 世紀代がある。それ以前の資料として、II の白磁碗 IV 類 (11 世紀中葉~12 世紀初頭) の玉縁口縁、14 の黒色土器 B がある。さらに 7 世紀前半代の須恵器がこの地区でもっとも古い遺物である。

I-2 区は、柱穴内の遺物の上限は 7 の須恵器が 8 世紀代にあり、5 の白磁碗 VII 類や 6 の土器器の杯でヘラ切りの板目が底部についた 12 世紀代を中心に 13 世紀代までの遺物と考えられる。11 の火鉢が



第16図 I-1 区遺構出土

黒丸遺跡 I



第17図 I-2区遺構出土

15世紀代とある。

I—3 区は、11世紀中葉から12世紀初頭を中心とする白磁と13世紀から14世紀代の糸切り底の土師器と同安・竜泉窯の青磁が出土している。

I—4 区は、12世紀から13世紀代の遺物と14世紀から15世紀代の石鍋類²¹³とがそれぞれ柱穴の時期を示している。

I—5 区は、柱穴が極端に減少し、3層の出土遺物と溝3号の遺物が主体となる。3層の出土遺物は、白磁、石鍋、竜泉窯系青磁の出土があり、石鍋の形式から15世紀前半が下限と考えられる。また溝3号は、石鍋C—1類13世紀後半から14世紀初頭の出土があり、溝3号の機能した時期が13世紀代から15世紀前半であったろうと考えられる。

I—6 区は、溝4号から土師器壺の口縁部片が出土している外は、柱穴からの出土がない。

I—7 区は、朝鮮系陶磁器類²¹⁴が柱穴から出土している。外に、明代の染付碗類²¹⁵の16世紀中葉の出土がある。

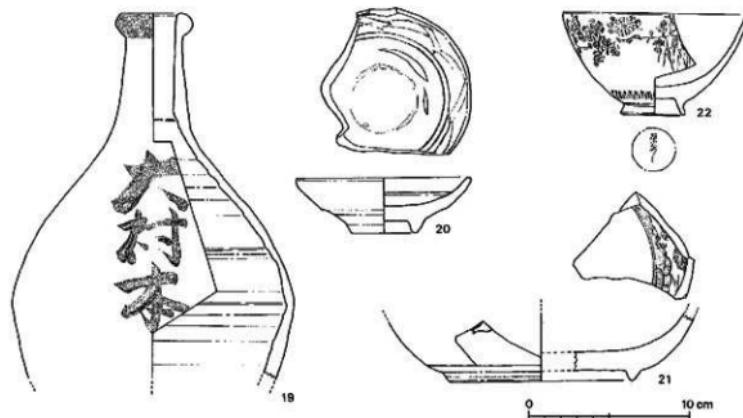
I—8 区は、10の朝鮮系青磁、土師器の皿等が15世紀代の遺物としてある。

I—9 区は、明代の染付皿²・³の15世紀後半から16世紀にかけての遺物が出土した外に土錘が出土している。

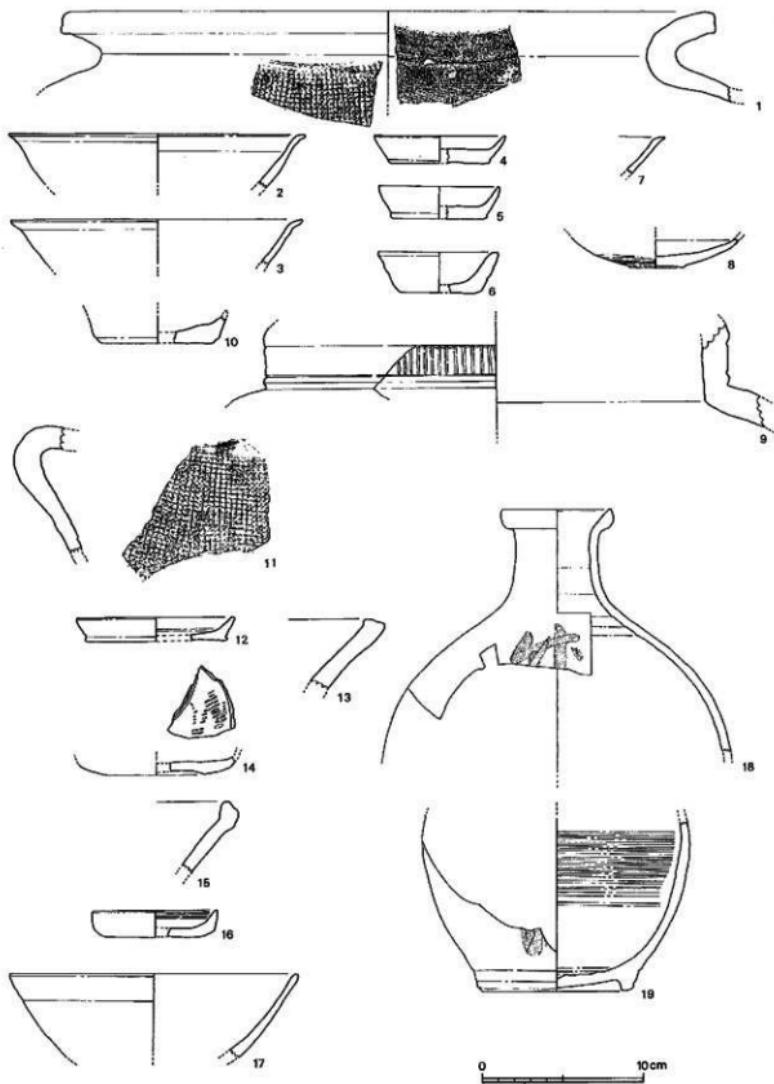
I—10 区は、2・5の明代の染付碗C群V類、皿B 1群VII—3類（15世紀後半から16世紀）の外は4の瓦質の土器、3の陶器が出土。

I—11 区は、6の瓦質土器、7の茶釜、8の滑石製石錘、9～13の土錘の出土がある。

I—12 区は、14の石鐵がある外に、土師器、白磁、石鍋片等があるが小片のため同化していない。

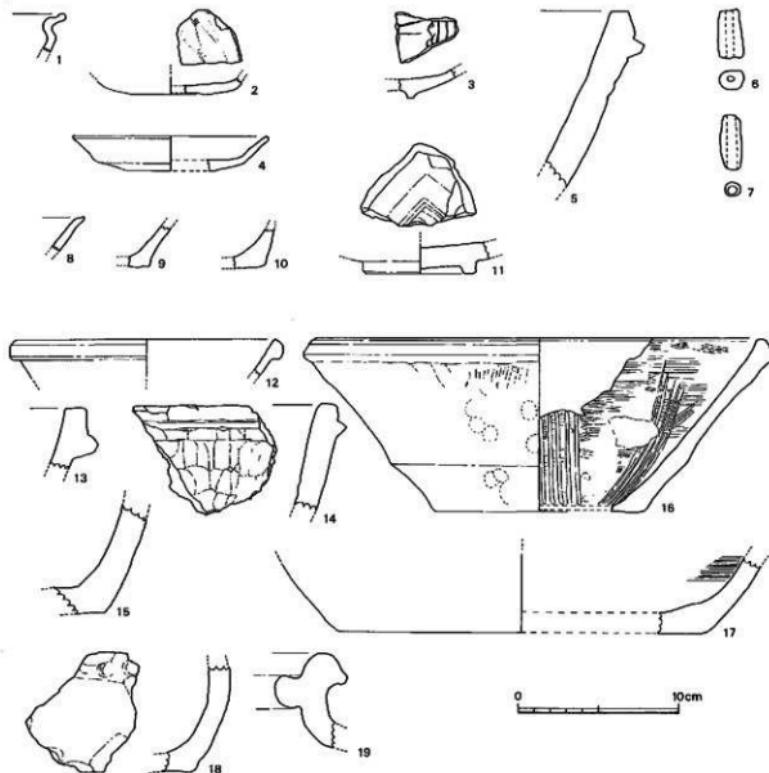


第18図 I—2区遺構出土②



第19図 1—3区遺構出土

黒丸遺跡 I



第20図 I-4区遺構出土

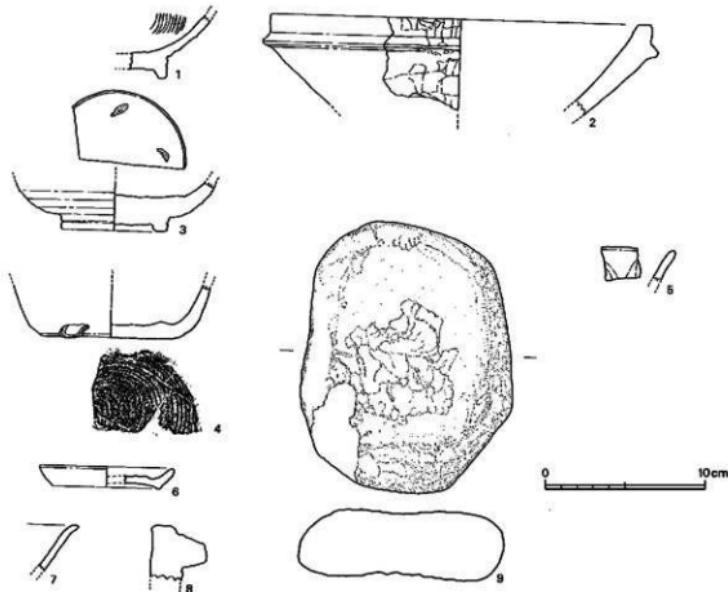
表7 挿図遺物の特色一覧①

図番号	遺物名 番号と部位	遺物の特徴	時期
16-1	KI-Pit 1	へつ切り底の土師器。内外面ともに暗赤色を呈する内底の光沢に段を有する。	12世紀
16-2	Pit 4	糸切り底の土師器。内外面をミズビキにより滑らかに整にする。色調は暗赤褐色。	13世紀中葉
16-3	Pit 4	糸切り底の土師器。左回りのクロロビキによる豊影。糸切りの後底船ナデ消しあり。	13世紀中葉
16-4	Pit 7	糸切り底の土師器。ロクロミズビキによる豊影。色調は内外面ともに暗赤色。	13世紀後葉～14世紀
16-5	Pit 8	土器。長さ4cm、内径5mmの孔。施成良好で灰素色を呈する。	
16-6	Pit 17	糸切り底の土師器。底部からの立ち上がりに丸窓を持ち、側面で外反し縁部へ延びる。色調は淡赤色。	13世紀後葉～14世紀

表8 挿図遺物の特色一覧②

図番号	遺物名 番号と部位	遺物の特徴	時期
16-7	KI-Pit 15	へつ切り底の土師器。16-6と色調、盤形とも似る。	13世紀後半～14世紀
16-8	Pit 17	糸切り底の土師器。器面が風化し豊影が不明。口縁部屈曲させる。色調は淡赤色。	13世紀後半～14世紀
16-9	Pit 18	糸切り底の土師器。色調は暗赤色を呈する。外面に擦過の跡がある。	12世紀後半～末
16-10	Pit 24	糸切り底の土師器。暗赤褐色を内外面ともに呈する保存状態良好。口縁部は外反する。	12世紀後半～14世紀
16-11	Pit 23	白磁焼IV型。輪郭はやや凸起がかった透明釉が覆かる。口縁部を玉縁としている。	11世紀中葉～12世紀
16-12	溝1号	須恵器。器形は瓶底から大きくな外反し、口縁端に厚みを持たせ丸窓を持って下方へ延びる。胎上良好で外面に同心円の削き目整す。外面は自然物が拂かり灰黄色を呈する。胎土は小豆色を呈する。施入品と考えられる。	7世紀後半

黒丸遺跡 I



第21図 I-5区造構出土

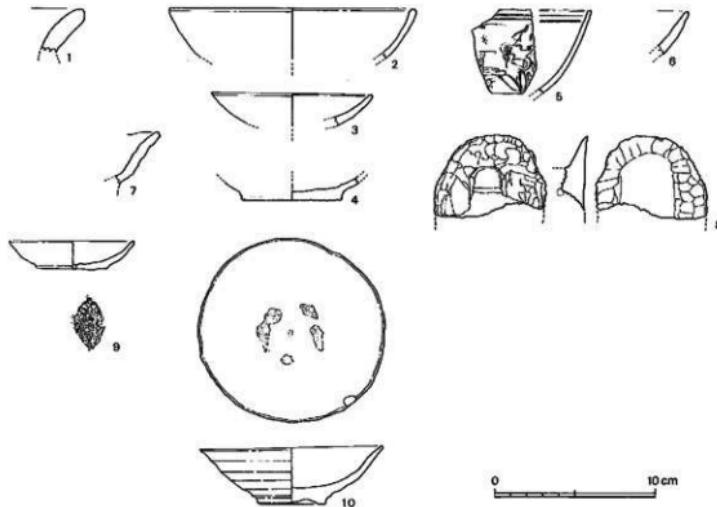
表9 挿図遺物の特色一覧③

回番号	遺物名 番号と部位	遺物の特色	時期
16-13	KI-1 溝1号	東洋系統の底部。色調は内外面ともに暗灰色を呈する。	
16-14	溝1号	鐵器化粘土を用いて内外面を織紋にして炭素を吸収させ墨色とする。高台を有する墨色上蓋。	11世紀後半～12世紀
16-15	土壤8号	白磁焼成窯。内凹見込みの鉢を輪状にカキ取ったもの比較的高い高台を有し、高台及び全体ノリ程度は剥がれていな。	11世紀～12世紀初頭
16-16	土壤8号	滑石質灰陶。小片のみの彫刻全件については鑑定がつかないが、阿波さのタイプで勢の部分より上方に向かって内溝せている。	11世紀後半～13世紀
16-17	集石1号	象嵌焼成窯。灰青色の釉が掛かり目録が内底見込みに3箇所認められる。白土で充填しているが文様について不明。	14世紀代
16-18	集石1号	両腰部に、両台置付けの鉢が一面掛かっていないのが内外面とともに白色の釉が掛け貰入が入る。	
16-19	集石1号	南磁器皿。蛇口鋸ぎの内底見込みを有し、高台置付け及び内部は無釉としている。波底見込みの特色	18世紀中葉
16-20	土壤4	三足の脚を有し、赤褐色の粘土にワラ灰物を掛けた模木体(花盆)である。	現代
17-1	KI-2 II層	同安室系青磁。釉は貴色味のある釉が掛かり、体部の外側に輪状の施文貞で片影り窓の比照を入れる。	13世紀中葉～14世紀

表10 握図遺物の特色一覧④

回番号	遺物名 番号と部位	遺物の特色	時期
17-2	KI-2 pit 3	土師器。腹面陶化のため茎状状況不明瞭。口縁部を平坦にする。	
17-3	pit 4	瓦質の鉢。口縁部間に厚みを持て、内外面は明灰色を呈する。	
17-4	pit 5	ヘラナニア型の底部を有する土師器皿。底部から口縁部へやや内凹みに移行。断面に厚みを持て。	12世紀
17-5	pit 6	白磁焼成窯。灰白色に呈する色調。釉は薄く掛けられている。! 線彫部を平坦に整形する。	11世紀中葉～12世紀初期
17-6	pit12	土師器皿。余切り底で板口整形を行なう。色調は明黄赤。	12世紀中葉
17-7	pit14	須恵器。胎上は精製された粘土を使用。外面にヘラ様のもので記号が入る。整形の形態をなし。断面から肩部にかけてのものである。	8世紀後半
17-8	pit 5	余切り底の土師器皿。胎土は精製した粘土を用いる底部から全体に一端設をなし丸味を持つ立ち上がる。淡黄赤色を呈する。	13世紀後半～14世紀
17-9	pit14	ヘラ切りで板口底が底につく。土師器皿。色調は内外墨色を呈する。	
17-10	pit15	石圓片。方形の耳を有するタイプの石縄を切り取り加工を施している。よって11世紀以降の転用。	10世紀～11世紀

黒丸遺跡 I



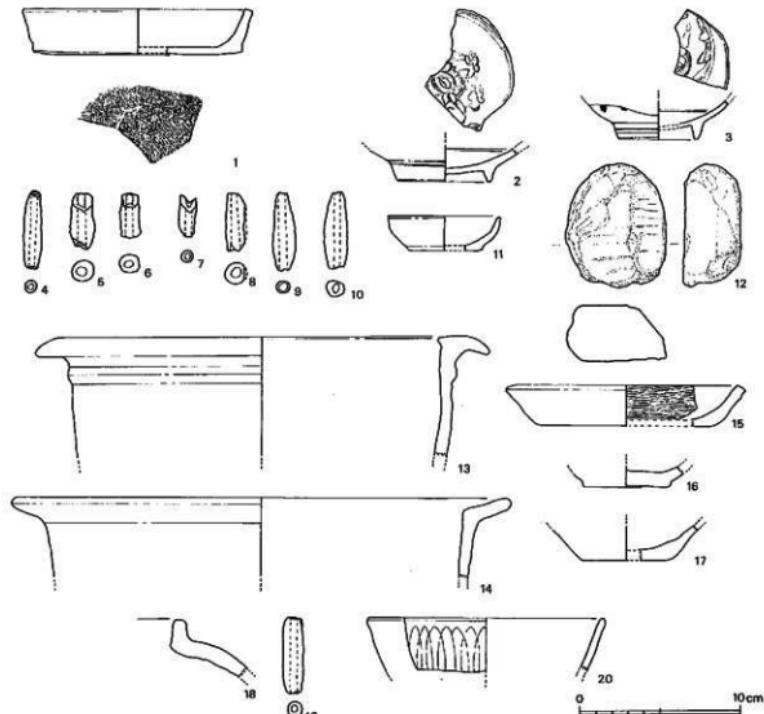
第22図 I-6・7・8区造構出土

表13 挿図遺物の特色一覧⑦

回番号	遺構名	遺物の特色	時 期
20-19	K 1-4 溝3号	筒状衛生の甕で流入品。灰緑色の釉薬がかからず、口縁部がY字に作られている。	13世紀後半 ~14世紀前半
21-1	K 1-5 3b層	白磁施釉。飾目あり。高台無地で内外面灰白色。	11世紀中葉 ~12世紀初頭
21-1	3b層	石器C-2煙	14世紀後半 ~15世紀前半
21-3	3c層	鹿島窯高脚甕。蓋高い高台で断面を四角形に作りだす輪で灰緑色を呈する。高台及び蓋付けは施釉。	
21-4	3層	糸切り蓋の土器製作。底座から体部の境に房がつつき丸味を持った立ち上がり。	
21-5	土壇2号	鹿島窯青白片1題。高台の一部が残る。	13世紀中葉
21-6	甕3号	糸切り蓋の土器製作。底座の筋に後がつき円錐部に丸味を持つ。	
21-7	甕3号	白磁施釉。口縁部で開曲する。	
21-8	溝3号	石鍋C-1瓶。比較的厚みのある断面を有しているが、上部に加工痕が認められ転用中の痕跡とみられる。	13世紀後半 ~14世紀初頭
21-9	溝3号	円石。表面面に鋸歯の跡が残る。	
22-1	K 1-6 溝4号	土器製作の甕の口部破片。胎土粗く異石が混入している。塔部はなくおさめる。	7世紀代
22-2	K 1-7-pit10	青磁甕。口縁部を丸くおさめる。	15世紀代
22-3	pit11	陶器標印。白色の化粧土を撒ける。	
22-4	土壇3号	糸切り蓋の土器製作。底部の筋に後をなす。	
22-5	pit12	糸付焼付C群標印。人物風景を別枠に描く。	16世紀中葉

表14 挿図遺物の特色一覧⑧

回番号	遺構名	遺物の特色	時 期
Z2-6	K 1-7 pit14	朝鮮系青磁甕。胎土は暗灰色を呈し釉の色調は緑灰色。	
Z2-7	pit 9	朝鮮系青磁甕。淡緑灰色を呈し胎土は、粗い灰色を呈する。	
Z2-8	土壇5号	滑石製品。つまみを有し橈形形状を呈するとと思われる。表面とともに細かい削り込みで加工を施す。	
Z2-9	3b層	糸切り底の皿。打刃間に使用したものか口縁部の端部に横付栓。底部の内側に横栓を有する。	
Z2-10	K 1-8 pit 1	朝鮮系青磁甕。内側見込み及び高台に胎土目を付す色調は灰緑色に黒斑が入る。見込みが継ぎやかに盛り上がる。	
Z3-1	K 1-9 2層	瓦質の杯底部を平坦にして刷毛形をなしでいる。底部から丸みを持って体部で屈曲し外方に向て立ち上がる。口縁部は平坦とする。	14世紀中葉 ~15世紀中葉
Z3-2	2層	明代染付鏡C群V鏡。見込みに花卉文を描く。内底見込みが高台に凹む。	15世紀後半 ~16世紀後半
Z3-3	2層	明代染付鏡C群V鏡。見込みに朱文文様を有する。	
Z3-4	2層	土縫。内径4mmの孔。長さ約4.5cm	
Z3-5	2層	土縫。内径5mmの孔。欠損	
Z3-6	2層	土縫。内径3mmの孔。欠損	
Z3-7	2層	土縫。内径3mmの孔。欠損	
Z3-8	2層	土縫。内径3mmの孔。欠損	
Z3-9	2層	土縫。内径4mmの孔。長さ4.5cm	



第23図 I-9区遺構出土

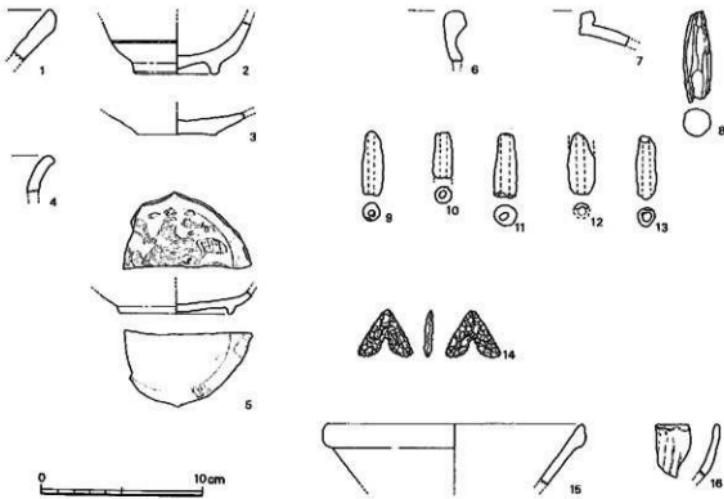
表15 挿図遺物の特色一覧⑨

図番号	遺構名 番号と層位	遺物の特色	時 期
23-10	KI-9・2層	土器。内径4 mの孔。長さ4.6cm	
23-11	pit 2	水切り底の土面造形。底面の端に枝を有し内側につ立ち上がる。	
23-12	日眉	壁7cm。砂口を3面使用する。	
23-13	溝2号	環形土器口部が下へ垂下し、凸部が一本入る。底部には刷毛目凹部。	弥生中期後半
23-14	溝2号	變形土器。口縁部が上方へ延び口縫中央部がやや凹む。底部はほぼ直に移行する。	弥生後期前半
23-15	溝2号	瓦質土器。杯V型。口縫部平坦に製作し、内面を暗灰色。外面は灰青色を呈する。	14世紀中葉～15世紀中葉
23-16	溝2号	土面造形。水切り底の底面端に枝を有する。	
23-17	溝2号	上断面圓。風化のため底部の水切り不明。	
23-18	溝2号	瓦質の茶色。外側暗灰色。内面は黄褐色を呈する。口縫部に開揚の細い沈線に入る。	

表16 挿図遺物の特色一覧⑩

図番号	遺構名 番号と層位	遺物の特色	時 期
23-19	KI-9・2層	土器。内径4 mの孔。長さ4.3m	
23-20	溝1号	堅密系背板。灰青色を呈し、溝井の幅の小さい切り込みを入れる。	15世紀後半
24-1	KI-10 3層	堅密系の芯。灰青色を呈し、堅密である。	
24-2	2層	明代墓村鏡C群V型。淡青色で体部に團扇を描く。	15世紀後半～16世紀後半
24-3	pit 3	阿蘭陀。内面に見込みに淡青色の輪が描かる。底部は平底である。外側の外帯下及び底部とともに無輪。	
24-4	pit 5	瓦質土器。口縫部が外反する。口縫深部は、丸くおさめる。色調は暗灰色。	
24-5	pit 6	明代染付鏡。B1群V-3。高台は側面に面取りし形数き施成。見込みは五枚折子を描く。	15世紀後半～16世紀後半
24-6	KI-11 2層	堅密の瓦質土器。口縫部に厚みを有し、口縫から並曲する。	

黒丸遺跡 I



第24図 I-10・I-11・I-12・I-13区遺構出土 (14はI-2)

表17 挿図遺物の特色一覧①

図番号	遺物名 番号と層位	遺物の特色	時 期
24-7	K I-11 2層	瓦質土器の茎部。頸部から直に立ち上がる。 口縁端部が平坦となる。	
24-8	2層	磨石製石盤。内側部を欠くが、加工は削り込みで中央部が膨らむ形状を示している。	
24-9	2層	土器。内径4mmの孔。長さ33.7cm。	
24-10	2層	土器。内径4mmの孔。欠損。	
24-11	2層	土器。内径4mmの孔。欠損。	

表18 挿図遺物の特色一覧②

図番号	遺物名 番号と層位	遺物の特色	時 期
24-12	K I-11 2層	土器。半欠損。	
24-13	2層	土器。内径4mmの孔。欠損。	
24-14	K I-12 倒木痕	石器。ハリ質安山岩。表面とともに側面から細かなリッケット調整を施す。長さ2cm。幅2.2cm。	縄文
24-15	K I-13 3層	玉様の口縁をなす。白磁IV類。	II世紀中葉～12世紀初期
24-16	2層	青磁B類～IV類が埋立としての単位を意味しないで描される。	16世紀前半

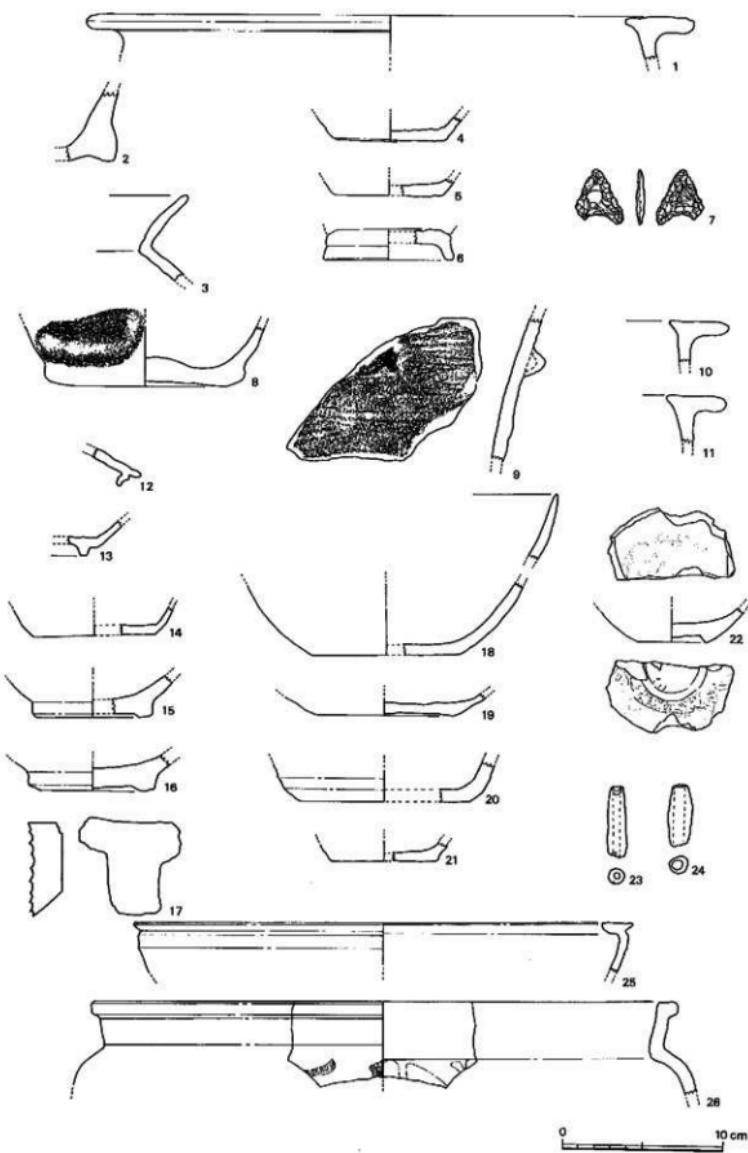
I-13区は、15の玉縁U縁の白磁、16の青磁碗類が出土している。

II区の遺物は、縄文時代から近世の遺物について取り上げている。

II-1区の1・2は、弥生時代の壺形土器の口縁部、底部や7の石鎌がある。3は土師器の壺形土器で4世紀代の遺物である。4・5・6は奈良時代から平安時代にかけての遺物である。

II-2区の8・9は、縄文時代中期と縄文時代晩期の土器である。10・11は弥生時代中期の壺形土器。12・13は須恵器。14は白磁。15・16は白磁碗類。17は石鍋の耳の部分。18は黒色土器A類の9世紀代。19はヘラ切の杯。20・21は糸切り底の土師器杯と皿類。22は明代の染付皿C群…1類で15世紀後半の遺物である。23・24は土鏡、25は褐釉陶器。26は唐津系陶器である。

II-3区は、1～3の縄文時代晩期の土器の外に4～7の石器類がある。8は弥生時代中期の壺形



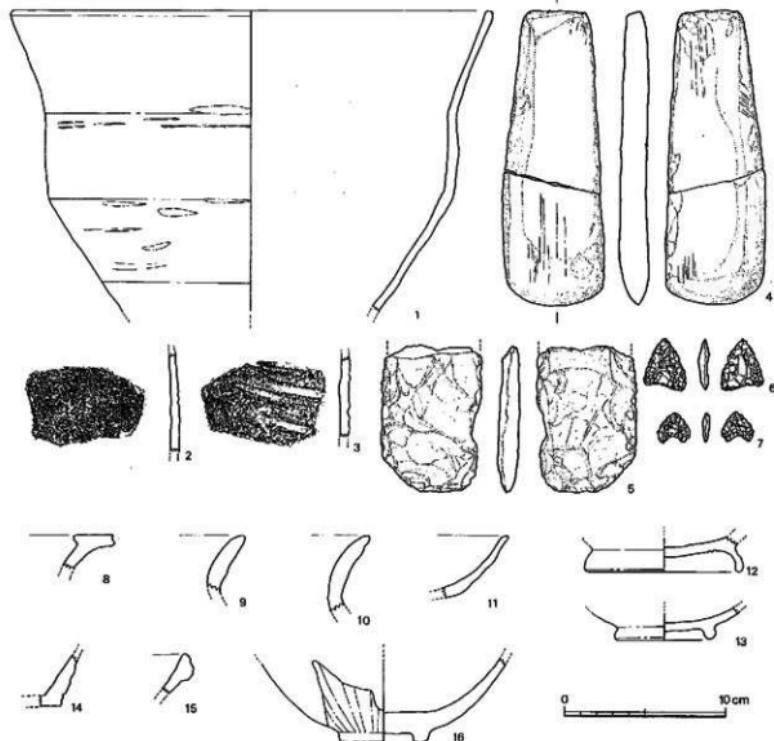
第25図 II-1・2区出土 (7は1/2)

黒丸遺跡 I

土器。9・10は古墳時代の遺物。11は土師器の杯。12・13は高台のある土師器碗C類。14は土師器杯。15は玉縁口縁の白磁。16は鏡連介のある青磁。

II-4区は、縄文時代から古墳時代初頭の遺物がある。1は阿高系土器。2は円盤貼付の底部。3～6は縄文時代の石鏃、スクレイパー、凹石類である。7・8は弥生時代中期の土器。9・10は古墳時代初頭の遺物にあたり、11・12は弥生時代後期の壺形土器である。

II-5区は、弥生時代中期の遺物を主体に掲載している。1～13はいずれも弥生時代中期中葉から後葉にかけての遺物である。14～28は弥生中期の壺形土器の底部で、27・28は黒髪系土器であろう。29は壺形土器の底部である。30～37は石器類で30は石鏃、31は磨製石斧。32～37は円盤を利用した叩石、石皿類である。38～47は古墳時代の遺物である。38～42は4世紀中葉から後半に所属する壺形土器の土師器。43～45は高杯で、5世紀前半と思われる。46は壺形土器の土師器。47は須恵器の甕類で7世



第26図 II-3区出土 (6・7は1/2)

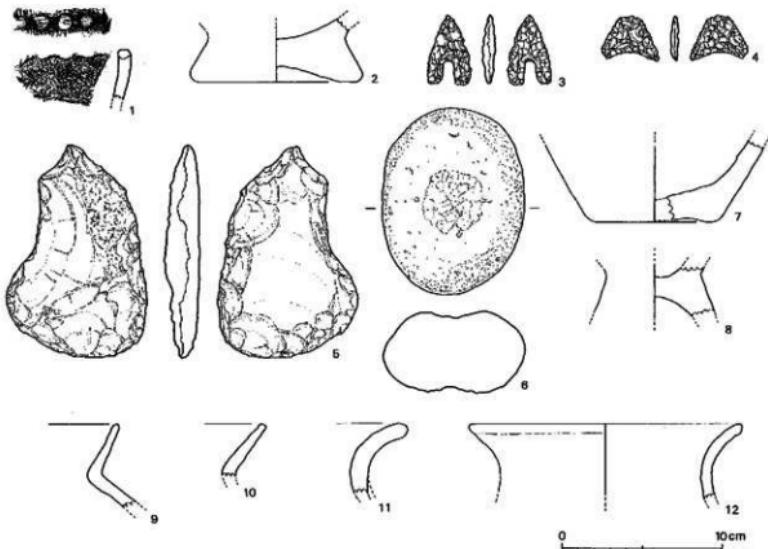
紀後半が考えられる。48・49は土師器の椀類で高台付である。

II-6は、弥生時代の遺物に1~6があり、7は土師器の杯片である。8は土師器の椀で貼付高台を有し、11世紀中葉にあたる。

II-7は、9・10・11いずれも弥生時代の遺物である。

II-8は、弥生時代の土器に12・13・14・15・16・17があり、18は倒木の攪乱を受け埋没した近世陶磁器である。

II-9は、19・20・21がある。19は円形のスリ石。20は弥生中期の変形土器。21は変形土器である。



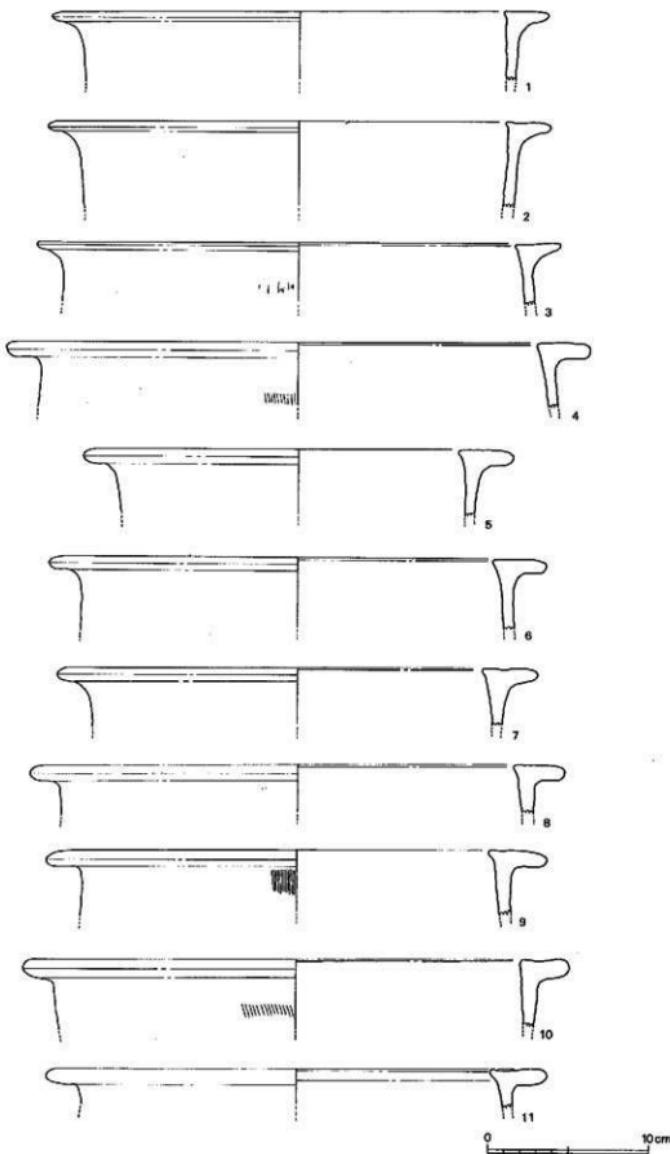
第27図 II-4区出土 (3・4は1/2)

表19 挿図遺物の特色一覧⑩

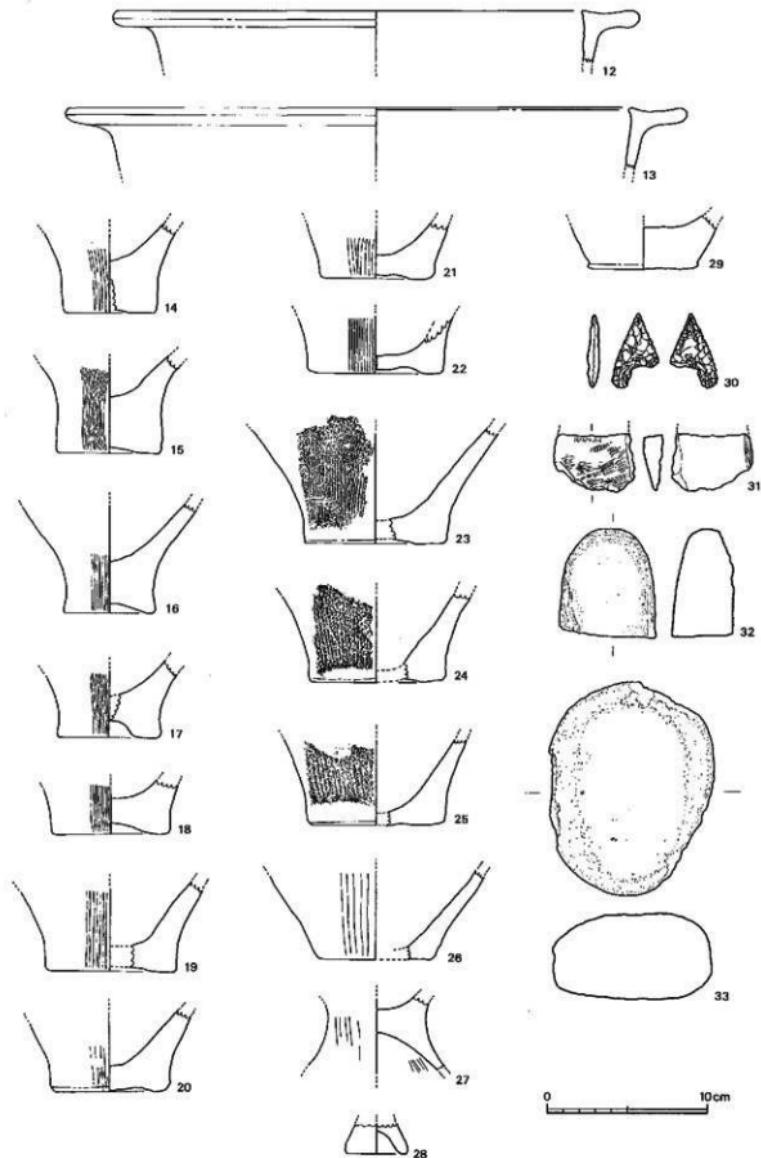
団番号	遺物名 番号と層位	遺物の特色	時 期
25-1	KII-1区 3層	I縁部平滑で、理部がやや現れみ。	弥生中期
25-2	3層	変形土器底盤片。上げ底ぎみである。	弥生
25-3	3層上面	土師器の変形土器。口縁部をつまみあげたよう突出する。外輪アーチ型。	1世纪代
25-4	2層	変形器底盤。高台のない變形器で、底部からの立ち上がりから底ぎみに伸びる。	8世纪後半 ~9世纪
25-5	2層	土師器の杯。ヘラ切り變形を行なっている。	
25-6	2層	土師器底。底部の形状は風化のため不明。	

表20 挿図遺物の特色一覧⑪

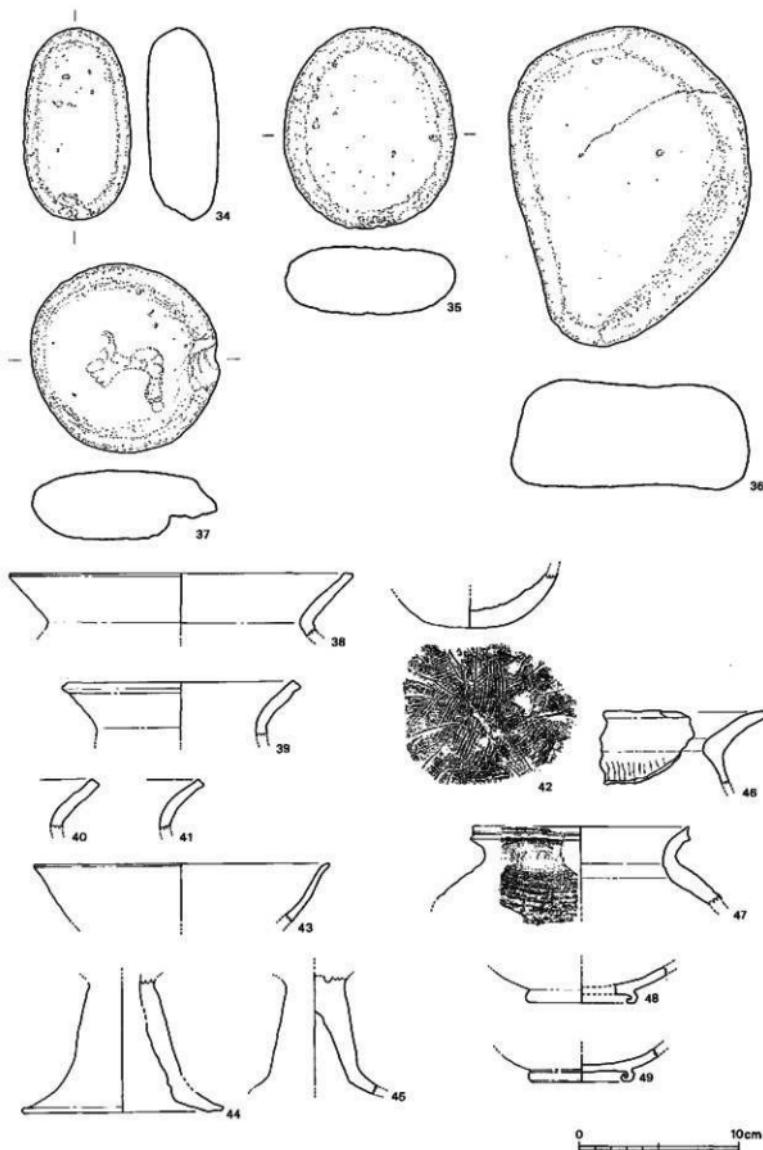
団番号	遺物名 番号と層位	遺物の特色	時 期
25-7	2層	石鏡。表面ともに細かなリグザッジ痕跡を有す。	銅鏡
25-8	KII-2区 4層a	滑石圓入の阿高系土器。太形の凹縁が底盤から斜筋の立ち上がりに認められる。	銅文中葉
25-9	4層a	リボン状突起を付す。外面赤褐色内面は灰白色を呈す。	銅鏡銅鏡式
25-10	2層	口縁部を平削になす変形土器。	弥生中期
25-11	2層	口縁部がやや波をうつ形状の変形土器。	弥生中期
25-12	2層	変形器底。底は、蓋の口縁部よりも下方に伸びる。	7世纪後半



第28図 II-5区出土①

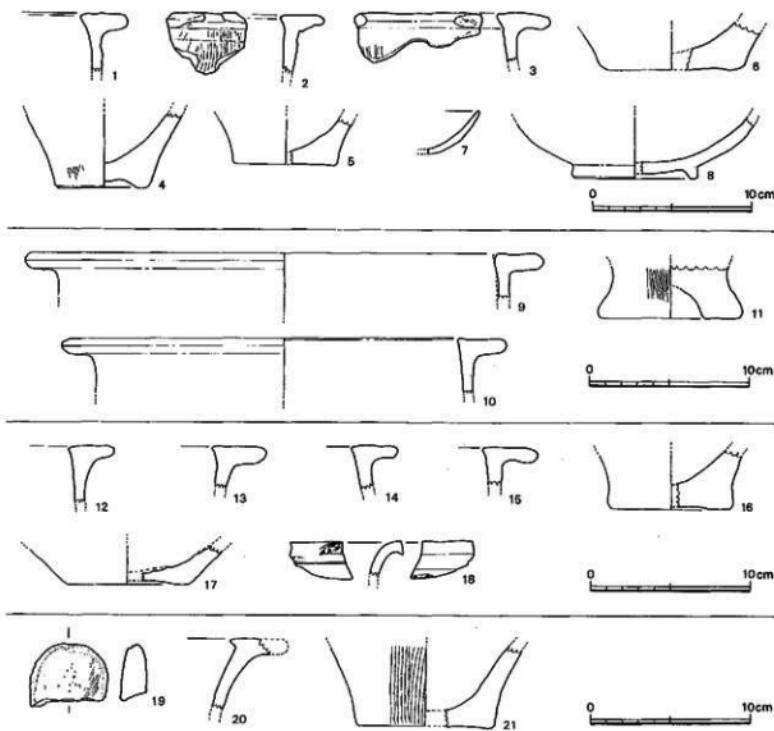


第29図 II-5 区出土(2) (30は1/2)



第30図 II-5区出土③

黒丸遺跡 T



第31図 II-6・7・8・9区出土

表23 挿図造物の特色一覧①

番号	造物名称 番号と層位	造物の特色	時期
29-15	3層	29-14と同じ形態の土器。要形土器。	
29-16	3層	要形土器。底部の厚み減り凹みが深くなる。	
29-17	3層	要形土器。底盤に明瞭な凹みをつける。	
29-18	3層	要形土器。29-17同様に底盤に明瞭な凹みをつける。外縁の研毛目整形成れる。	
29-19	3層	要形土器。29-17と同様の形態で研毛目がある。	
29-20	3層	要形土器。29-17と同様の形態。	
29-21	3層	要形土器。29-17と同様の形態。	
29-22	3層	要形土器。29-17と同様の形態をなすが、底盤の厚みが平緩する。	
29-23	3層	要形土器。29-17と同様の形態。	

表24 挿図造物の特色一覧②

番号	造物名称 番号と層位	造物の特色	時期
29-24	KII-5 3層	要形土器。29-17と同様の形態。	
29-25	3層	要形土器。底部中央部が削落したため凹の形態でない。底盤の厚みは、29-14に比較して薄い。	
29-26	3層	要形土器。底部を平坦となし、厚みも29-14-29-25の土器に比較して薄い。研毛目が薄く見える。	
29-27	3層	要形土器。研毛目がある。	無腹系
29-28	3層	要形土器ミニチュア。研毛目がある。	黑腹系
29-29	3層	要形土器。底盤を平坦作り外縁ナゲ整形。	
29-30	3層	石器。比較的長めの脚で正面右側の脚は欠損する。石器の整形は中央部に向かって削離を繰り返し、その後、底部に密かなリッタチを施す。	

表25 挿図遺物の特色一覧①

遺構名	遺構名	遺物の特徴	時代
番号	番号と層位		
29-31	KII-5区 3 層	片持石斧。蛇文斧を石材とする。小片として残り、全形を残していないが正面の左側縁に磨きの被施がある。	
29-32	3 層	スリ石。硬質砂岩を利用し、上面と右側面に使用痕を認める。	
29-33	3 層	四石。正面の中央部に浅い凹み残る。	
29-34	3 層	卯き石。下部に斜打の痕跡を認める。	
29-35	3 層	スリ石。海安山岩を石材とし、正面の全面を浅く平坦に使用する。	
29-36	3 層	石皿。周辺部から中央へ凹が深くなる。	
29-37	3 層	スリ石。裏面の中央部に浅く平坦となる使用痕を認める。	
29-38	3 層	土師器の底。口縁部が舟曲し、口唇部が浅く凹んで残る。	4世紀中葉
29-39	3 層	土師器の底。口縁部がやや屈曲し、口唇部が浅く凹んで残る。	4世紀中葉
29-40	3 層	土師器の底。口縁部がやや屈曲し、口唇部が浅く凹んで残る。	4世紀中葉
29-41	3 层	土師器の底。口縁部が浅く凹んで残る。	4世紀中葉
29-42	3 层	土師器の底。底盤が丸底になり扇毛目彫を行っている。内面は、指によるナゲの痕跡を残す。	4世紀中葉～後半
29-43	3 层	土師器の高杯。柄の体部は、丸みを持って立ち上がり、口縁部で開口する。	5世紀前半
29-44	3 层	土師器の高杯。脚部はあたり、低い窓部の境から屈曲して体部へ立ち上がり、中央部がやや膨らむ。	5世紀前半
29-45	3 层	土師器の高杯。比較的短い脚で、底部の肩を欠いている。初部の丸みから屈曲して立ち上がり体部中央部からやや膨らむ。	5世紀前半
29-46	3 层	土師器の底。口縁部が大きく外反し、端部は少しひきである。底部以下に横目と縦目方向に調査を行っている。	7世紀代
29-47	3 层	須恵器の腹。舌子日のタキガが外縁に認められる。内面は素引きの後を指捺でし、口縁部を拂い上げる。	7世紀後半
29-48	3 层	土師器の底。淡黄灰色を呈し、高台を内側へ折り込む。	

表26 挿図遺物の特色一覧②

遺構名	遺構名	遺物の特徴	時代
30-49	3 層	土師器の底。淡黄灰色を呈し、高台を内側へ折り込む。	
31-1	KII-6区 3 層	変形土器。口縁部を平坦とし、断面に厚みがある。	弥生中期
31-2	KII-6区 3 層	変形土器。口縁部を平坦にする。口縁内側の底部に扱がややできる。外縁に刷毛目が付く。	弥生
31-3	3 層	変形土器。口縁部が傾く。	弥生中期 後半
31-4	3 层	變形土器。底部に明瞭な凹みをつける。	弥生
31-5	3 层	變形土器。底部を平坦にする。	弥生
31-6	3 层	變形土器。底部から中央に向かって緩やかに凹む。	
31-7	3 层	土師器の底。体部から内側しながら縦筋へ立ちあがる。色調は、黄赤色を呈する。	10世紀代
31-8	2～3 层	土器の底。貼付けの高台を有し、高台内の中央部が盛り上がる。	11世紀中葉
31-9	KII-7区 3 层	口縁の中央部がややむが平頭な口縁部である。口縁部の内側の棱が明瞭でない。	弥生中期
31-10	3 层	口縁部の中央がややむが、口縁部の内側に棱がつく。	弥生中期
31-11	3 层	變形土器。底部に明瞭な凹みをつける。刷毛目が残る。	弥生中期
31-12	KII-8区 偶木 瓢	変形土器。平頭な口縁部をなし、口縁部の内側はやや厚みのある棱をなす。	弥生
31-13	偶木 瓢	變形土器。平坦な口縁部をなす。口縁部の内側は棱をなす。	弥生
31-14	3 层	變形土器。平頭な口縁部をなす。口縁部の後は見られない。	弥生
31-15	偶木 瓢	口縁上部は平頭となし、下部は厚みを持つて垂下している。	弥生
31-16	偶木 瓢	變形土器。底部がややむが、ほぼ平頭である。	弥生
31-17	偶木 瓢	變形土器。底部は、縫合から中央部へ窪む。	弥生
31-18	偶木 瓢	磁器。白土の化粧土を掛け、淡い青で絵付けをする。	近世
31-19	KII-9区 2～3 层	スリ石。蛇文岩製で上部の端に使用部分がある。	
31-20	3 层	變形土器。平頭な口縁部から長い腹部へ移行する。	弥生中期
31-21	3 层	變形土器。平坦な底部をなす。	弥生中期

5 小 結

I-1～13区は古代から中世の遺構と遺物から生活の状況が捉えられ、II-1～9区は、2層・3層の遺物の逆転状況が認められ層位での比較検討については困難と言わざるをえないが、時期については弥生中期から古墳時代初期を主体とした遺物とその前後に縄文時代と中世の遺物の出土を確認している。

以下にI区の主な遺構・遺物についての概略をまとめとして報告する。

I-1区は、柱穴60基以上を検出し、19基から遺物の共伴があった。そのうちpit1がヘラ切り底の土師器、pit4, 7, 17, 15, 24からは糸切り底の土師器が出土している。また、pit23からは玉縁の口縁部を有する白磁碗が出土している。生産用具として土鉢がpit8から出土している。土壤は、8基検

出し、中世の時期は、1号と8号があり1号からは青磁、石鍋、明代の染付が認められ8号は11世紀中葉から12世紀初頭の白磁碗VII類や滑石製石鍋が出土している。

I—2区は、124基以上の柱穴を検出し、32基から遺物等が共伴している。柱穴内の遺物はpit11の黒曜石剝片、pit 9・14の須恵器片、pit 2～6・10・12・15～17・19～22・25～36に中世の遺物を伴っている。

I—3区は、柱穴104基以上を検出し、36基から遺物の出土がある。pit17の近世陶磁器を除いた外は中世の遺物が共伴している。遺物は、白磁碗の11世紀中葉から12世紀初頭がpit 1・4にあたり、pit16・37に同安窯系青磁皿、龍泉窯系青磁小焼が出土している。その外の遺構では、石列1号から13世紀代の糸切り底の土師器が出土している。

I—4区は、柱穴84基以上を確認し、pit 5・6に繩文から弥生時代の遺物が出土している。中世は、pit 3・4・8・10に白磁、青磁、土師器、石鍋が出土遺物として上げられる。土壙は11基を数え、中世に所属する資料は、1～5号・8号がある。溝は、4基を確認し、溝3号の遺物は、玉縁口縁を有する白磁IV類、石鍋、瓦質の擂鉢、Y字口縁の陶器類が出土している。遺物から3号の使用は、13世紀代から15世紀前半までと考えている。

I—5区は、柱穴が検出されず、土壙2基と井戸1基、溝2基を検出している。土壙2号は13世紀中葉の龍泉窯系青磁片と土師器片が出土。溝3号からは、13世紀前半から14世紀初頭にかけての遺物として、糸切り底の土師器、石鍋等が出土している。

I—6区は、溝4号を検出した外は倒木痕が残るのみである。

I—7区は、柱穴81基以上を検出。遺物を出土した柱穴が11基ある。時期は15世紀代に求めることのできる資料が多くなる。

I—8区は、柱穴が43基以上あり、6基から共伴遺物の出土がある。時期は、pit 3の黒曜石剝片、pit 1・2・6が中世の遺物を伴っている。このうちpit 1からは、朝鮮系陶器が出土している。

I—9区は、柱穴91基以上を検出し、柱穴2基から白磁、土師器、弥生時代の土器があった。

I—10区は、柱穴39基を検出し、7基から遺物の出土があった。pit 6から明代の染付碗が出土、pit 3は陶器の皿、pit 5は、瓦質土器の出土がある。

I—11区から13区にかけては、柱穴や土壙等の遺構が極端に減少してくる。層からの出土遺物として滑石製石鍋、白磁、土師器、石鍋の出土があげられる。

II区については、前文で説明を行った状況であり、遺物については表19～26を参照されたい。

以上でI・II区の概略の調査結果についての報告を終えたい。

註12 大阪府教育委員会1977「陶邑II」大阪府文化財調査報告書

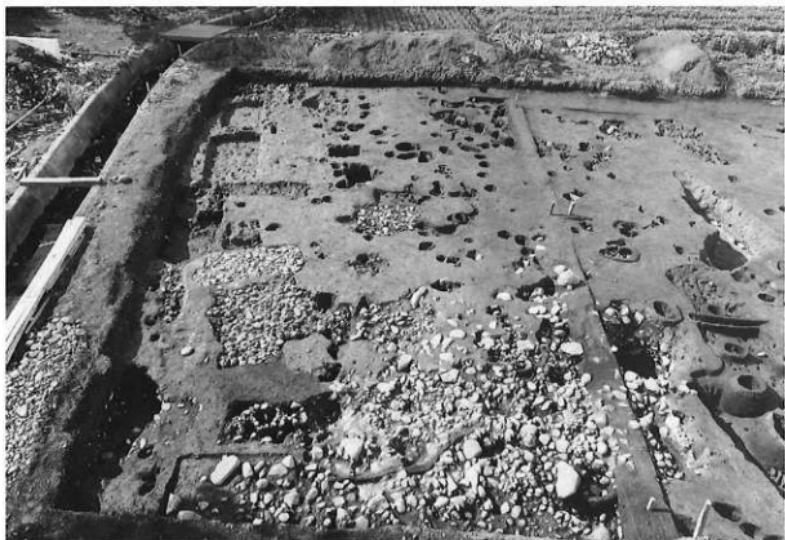
註13 森田勉1983「滑石製容器」「佛教芸術」148号

註14 茶道資料館1990「黒丸出土の朝鮮王朝陶磁」

註15 小野正敏1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」「貿易陶磁研究No.2」

註16 註9と同じ

註17 金閑怒・佐原真緒1987「第4巻弥生土器II」「弥生文化の研究」



I-1 区遺構（東より）



I-2 区遺構（東より）

図版 2



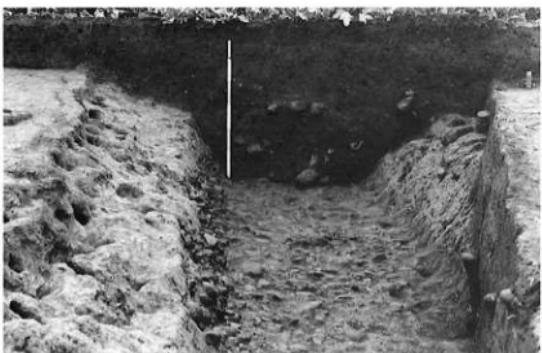
I-3区遺構（東より）



I-4・5区遺構（西より）



I—5 区 3·4 号溝



I—5 区 3 号溝東壁



I—5 区 4 号溝北壁

図版 4



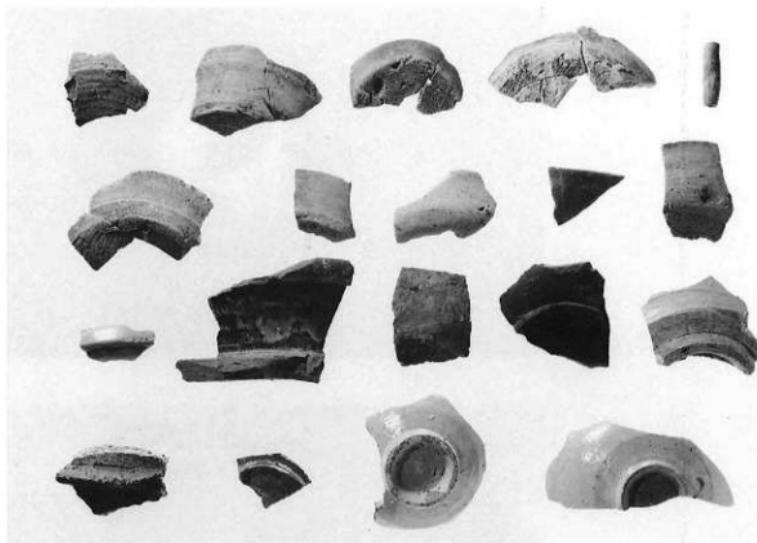
I-5 区遺構（西より）



I-7・8 区遺構（西より）



图版 6



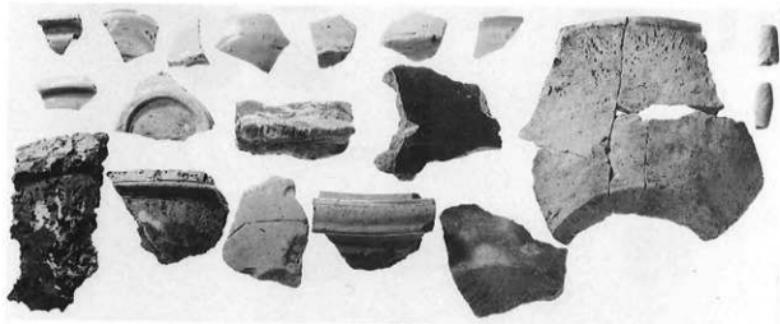
I—1 区造構出土



I—2 区造構出土



I—3 区造構出土

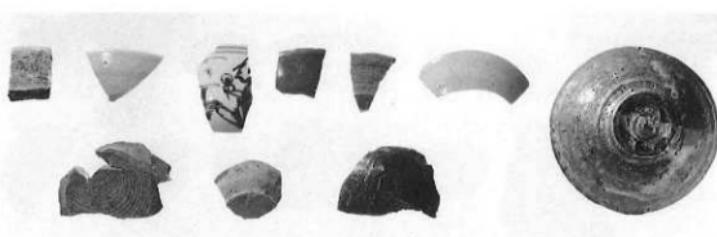


I—4 区造構出土



I—5 区造構出土

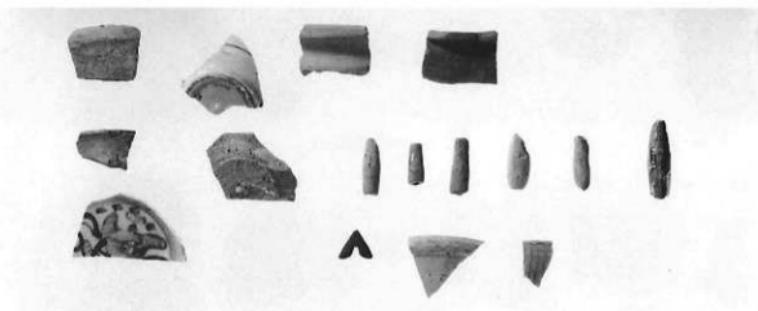
图版 8



I—6·7·8区遗構出土



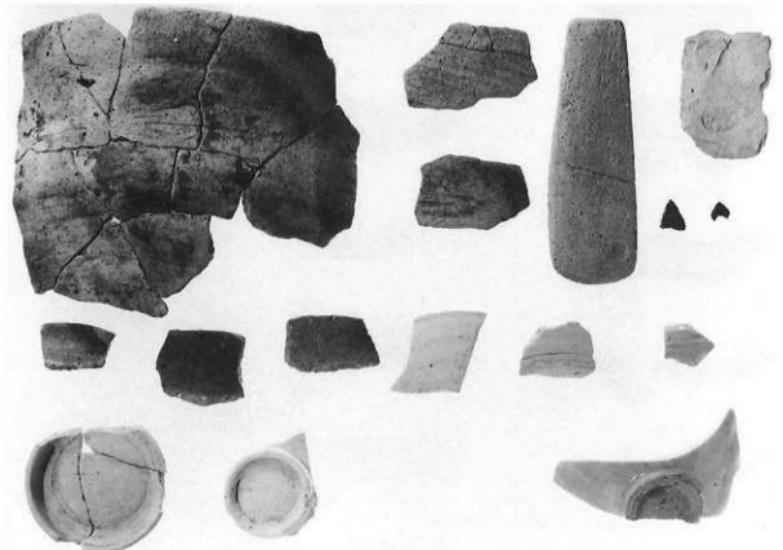
I—9区遗構出土



I—10·11·12·13区遗構出土

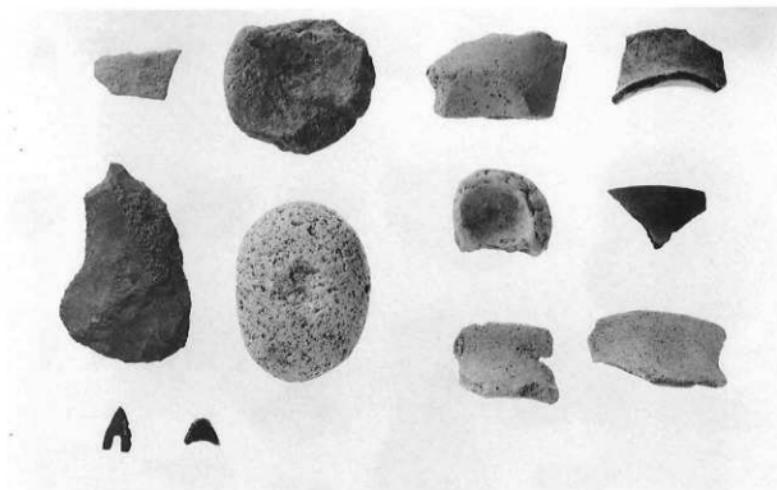


II-1・2区出土

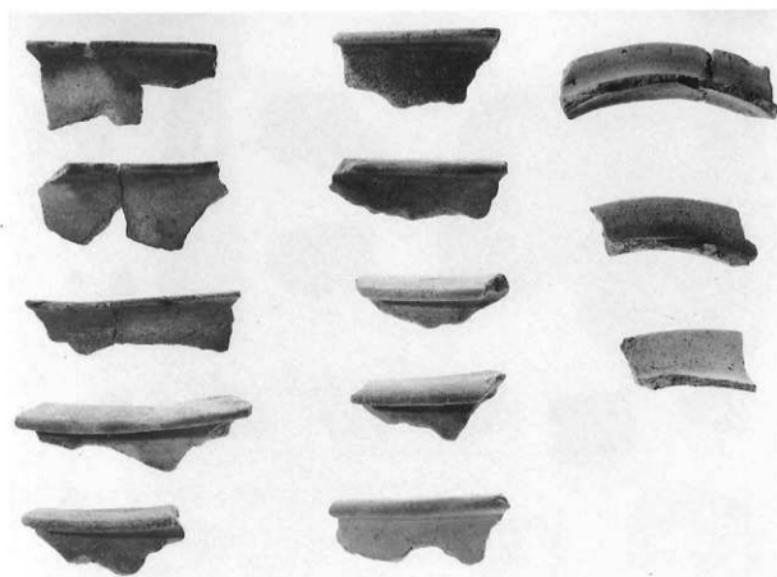


II-3区出土

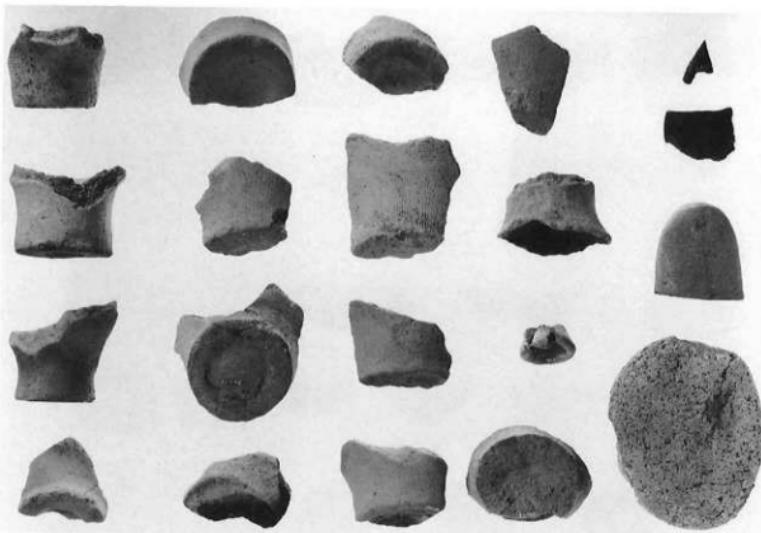
图版10



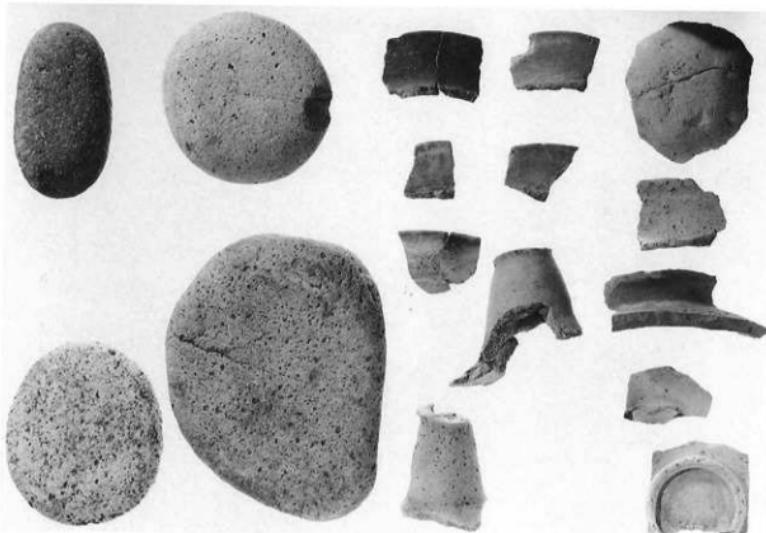
II—4区出土



II—5区出土

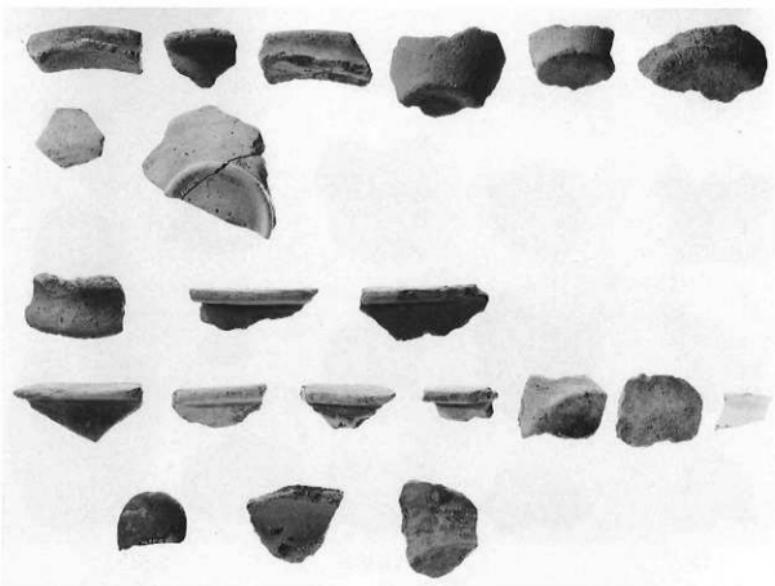


II—5区出土



II—5区出土

図版12



II—6・7・8・9区出土

第 2 部

平成 6 年度調査

I 二次調査

1 調査の概要

平成6年11月15日から平成7年2月3日に行った二次調査は、一次調査と同様、都市計画道路建設にあたっての緊急発掘調査であった。一次調査を行った地点では既に道路工事が進行しており、工事を横目に調査を実施した。

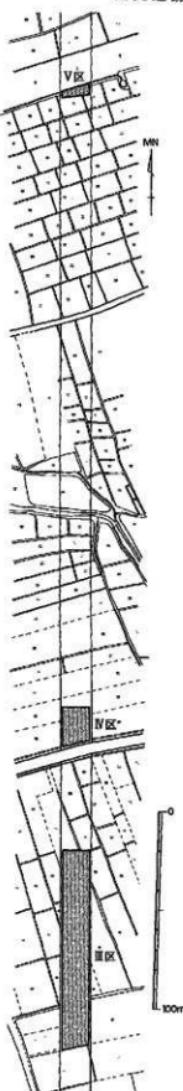
一次調査の北隣に位置する地点からIII区、III区始点より150m程北上した地点からIV区、さらにIV区より180m程北上した地点をV区、全面で1,767m²調査した。III区を南北110m、IV区を20m、V区を4mとし、各幅16mと設定した。III区は東西13m、南北10mのブロック1～11に区分り、調査面積は1,450m²である。IV区は東西13m、南北約20mとし、調査面積は250m²である。V区は、東西13m、南北5mの67m²である。

全面の表土をバックホーで深さ50m程除去し、IV、V区から精査に入った。V区は道路工事のため早急な調査を迫られたが、旧河川の近くで固く締まった礫のため、作業は一向に進展しなかった。IV区は表土下が湿った粘土層で、土層の変化は確認しづらかった。III区はバックホーで表土を剥いた時点で既に遺物が顔をのぞかせており、IV区に比べるとかなり浅い面から包含層が見られた。

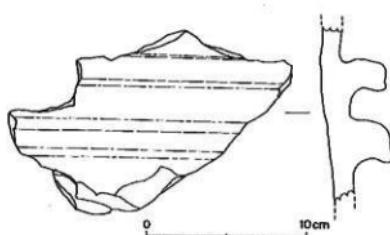
調査方法については1次調査と同様、各ブロックを層位ごとに精査し、できるだけ広い面で包含層を見ていくことにした。またブロック間の柱



第1図 調査区周辺



第2図 調査区



第3図 ビニールハウス内出土の甕洞部片

の北側とブロック東壁では土層を確認した。天候は前年に比べると穏やかで、調査予定期間に調査を終了することができた。今回も近隣に在住の方に作業を手伝っていただいたが、文化財に対する関心は高く、隣接地の地主等からもビニールハウス設置の際に出土した大型の甕洞部片等を提示していただいた。

(第3図)

2 土 層

平成2年度の範囲確認調査の際、基本的な層位を確認し、今回の調査でもほぼ同様の層位を認めることができた。大別すると、次の5層である。

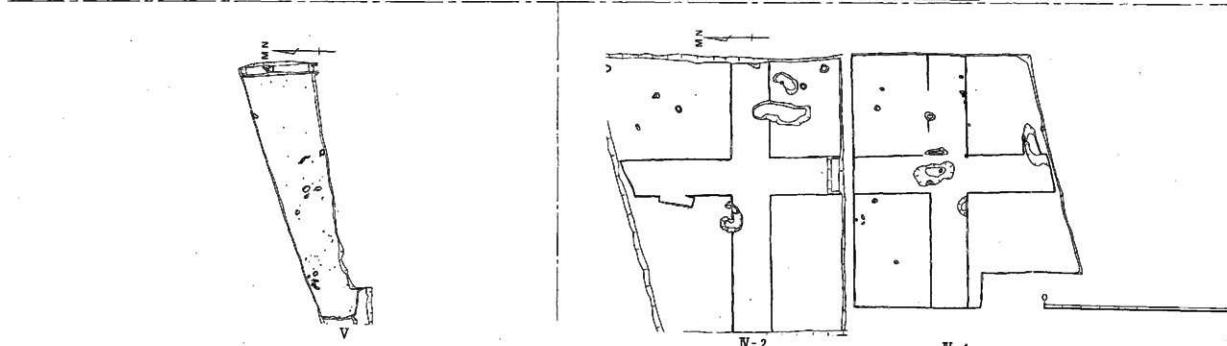
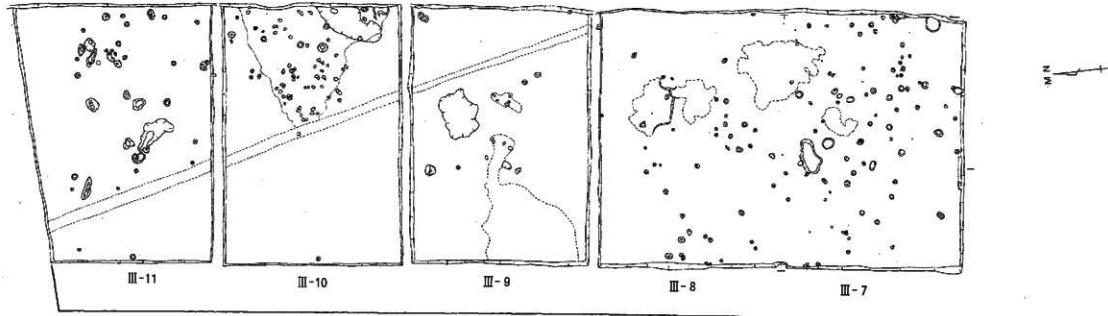
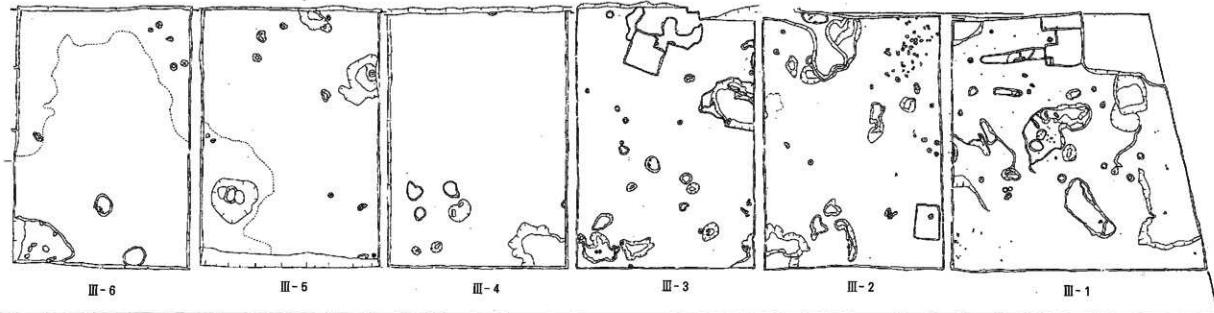
1層は耕作土層で、20cm前後の灰褐色粘質土となっている。さらに、3層との漸位層及び、搅乱層として暗灰褐色の粘質土層があり、2層とした。これら上位は、耕作による搅乱で層位は不明瞭であるが、遺物に弥生時代の石器や土器片、土師器や須恵器、青磁等をわずかではあるが出土した。

3層は黒色粘質土層で、この地区的中心的層位とみられる。縄文時代晩期から弥生時代中期の遺物を包含しており、特に弥生時代中期の遺物を多く検出した。この黒色土は、多良山系の火山活動による火山灰を起源とするものようである。3層以下は、暗灰褐色がかった粘質土層と、黄色土塊を含む褐色がかった層がみられ、各々3'、3''層とした。3''層の黄色土塊は、倒木等の根に付着した地山層の土と思われる。各々の層位で時代区分できるような特徴的な遺物は見いだせなかたが、3層と同様、縄文晩期から弥生中期にかけての遺物を検出した。

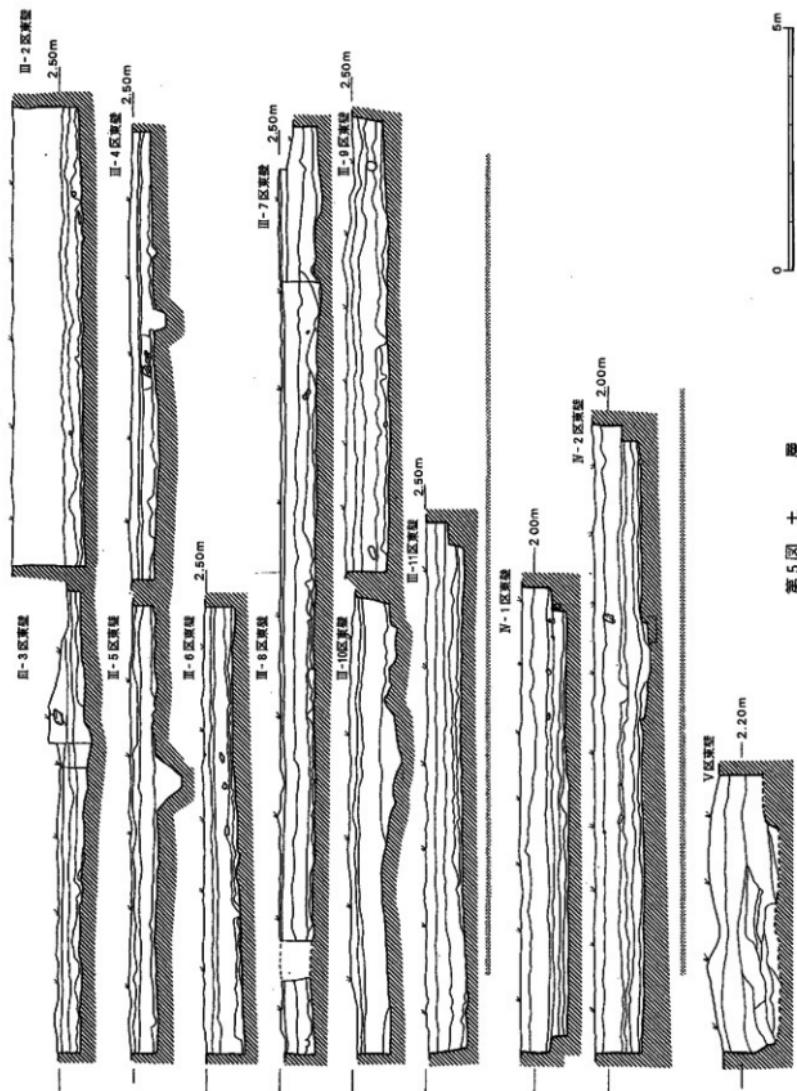
4層は淡灰褐色土層で、粘性は低く、遺構や遺物はほとんど検出されなかった。最下層を5層としたが、黄色土層で遺物は検出できず、IV区では人頭大の礫を含んでいた。

III・IV区については以上のよう層位であったが、V区では様相が異なり、旧河川の氾濫原であったためか、全体に礫が堆積していた。一部砂層や炭化物、木片等も検出されたが、明確な層位は確認できなかった。

調査区域は大村扇状地の北西端で、扇の弧に平行に道路は伸びており、山側(東)から大村湾側(西)にわずかに傾斜している。また、3層の遺物出土状況からも東部から流れ込みがあったとみられるが、層位に特別な影響は見られない。



第4図 III・IV区地図



第5圖 土層

3 造構と遺物

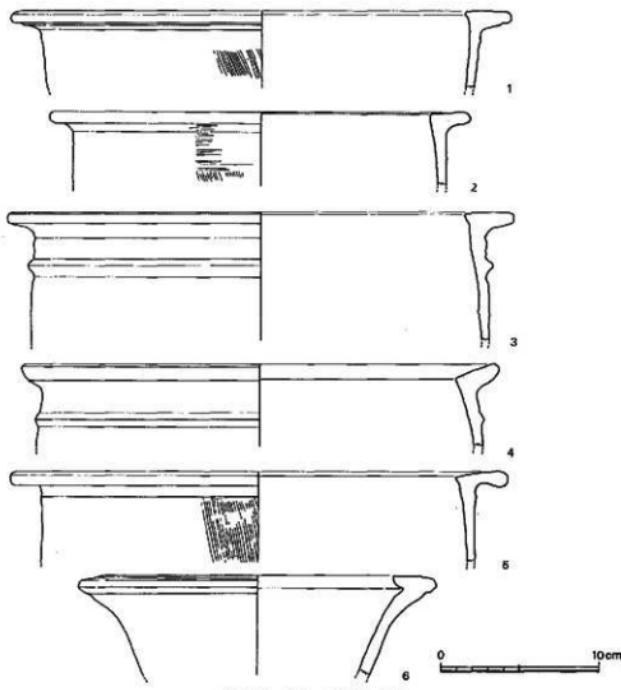
遺物は総計13,000点以上を出土したが、そのほとんどが3層からであった。しかし、III区からV区において遺構と思われるものは、III-7区3層中位とIII-9区3層中位で確認したのみで、遺物も完形のものは少なかった。遺物はIII区からの出土が最多く、IV区・V区については氾濫原であるため、比較的少量であった。

ここでは、遺構と遺物を対応させるため、各ブロックごとに説明をしたい。

III-1区

弥生土器（第6図）

1～5は、甕の口縁部である。1・2・5はしっかりした焼成で、口縁部から胸部にかけて縦方向に印毛目がはしるが、特に5は良好に残っている。3・4の突帯は断面が正三角形状で、やや丸みがある。1の口唇外面にわずかな段差がついているが、これは胎土を付け足したもので、きれいに口唇部を一周巡っていたようだ。5は、口唇部が膨らみを帯びているため、1～4よりやや新しい段階の

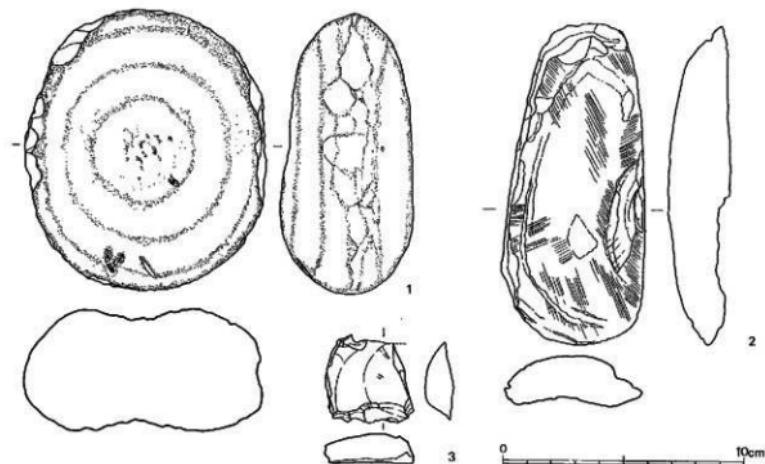


第6図 III-1区の土器

ものであろう。6は壺の口縁部で、堅敏なつくりである。横刷毛後、丁寧なナデが施してある。胎土は全てに白雲母が多量に含まれ、長石が微量、1を除いて石英がわずかに混在する。

石器（第7図・表1）

1は、角閃石の斑晶を多量に含む白色の安山岩で、両面中央に浅い窓みを有する。周囲に敲打痕があり、敲石としても利用されたことを示している。2は、全面が研磨された磨製石斧である。裏面中央が大きく剥落しているが、縱・横とも断面は低蒲鉾形を呈する。堆積岩と思われる。3は、削器である。



第7図 III-1区の石器

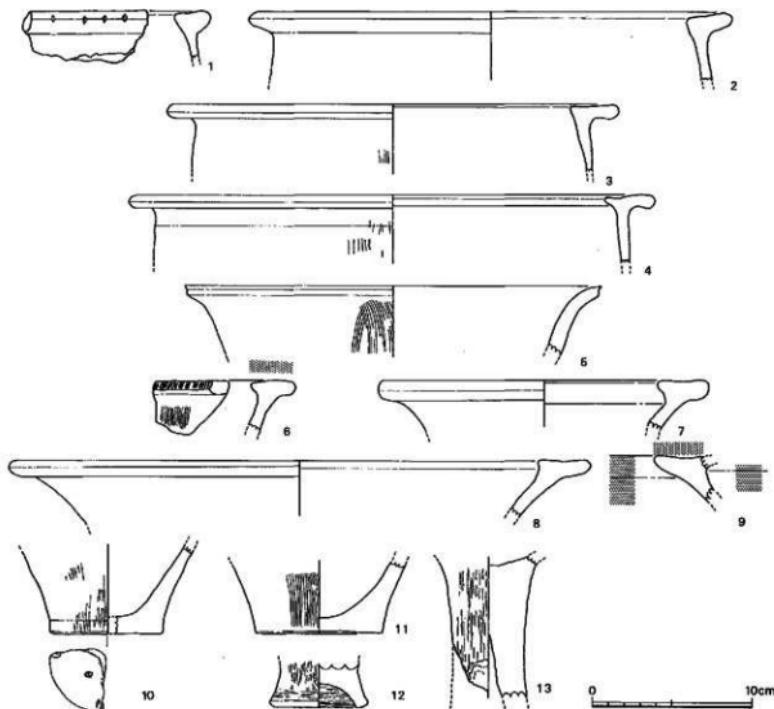
表1 III-1区石器組成表（長さ、幅、厚さはmm・重量はg）

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第7図1	凹石	安山岩	116	99	55	750	
2	磨製石斧	砂岩か	145	59	21	258	
3	削器	木蛋白石	36	36	11	16	

III-2区

弥生土器（第8図）

全てに白雲母が混入している。1～4と9は、甕である。1は、亀ノ甲式と思われる口縁部である。口唇に浅い刻み目が不等間隔で巡っていて、断面三角形になっている。2は石英を含み、口唇はやや内傾している。色調は黄灰色で、金雲母をかなり含む。4は錐形を呈し、口唇外側がやや下がる。5～8は壺の口縁部である。5は、金雲母を含む。外側には縦方向に刷毛目がはしり、ナデ消しはなされていない。6～8は錐形口縁を呈する。6は、口唇部が丹塗りされ、側面に細かい刻み目がはいる。



第8図 III-2区の土器

角閃石が混入されている。7は堅緻なつくりになっている。9はさらに口唇が伸びる臺で、全面丹塗りされている。10～12は臺底部である。いずれも刷毛目が明確に残り、10の底にはモミ圧痕が残っている。13は高环の脚部で、摩耗しているが、刷毛目がわずかに残存する。

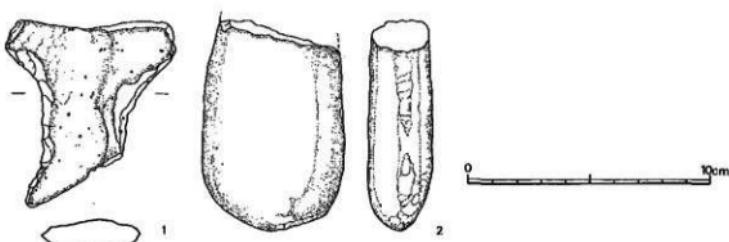
石器（第9図・表2）

1は、いわゆる分銅形といわれる打製石斧の基部と思われるものである。板状節理片を素材として胸部両側に大きな抉り込みを施しており、刃部欠損のため形状は明確でない。2は、扁平な円錐を素材とした敲石である。下端部・側面のみ利用している。

III-3区

弥生土器（第10図 1～9）

全て壺の破片と思われるものである。1は、ややシャープな断面三角形の突帯が口縁下を巡っている。金雲母を微量含んでいる。2は角閃石・白雲母を混入し、かなり堅緻なつくりをしている。外面に幅広の刷毛目を残し、内面にモミ圧痕を有する。3・4は内傾し、外面にやや幅広の刷毛目が残る。



第9図 III-2 区の石器

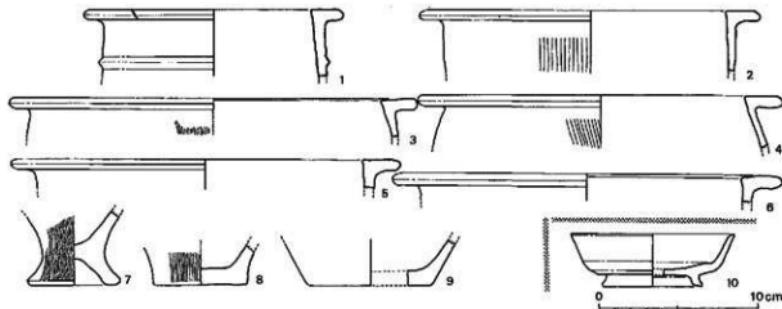
表2 III-2 区石器組成表 (長さ、幅、厚さはmm・重量はg)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第9図1	打製石斧	安山岩	77	70	41	61	刃部形状が不明
2	敲石	安山岩	86	59	26	211	下端部・側面に使用痕

3は摩耗しているが、双方とも堅緻なつくりである。4には金雲母が混入されている。5・6は口唇内面を粘土でやや肥大きせている。6の胎土には角閃石が混入している。7～9は壺底部と思われるものである。7は台付壺の底部で、刷毛目が明確に残る。胎土に角閃石を含む。8・9は比較的底が薄く、胎土に長石を含む。

須恵器 (第10図 10)

杯身が出土している。色調は内壁が淡赤橙色、外壁が明赤灰色を呈し、内部に粗い刷毛目が残る。高台の壺付きは平坦になっていて、小田編年の第VII B期に相当するものと考えられる。7世紀末から8世紀初頭であろう。

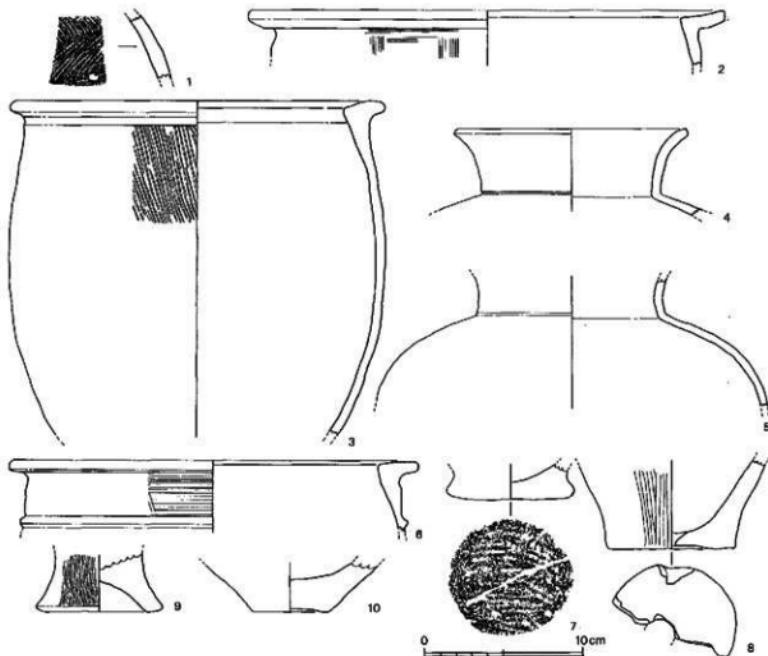


第10図 III-3 区の土器

III-4区

弥生土器（第11図）

1は、貝殻施文の上に丹塗りした壺と思われる土器で、板付II式に含まれる前期のものである。裏面も塗っていたと考えられるが、器面が剥離しており、特定できない。胎土には、金雲母が少しと石英が多く混入している。2・3および6は、壺の口縁部から胴部にかけてである。2は、口唇内壁に鋭い稜を形成し、やや反っている。胎土には金雲母・白雲母を多く含む。3は胴部に明確に刷毛目を残し、器壁が薄い。金雲母・角閃石を含み、口唇は若干垂れる。6は口唇内壁が内傾し、口縁は平坦である。口縁下に断面半円形の突帯を持っている。胎土に金雲母と砂を多量に含み、あまり堅緻ではない。4・5は丁寧に研磨された壺の口縁から胴部分である。口縁部には横方向に刷毛目が施され、頸部つけねにヘラによる沈線が巡る。双方とも胎土に金雲母を含み、堅緻なつくりである。4は外面の色調は赤色だが、胎土と外面の色調が異なり、丹塗りか胎土によるものかは肉眼で判別できない。5は胎土が赤色であるため、丹塗りとは思われない。7～9は壺と思われる底部である。7は平底で、底面に編物痕が、内面にモミ压痕が残る。弥生前期と思われる。8は胎土に長石・白雲母を混入し、



第11図 III-4区の土器

底に穿孔する。9は、台付壺の底部である。丁寧な器面調整を施す。胎土に白雲母・石英を含み、色調は黄灰褐色である。10は壺の底部で、外面に粗雑なミガキを施す。

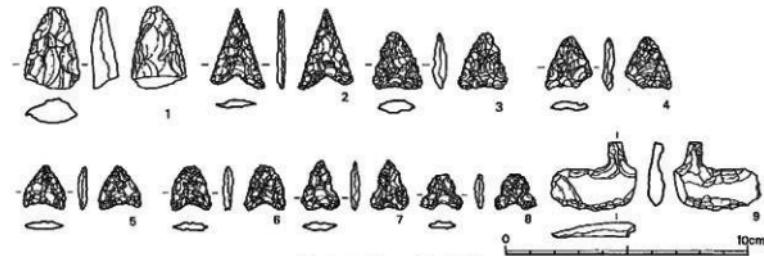
石器（第12図、表3）

1～8は狩獵具系列の石器である。1は尖頭器で、全体を丁寧に加工している。2～8は石鎌である。8は基部抉入が浅く、胸部両側に抉り込みを施しているため、脚部が突出状を呈している。9は、刃部形成時につまみを作出した石匙である。小形ではあるが、両面加工を施す。正面右側は欠損している。

III-5区

弥生土器（第13図 1～7）

1～6は壺の一部である。1は断面三角形の亀の甲型の口縁である。口唇にかけてやや外反し、口縁下に薄く幅広の刷毛目を残す。胎土に砂をほとんど含まず、堅緻である。2・3は口唇が平坦で、やや内部に張り出す。胎土に金雲母・白雲母を混入し、色調は赤色である。4は口唇内壁に張り出しをもつ鋸形口縁である。口唇調整のために、やや凹んでいる。胎土に金雲母・石英を含む。5・6は底部で、やや上げ底を呈し、刷毛目を残さないほどナデを施す。胎土は類似しており、角閃石・雲母・石英を混入する。7は土師質の土鍤で、胸部中心がやや膨らみを帯びているため、b類である。



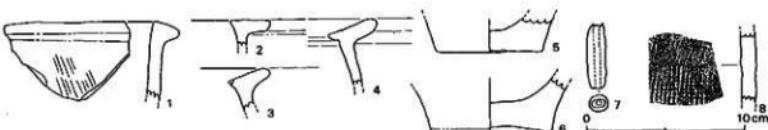
第12図 III-4区の石器

表3 III-4区石器組成表（長さ、幅、厚さはmm・重量はg）

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第12図 1	尖頭器	サヌカイト	31	23	4	6.8	丁寧な両面加工
2	石鎌	暗灰色黒曜石	28	22	3	1.1	入念な二次加工
3	石鎌	黒曜石	23	22	5	1.9	
4	石鎌	黒曜石	22	19	4	1.3	
5	石鎌	黒曜石	18	22	3	0.8	
6	石鎌	黒曜石	18	17	4	0.9	
7	石鎌	黒曜石	21	15	3	0.8	
8	石鎌	黒曜石	15	17	3	0.5	
9	石匙	不明	28	35	6	4.7	横長削片を二次加工

須恵質土器 (第13図 8)

8はかなり摩耗した須恵質土器である。刷毛目調整の後、格子目タクキを施しナデ消しているが、裏面にはタクキ目を確認できない。しかし、凹みが各所に認められ、無文当て具を使用したものと考えられる。軟質で、8世紀以降の製作であろう。



第13図 III-5 区の土器

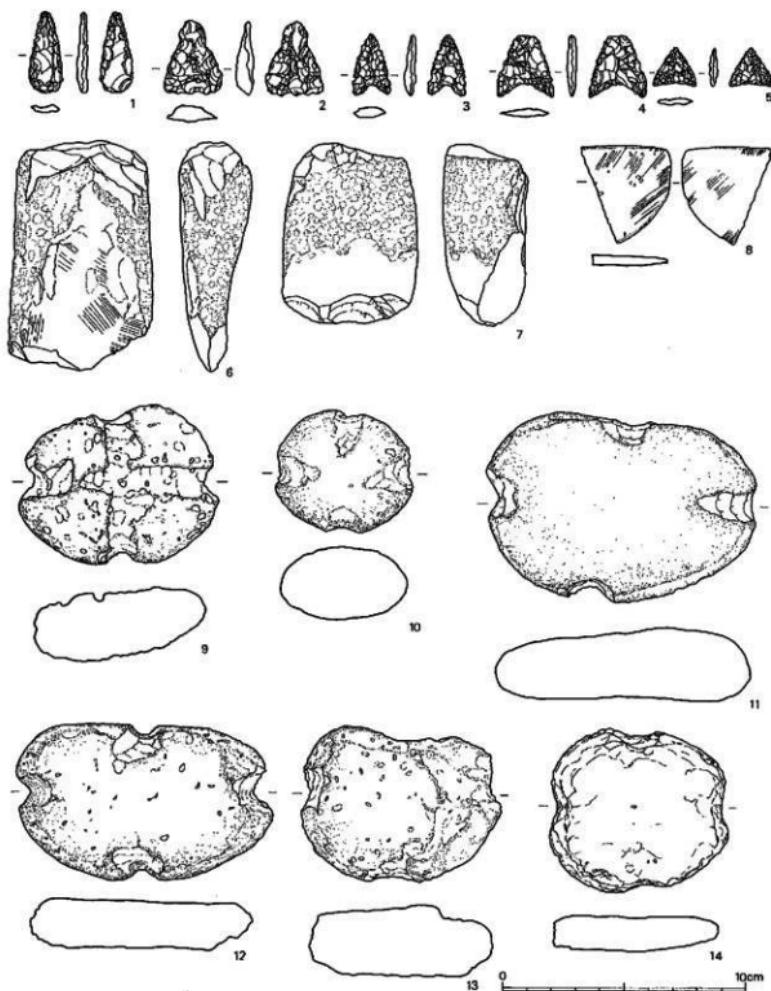
石器 (表4・第14図)

1を除いて、2～5は黒曜石製である。1は、縦長剝片の両側両面に二次加工を施している。2は、やや厚手の剝片を素材とし、頭部両側にゆるい抉入加工を施す。3は両面とも入念に加工している。4は尖頭部が欠損しているが、極めて薄く仕上げられている。5も4と同様なつくりで、先端・脚部は鋭利に調整されている。6・7は太形蛤刃石斧と思われる磨製石斧である。6は剝部に敲打整形を施した後、丁寧に研磨して刃部を作出している。基部は両面から剝離調整されており、背面は使用中の欠損と思われる刃部側からの大きな剝離面がある。7は、円礫を敲打整形した後研磨したものである。刃部に大きな剝離面がみられ、使用中の欠損か再加工のため形成されたものかは確認できない。

表4 III-5 区石器組成表 (長さ、幅、厚さはmm・重量はg)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第14図1	石鎌	不明	33	13	3	1.6	縦長剝片を利用
2	石鎌	黒曜石	30	16	6	3.9	尖頭部は作山されず
3	石鎌	黒曜石	25	16	4	1.2	部分的に網齒状に加工
4	石鎌	灰色黒曜石	25	24	3	1.5	丁寧な平坦剝離
5	石鎌	暗灰色黒曜石	16	18	3	0.5	4と同様の丁寧なつくり
6	磨製石斧	頁岩	95	59	30	250	太形蛤刃石斧
7	磨製石斧	玄武岩	74	56	34	220	太形蛤刃石斧
8	石庖丁	不明	40	37	4	7.3	全面に丁寧な研磨。刃部は片刃
9	石鎌	安山岩	83	65	28	150	両面に十字形の溝
10	石鎌	安山岩	3	50	30	91	
11	石鎌	安山岩	101	78	30	330	
12	石鎌	安山岩	105	64	25	190	
13	石鎌	安山岩	83	64	29	190	
14	石鎌	結晶片岩	72	67	14	112	

8は安山岩質と思われる石庖丁で、全面を丁寧に研磨されている。9・10は有溝石錐、11～14は切目石錐である。9～13は円砾を利用している。9は長軸・短軸双方に十字形に敲打整形を、10は切り込み部分から長軸短軸方向で敲打整形を施している。11～14にも切り込み部分から敲打整形が施されている。



第14図 III-5区の石器

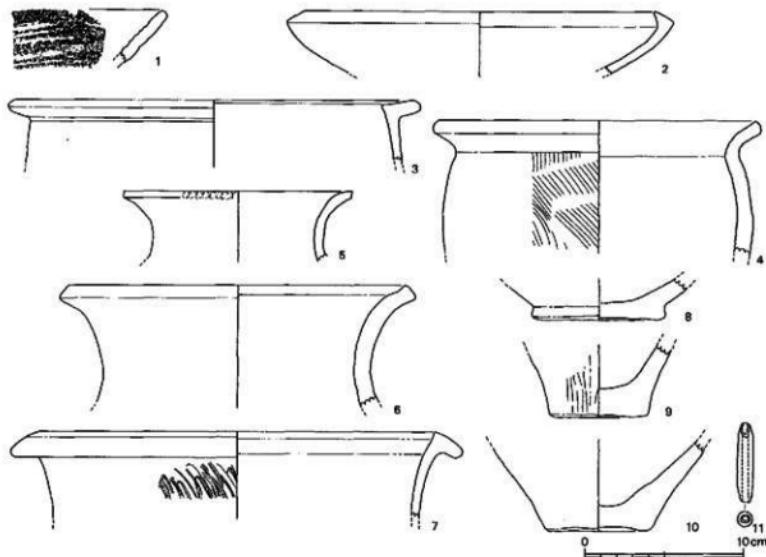
III—6 区

縄文土器 (第15図 1・2)

双方とも縄文晩期の土器である。1は、胎土に結晶片岩・白雲母を多量に混入する粗製土器の口縁部分である。両面に条痕がみられるが、外側はナデ消している。口唇先端はヘラ等でナデて平らにしている。2は、丁寧に磨かれた精製浅鉢である。胎土に白雲母を混入する。

弥生土器 (第15図 3~11)

3・4・7は壺の口縁部である。3は堅緻なつくりで、口縁下にヘラ書きと思われる細く浅い沈線が巡る。口唇は若干凹み、口唇内側にはわずかに粘土が張り出している。4は幅広の刷毛目を施し、ナデ消している。口唇内側はヘラでナデている。胎土に長石を含む。7はかなり外反した口縁で、龜の甲型が下方にやや伸びた状態の口縁と思われる。外面はナデ後、ヘラ具を使用している。胎土には、砂を多く混入している。5・6は同時期と思われる壺の口縁部である。5はかなり磨滅しているが、口唇に型押ししたような跡が残っている。角閃石が多く混入している。6は焼成が良好で、重厚なつくりになっている。調整は横方向の刷毛目を施しているが、内壁下半分に指跡がみえる。8は底部が扁球形に近い壺の底部である。9・10は若干上げ底の壺の底部である。9には縦方向の刷毛目がみられるが、10の刷毛目調整はナデ消してあるようだ。11は細い扁平梢円の土鍤で、b類と考えられる。



第15図 III—6 区の土器

石器（第16図・表5）

1~25は石鏃である。1・2はかなり肉厚なもので、加工が粗い。3・4は1・2ほど厚さはないものの、共通点が多い。5は円基鏃で、先端部より基部を重点的に加工している。8は、左右ほぼ同位置に抉り込みを施した鋸歯鏃である。10~15は平面概形を正三角形とするもので、基部に弧状の抉りを施す。16~24においても同様なつくりである。25は剝離調整された後、研磨されており、正面左側に櫛状剝離が走っている。26は石庖丁で、かなり破損しているが所々に研磨痕が残る。27は先端部が欠損しており、全長は不明である。28は、図裏面に刃部形成の剝離を施した後、各所に研磨を施した磨製石斧と思われるが、刃部調整が不完全であったため、基端の敲打痕から敲石に転用したものと考えられる。29は、円錐の長軸・短軸に抉り込みを施した石錘である。30は碧玉製の管玉で、北九州型のIV式と思われる。31は抉状耳飾と思われる破片には、修正孔が貫通している。30・31については、1、2点とわずかなため、考察は困難である。

III-7区

弥生土器（第17図 1~14）

1~3は前期の壺脛部と壺口縁部の破片である。1は外面を丁寧にナド調整した後、ヘラ書き沈線を施したもので、やや粗雑なつくりになっている。2は如意形口縁で、口縁の下端にヘラで断面V字の刻み目を入れており、四反田遺跡ではAaに分類されている。3・5・7は亀の甲型の口縁部である。3は断面三角形の口縁部で、細く鋭い刻み目が巡っている。胎土には砂が多く混入し、かなり粗雑なつくりになっている。5・7は刻み目がない口縁で、7は鋭い口縁と突帯をもつ。色調は3・5が赤褐色だが、7は淡灰褐色を呈する。1・2は前期後半、3は下ても中期初頭と思われる。8・9は口縁下に突帯をもつ壺の口縁部で、8の突帯の方が比較的鋭利である。8の口唇はかなり内傾しており、脣部上位が張るようだ。9は粗雑なつくりで、器壁がかなり薄い。脣部最大径は8より下部である。口縁下端が若干肥大する傾向にある。4・6は中期前半と思われる壺である。4の外面には横方向の刷毛調整後、縦方向のミガキが施され、堅敏なつくりとなっている。6は比較的粗雑に形成されている。口縁下端に浅い刻み目を巡らしている。10~14は壺あるいは壺の底部である。10は外面の刷毛調整後、縦方向にヘラ撫でを施す。12は焼成後、道具を使用して底部に穴を穿ったようなタタキ跡がみられる。

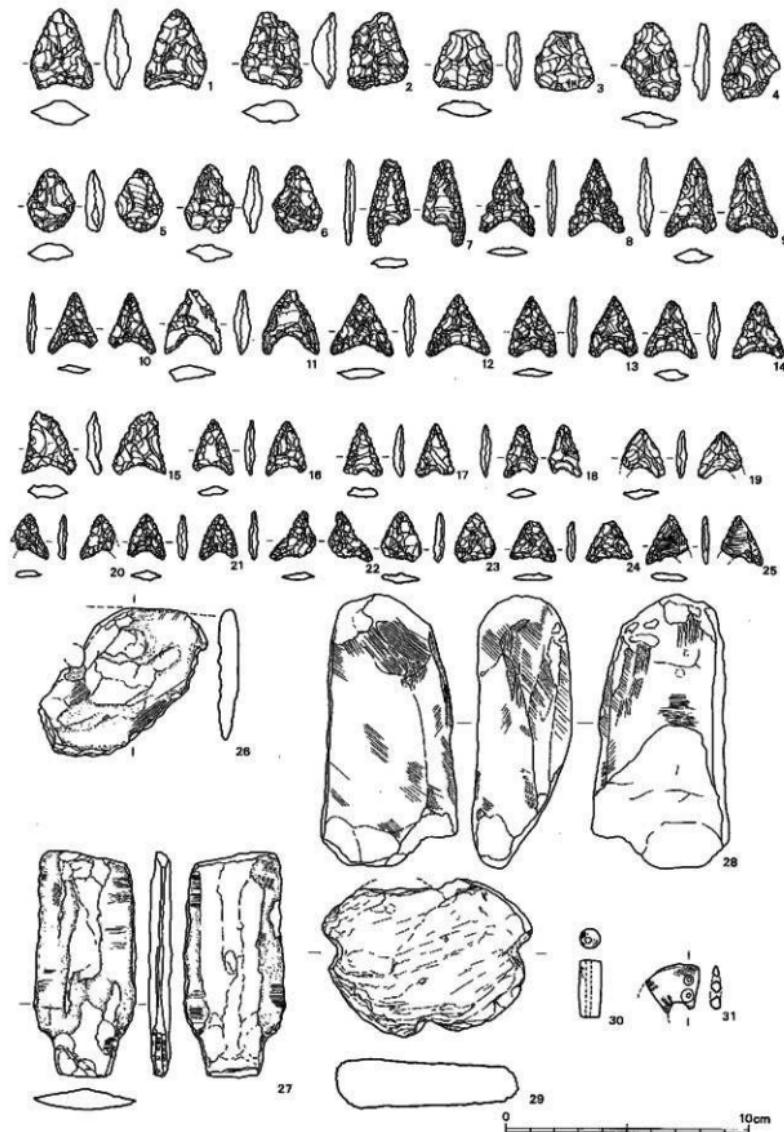
その他の土器（第17図 15~17）

16は、口唇外面に丹がわざかに残る布留式系統の壺口縁部である。胎土には白雲母・長石を多量に混入し、弥生土器のような粗雑な仕上がりである。胎土の様子から、在地でつくられた土器であろう。17は底部にヘラで削った跡があり、やや丸みを帯びているため、在地系の土師杯と思われる。口縁はわざかに外反しており、また、脣部中央から底部にかけて肥大しているため、4世紀末から5世紀前半のものと考えられる。15は揚子江型土錘とみられるが、用途不明の土製品である。

石器（第18・19図 表6）

剝片石器において、この調査区では、同一層から三稜尖頭器が出土している。自然面打面から剝出

黒丸遺跡 1



第16図 III-6区の石器

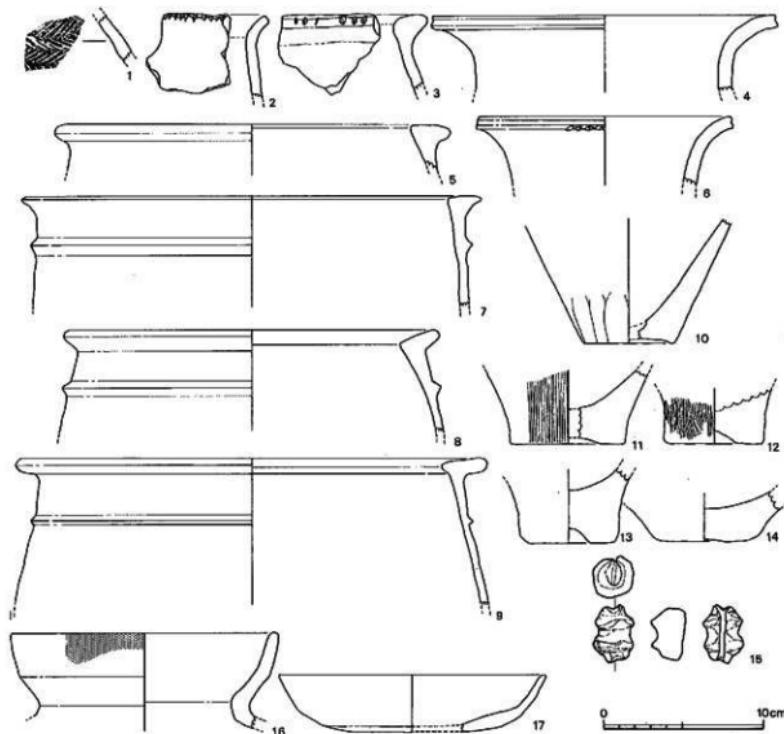
表5 III-6区石器組成(長さ、幅、厚さはmm・重量はg)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第16図1	石鎌	暗灰色黒曜石	33	26	10	5.5	大形で加工が粗い
2	石鎌	黒曜石	32	24	9	6.0	大形で尖頭部は作出されず
3	石鎌	サヌカイト	24	22	6	3.3	大形で加工が粗い。先端部欠損
4	石鎌	黒曜石	32	23	6	3.3	大形で加工が粗い
5	石鎌	黒曜石	26	19	7	2.9	
6	石鎌	黒曜石	28	20	7	2.4	両脚部欠損
7	石鎌	黒曜石	36	17	4	2.0	鋸形鎌に近似。脚部欠損
8	石鎌	黒曜石	32	23	3	1.4	丁寧な両面加工
9	石鎌	サヌカイト	33	21	6	2.3	脚部欠損
10	石鎌	暗灰色黒曜石	25	20	3	0.7	基部に弧状の抉り込み。脚部欠損
11	石鎌	暗灰色黒曜石	26	23	6	2.1	基部に弧状の抉り込み
12	石鎌	暗灰色黒曜石	25	26	4	1.5	平面概形が三角形状
13	石鎌	黒曜石	30	20	3	1.0	脚部欠損
14	石鎌	黒曜石	23	21	5	1.2	
15	石鎌	灰色黒曜石	26	22	5	2.4	
16	石鎌	サヌカイト	23	16	4	0.9	
17	石鎌	暗灰色黒曜石	22	16	4	1.0	
18	石鎌	黒曜石	22	14	3	0.7	脚部欠損
19	石鎌	安山岩	19	27	4	0.9	
20	石鎌	黒曜石	18	14	3	0.5	
21	石鎌	灰色黒曜石	19	16	4	0.7	脚部欠損
22	石鎌	黒曜石	20	13	3	0.6	
23	石鎌	黒曜石	20	16	4	0.9	脚部欠損
24	石鎌	黒曜石	16	19	3	0.7	
25	石鎌	灰色黒曜石	20	17	3	0.8	局部磨製で横状剥離あり
26	石庖丁	泥岩	69	46	8	37	研磨痕あり。刃部は両面からの剥離加工
27	磨製石剣	泥岩	92	41	9	43	一部明確な稜線あり
28	磨製石斧	蛇紋岩	112	56	41	354	各所に研磨痕・頭部に敲打痕あり。木製品
29	石鍬	結晶片岩	96	65	20	139	
30	管玉	深緑色碧玉	24	9	8	2.9	
31	抉状耳飾	不明	19	22	6	2.2	

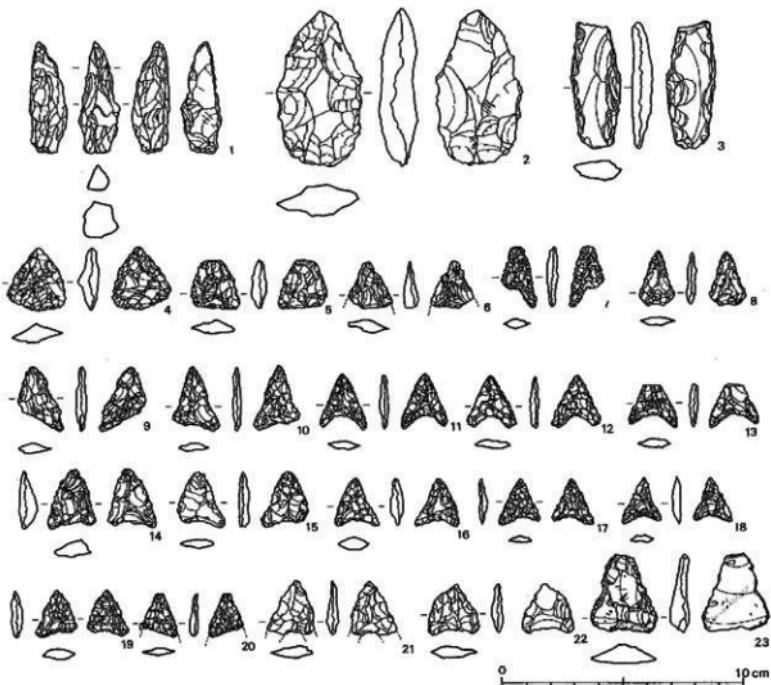
黒丸遺跡 I

した縦長剝片に、主に主要剝離面側からのプランティングを施したものである。加工は上半部に集中し、基部付近はパルプを除去したような剝離面を残す。先端部に摩耗痕が認められることから、後に石錐に転用したものと思われる。2・3は木葉形尖頭器である。肉厚であるため尖頭部に銳利さがない。3は翼状の横長剝片の両側に両面加工を施す。石槍あるいは石鎌を意図しているものと思われる。4~23は石錐である。円基錐4や基部が直線的なもの5があるが、ほとんどが弧状の抉り込みをしている。16の研磨痕は中央部の厚さを薄くするための処置と考えられる。23は、剝片の両側面に主要剝離面からのみ二次加工を施したもので、未製品と思われる。

大陸系石器・砾石器については、第19図であるが、1は鏽を有しない全面磨製石錐で、断面は極めて薄く扁平に作られている。2は磨製石庖丁で、刃部は両面から研磨されている。両側辺は素材の断面を残しているため破損品のようにみえるが、断面と平坦面が交差する稜部には摩耗痕が認められ、この状態で使用されたものといえる。3は片刃磨製石斧で、刃部には微細な刃こぼれ状の剝離痕を残



第17図 III-7区の土器



第18図 III-7区の石器①

す。基部と刃部は胸部と比較して光沢が強く、着柄および切削作業によって生じたものと思われる。

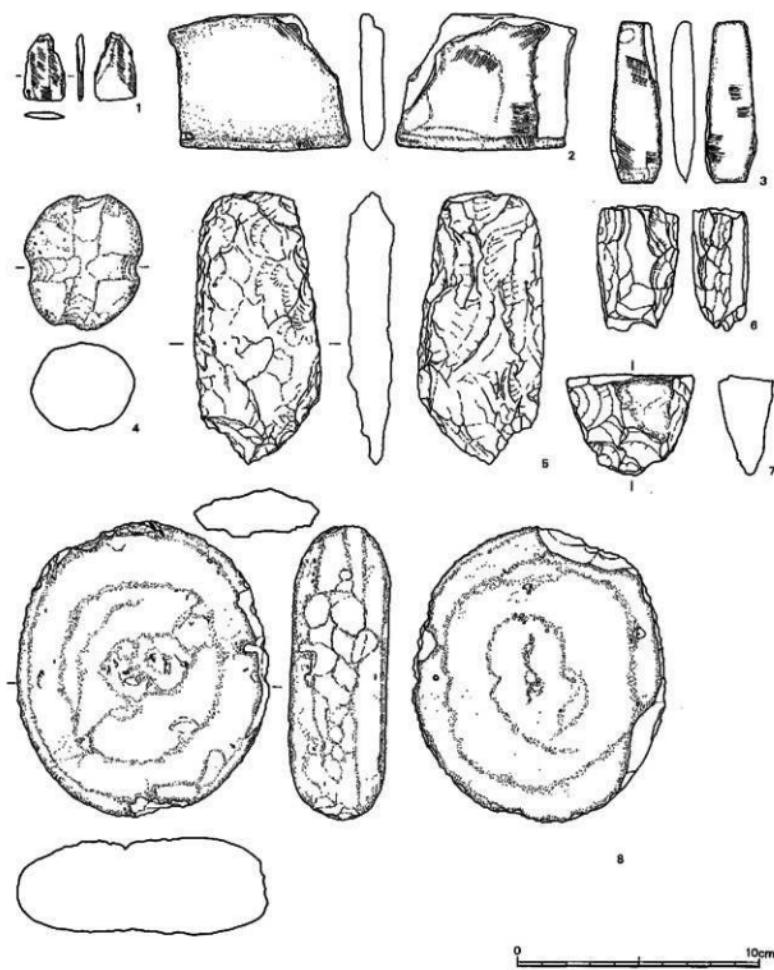
5の打製石斧は正面左側が欠損しているが、刃部を尖頭状に作出していたものと思われる。8の台石は周縁にも部分的に敲打痕が認められ、敲石としても兼用されていたことがうかがえる。

遺構（第20図）

この調査区ではIII層中位から用途不明の土壌を検出し、その中から遺物を得ることができた。そのため、ここでは土壌とその遺物内容について検討してみる。

① 土壌 1

この土壌では、石器製品やその製作過程に生じる黒曜石片が多数出土した。なかでも剝片や破片が最も多く、ここではその一部を提示した（第20図・表7）。1～4は石鏃で、欠損してはいるがいずれも円基鏃である。5～10はスクレイパーで、5は縦長剝片の両側を剥離加工しており、一部主要剝離面に加工痕を施した部分がある。6は主要剝離面側から、7は背面側からの加工によって、各々刃部を形成している。9は、半径が2cm未満ではあるが周縁に急斜な剝離を施す。11は石核であるが、打面・石核面の調整が認められない。13～39は剝片・碎片では、使用痕があるものも出土した。製品よ



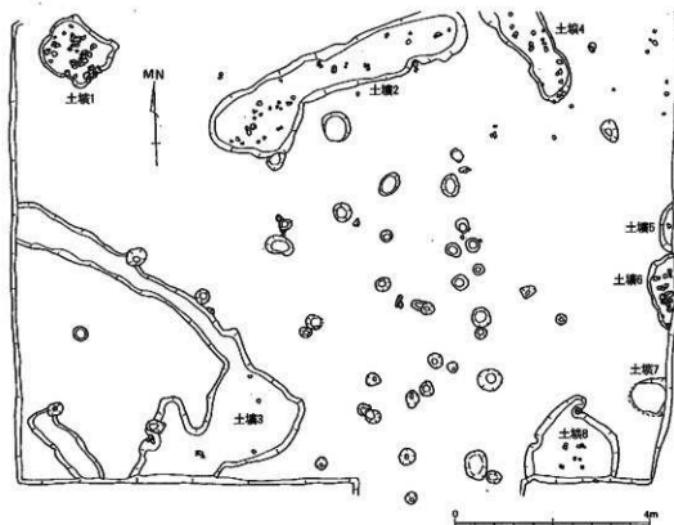
第19図 III-7区の石器②

りこのような破片が多く出土しているため、土壤は 1 は、主に石器製作の場であったと考えられる。

土器については、接合できるものを数点確認した(第21図)。1・2 は口縁下に丸みを帯びた突帯を巡らした壺口縁部である。口縁で断面三角形を呈する亀ノ甲型で、器形はほぼ同じものと思われる。

表 6 III-7 区石器組成 (長さ、幅、厚さはmm・重量はg)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第18図 1	三稜尖頭器	サヌカイト	46	16	15	11	先端部に摩耗痕
2	尖頭器	サヌカイト	74	39	13	30	二次加工が粗雑
3	尖頭器	不明	52	20	8	9.0	先端部が欠損
4	石鎌	黒曜石	26	25	8	2.9	基部がやや突出
5	石鎌	黒曜石	20	20	6	1.8	
6	石鎌	灰色黒曜石	19	18	6	1.3	
7	石鎌	黒曜石	25	14	4	0.7	刃部は齧歎状。先端・左脚欠損
8	石鎌	黒曜石	12	15	4	0.7	両脚欠損
9	石鎌	黒曜石	27	19	4	1.2	左脚欠損
10	石鎌	暗灰色黒曜石	27	19	3	0.9	両脚欠損
11	石鎌	黒曜石	13	19	3	0.6	
12	石鎌	暗灰色黒曜石	22	20	4	0.7	両脚先端欠損
13	石鎌	暗灰色黒曜石	17	20	4	0.6	先端欠損
14	石鎌	黒曜石	24	20	7	2.2	肉厚で粗雑
15	石鎌	黒曜石	23	19	4	1.4	左脚欠損
16	石鎌	黒曜石	19	19	5	0.9	中央部を研磨
17	石鎌	黒曜石	19	17	3	0.3	
18	石鎌	黒曜石	19	16	3	0.4	
19	石鎌	黒曜石	19	16	5	0.8	
20	石鎌	黒曜石	17	14	3	0.4	
21	石鎌	サヌカイト	22	20	5	1.4	脚部欠損
22	石鎌	サヌカイト	21	22	5	1.4	
23	石鎌	黒曜石	32	28	8	4.6	頭部と基部に自然面。未製品
第19図 1	磨製石斧	灰黒色粘板岩	28	28	3	1.5	先端部・基部欠損
2	石庖丁	細粒砂岩	56	75	9	58	刃部は両面から研磨
3	小形磨製石斧	泥岩	67	21	9	21	石ノミ状で全面研磨
4	有溝石鎌	輝石安山岩	56	52	36	121	敲打技法による溝
5	打製石斧	安山岩	113	52	20	157	全面加工
6	磨製石斧	炭質頁岩	52	32	22	57	剥離加工を施し、左側面に研磨痕。未製品
7	打製石斧	安山岩	41	53	52	51	刃部片。かなり摩耗
8	台石	安山岩	123	105	40	670	周間に敲打痕



第20図 III-7 区 3層土壌配置図

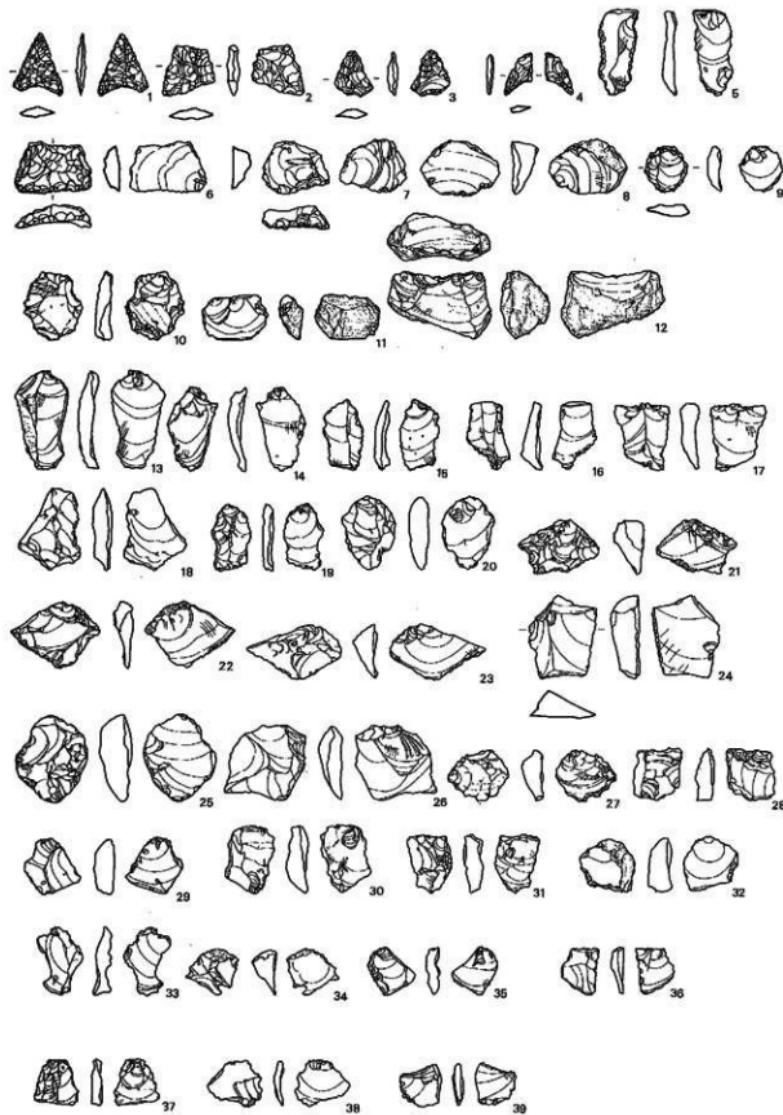
3は頸部と肩部の境界に貼付突帯を巡らす壺で、扁球形を呈する。肩部上半は明確でないが下半部にミガキを施す。頸部は肩部から急傾斜で立ち上がる。肩部の張りや頸部の立ち上がりから、中期前半の城ノ越式土器(橋口K II b式、宮崎中II期)であり、共伴する1・2については同時期のものと考えられる。

② 土壌2・4～6

いずれの土壌からも、土器・石器がわずかに出土している。

土壌2出土の土器は、断面三角形を呈する口縁の壺や、口縁が肥厚した壺の破片が出土した(第23図)。1の口縁下の突帯は比較的シャープに形成され、口縁は亀ノ甲型の特徴を有する。2は口縁上端は平坦ではないが、内外面に段を有し、宮崎の中I期と考えられる。石器は、第24図のとおりであるが、石鏃が多く出土している。1は形態的には石鏃と変わりはないが、特に大型であるため尖頭器とする。背面中央に自然面を残し、比較的粗い加工を施す。12は円形に近い梢円で、その中央に両面から穿孔している。石材は片岩質と思われる。本遺跡の周辺では牛込B遺跡、富の原遺跡、伊木力遺跡等からの出土例があるが、用途・機能については明らかではない。

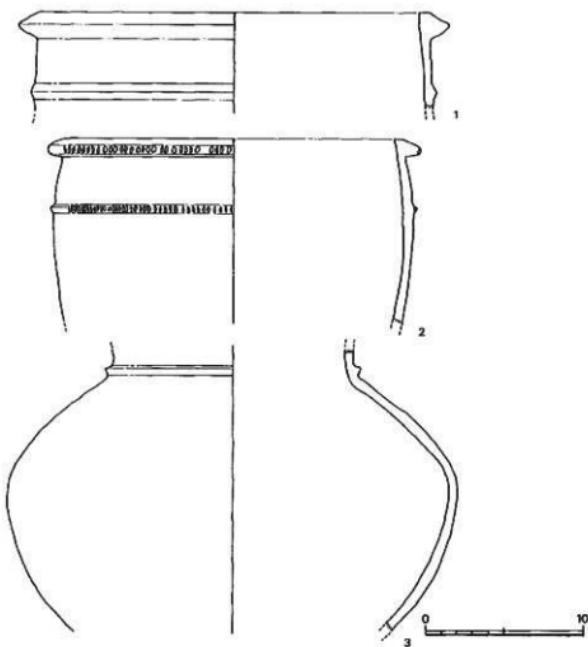
土壌4～6について、土器は、如意形口縁の壺(第25図4)や、口縁に断面三角形の刻目突帯をもつ亀ノ甲型口縁(同図6)、頸部はやや直線的に立ち上がり、口縁部が外半する中期初頭の様相を呈する壺の口縁部が出土している(同図5・8)。石器はほとんどが石鏃で、抉入部分は研磨によるものである(第26・27図)。



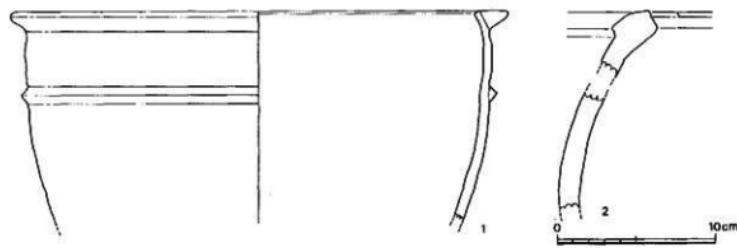
第21図 土壌 I の石器

0 1 10cm

黒丸遺跡 I



第22図 土壌Iの土器

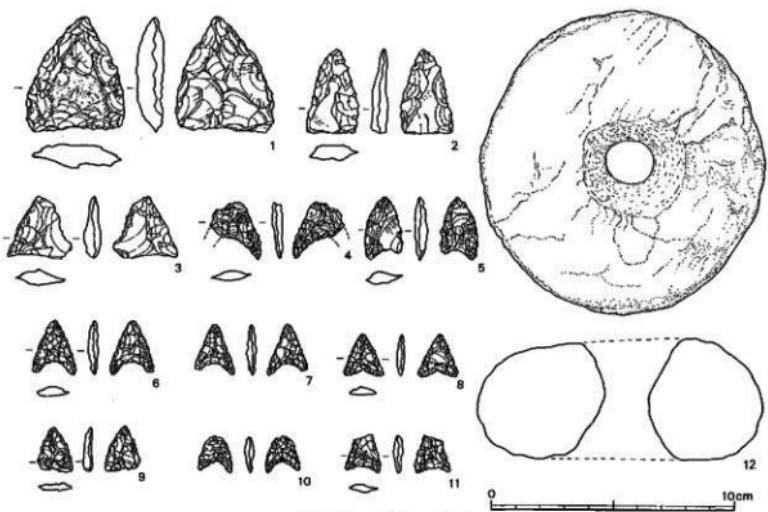


第23図 土壌2の土器

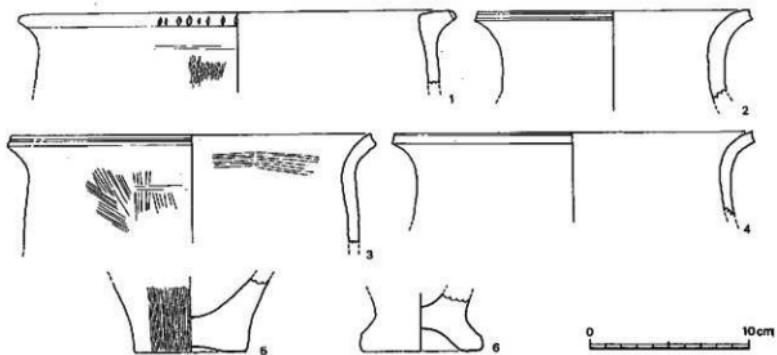
III-8区

弥生土器（第28図）

板付II式の頸部の段が明確で、肩部に円弧文を描いた壺片2点1・2、亀ノ甲型の断面三角形の壺口縁部2点3・4、短い平坦口縁をもつ壺5、横に一条と綫に暗文を施した壺の口縁6等が出土して



第24図 土壌 2 の石器

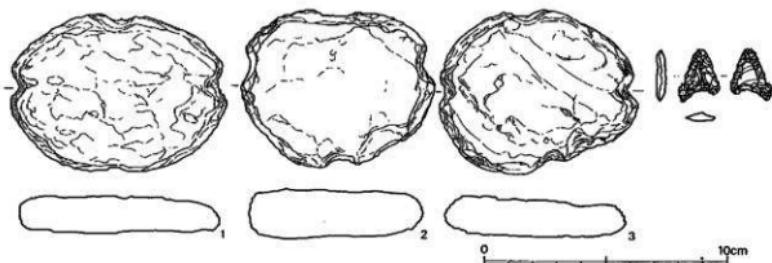


第25図 土壌 4 ~ 6 の土器

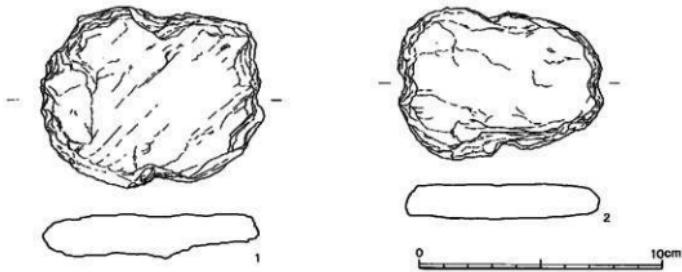
いる。底部はかなり分厚く作られており、前期後半から中期前半のものである。13は土鍤で、b類に属する。

石器（第29・30図、表9）

第29図は石鏃、第30図の1～6は石鎚、7～9は石斧である。1は大形・厚手で機能的には石鎌に近いものであろう。9の剥離面はバティナが古く、光沢を失っている。23は頭部の欠損状態から、正面右上方向に伸びるようであるが、本来の形状は推測しがたい。第30図の2・6について有溝石鎚である。



第26図 土壌4の石器



第27図 土壌6の石器

2は、正面右側の抉りからのみ敲打形成による溝が中央まで達しているが、残り3カ所の抉入加工についても溝を形成しようとした様子がみられる。3の抉入加工は、側面からの見通しで「X」形になる。7の石斧は、左側面が擦切り技法によって作出されている。8は団上端部に敲打痕があり、敲石としても使用されたと思われる。

III-8区

弥生土器（第31図）

1～3は板付II式とみられる壺肩部片で、いずれも彩色されていないが、2・3は研磨されている。2は薄手で、肩部はかなり張る。4は、断面三角形の口縁部である。磨滅しており、金雲母・砂が多く混入する。5は口縁外前に粘土貼付時の段がなくなり、上端が平坦に形成され、宮崎の前IV～中I期相当に位置付けられる。6は壺底部で、器壁はかなり薄く、焼成は良好である。7はおそらく小形の壺と思われるが、手づくねではない。8は土錘で、b類に属する。

石器（第32図、表10）

1～19は石鎚、20・21は打製石斧、22は石錘である。1の素材は剥片ではないが、基部・尖頭部が意識的に作出されている。2は風化のため、加工痕を観察したい。7・8は、側辺が内湾気味の穏やかなカーブを有し、尖頭部付近でわずかに屈曲する、同一形態の石鎚である。16・19は尖端が意識

表7 土壌1の石器組成①(長さ、幅、厚さはmm・重量はg)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第21図1	石鎌	黒曜石	26	20	4	1.0	極めて精巧。左脚端部欠損
2	石鎌	暗灰色黑曜石	21	22	5	1.8	尖頭部・右脚部欠損
3	石鎌	暗灰色黒曜石	18	16	4	0.8	脚部欠損
4	石鎌	暗灰色黒曜石	17	12	2	0.3	脚部片
5	削器	黒曜石	35	16	6	2.4	縦長剝片の両端縁に二次加工
6	振器	黒曜石	11	31	9	3.9	刃部は急斜
7	振器	黒曜石	28	28	7	5.3	背面側から加工
8	削器	黒曜石	23	32	11	4.5	
9	振器	黒曜石	19	17	5	4.5	ラウンドスクレイパーか
10	振器	黒曜石	28	24	7	1.7	一部調整あり
11	石核	黒曜石	18	27	9	4.0	横長剝片を作出
12	石核	黒曜石	27	42	18	18.8	不定形剝片を作出
13	剝片	黒曜石	41	22	9	3.8	
14	剝片	黒曜石	34	11	8	3.0	
15	剝片	黒曜石	16	16	6	1.6	使用痕あり
16	剝片	黒曜石	28	18	9	2.3	使用痕あり
17	剝片	黒曜石	20	22	8	3.0	
18	剝片	灰色黒曜石	44	26	8	5.0	
19	剝片	灰色黒曜石	27	16	4	1.7	
20	剝片	黒曜石	30	22	8	4.7	かなり摩耗
21	剝片	黒曜石	22	34	12	5.5	使用痕あり
22	剝片	黒曜石	27	36	8	4.7	
23	剝片	黒曜石	22	39	10	5.3	
24	剝片	玉髓質石材	34	29	12	8.8	使用痕あり
25	剝片	黒曜石	36	30	13	11.1	かなり摩耗
26	剝片	暗灰色黒曜石	30	33	10	5.3	
27	剝片	黒曜石	21	25	9	3.2	
28	剝片	黒曜石	21	20	8	3.1	
29	剝片	黒曜石	23	33	8	3.3	
30	剝片	黒曜石	28	20	9	3.7	
31	剝片	黒曜石	22	18	8	2.5	

表8 土壌1・2の石器組成②(長さ、幅、厚さはmm・重量はg)

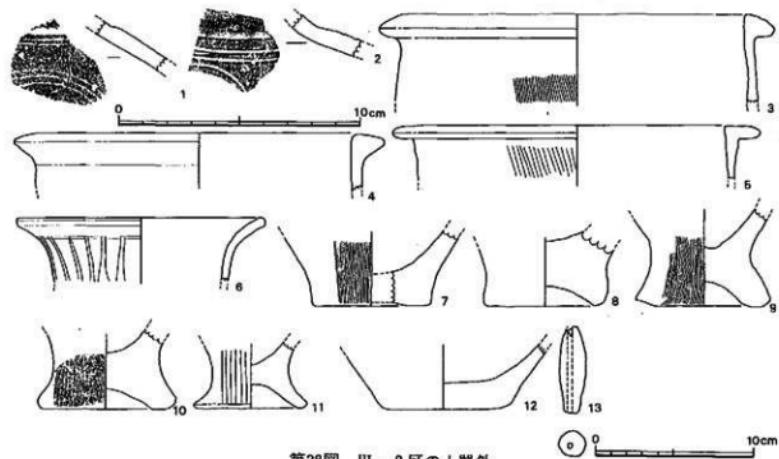
番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第21図32	剥片	灰色黒曜石	22	23	10	4.3	
33	碎片	黒曜石	28	19	7	1.7	
34	碎片	黒曜石	19	21	10	2.0	
35	碎片	黒曜石	20	19	5	1.0	
36	碎片	黒曜石	19	15	5	1.0	
37	碎片	暗灰色黒曜石	19	18	4	1.4	
38	碎片	黒曜石	19	22	4	0.6	
39	碎片	黒曜石	17	16	4	1.0	
第24図1	尖頭器	サヌカイト	48	40	10	18.6	両面に粗い加工
2	石鎌	サヌカイト	34	21	6	4.7	平基式
3	石鎌	暗灰色黒曜石	15	26	6	3.0	脚部欠損
4	石鎌	暗灰色黒曜石	23	20	4	1.2	尖頭部・右脚部欠損
5	石鎌	黒曜石	26	15	5	1.5	
6	石鎌	黒曜石	22	18	4	0.9	
7	石鎌	暗灰色黒曜石	21	16	4	0.6	左脚部端欠損
8	石鎌	暗灰色黒曜石	17	16	3	0.5	
9	石鎌	黒曜石	18	14	3	0.6	脚部欠損
10	石鎌	黒曜石	15	14	2	0.4	尖頭部丸みを帯びる
11	石鎌	黒曜石	16	14	3	0.5	尖端部欠損
12	有孔石製品	不明	125	118	50	1006	両面から穿孔
第26図1	石鎌	結晶片岩	89	65	15	139	研磨による加工
2	石鎌	結晶片岩	79	64	10	146	研磨による加工
3	石鎌	結晶片岩	81	74	18	125	結晶による加工
4	石鎌	黒曜石	21	16	4	0.9	尖頭部丸みを帯びる
第27図1	石鎌	結晶片岩	74	72	18	178	短軸の加工は結晶による
2	石鎌	結晶片岩	62	62	15	115	研磨による加工

的に丸みを帯びた状態に整形されているようである。20は平面が「しゃもじ」状を呈する扁平打製石斧である。丁寧に加工された刃部は摩耗しており、かなり使い込まれた石斧と思われる。

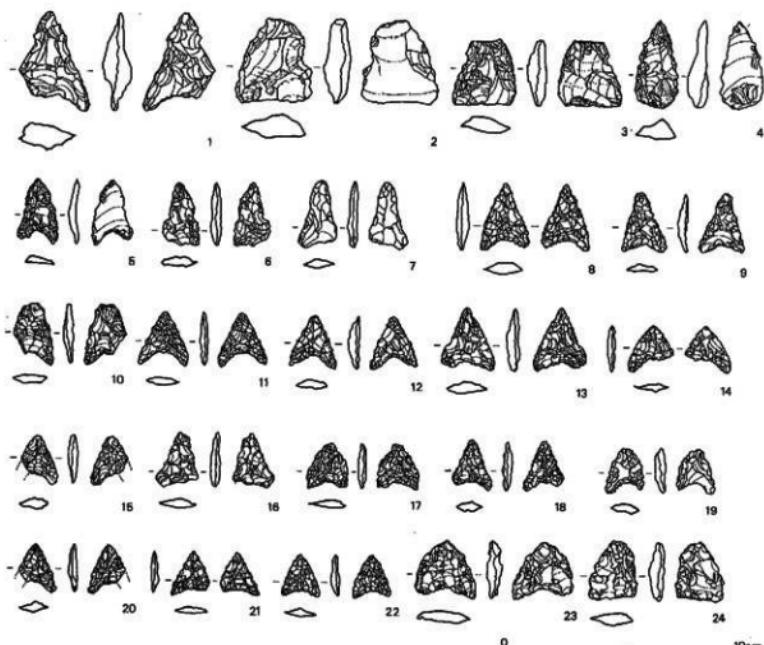
遺構(第33図)

この調査区では、東側にのみIII層中位から壺棺群を検出した。壺棺9基と土壌のみのものが1基の計10基である(第33図)。副葬されたものは少なく、青銅器等の金属器類は一点も出土しなかった。副葬品は壺棺の外部において確認されたが、手づくねのものやミガキがかけられたものであり、しかも

黒丸遺跡 I



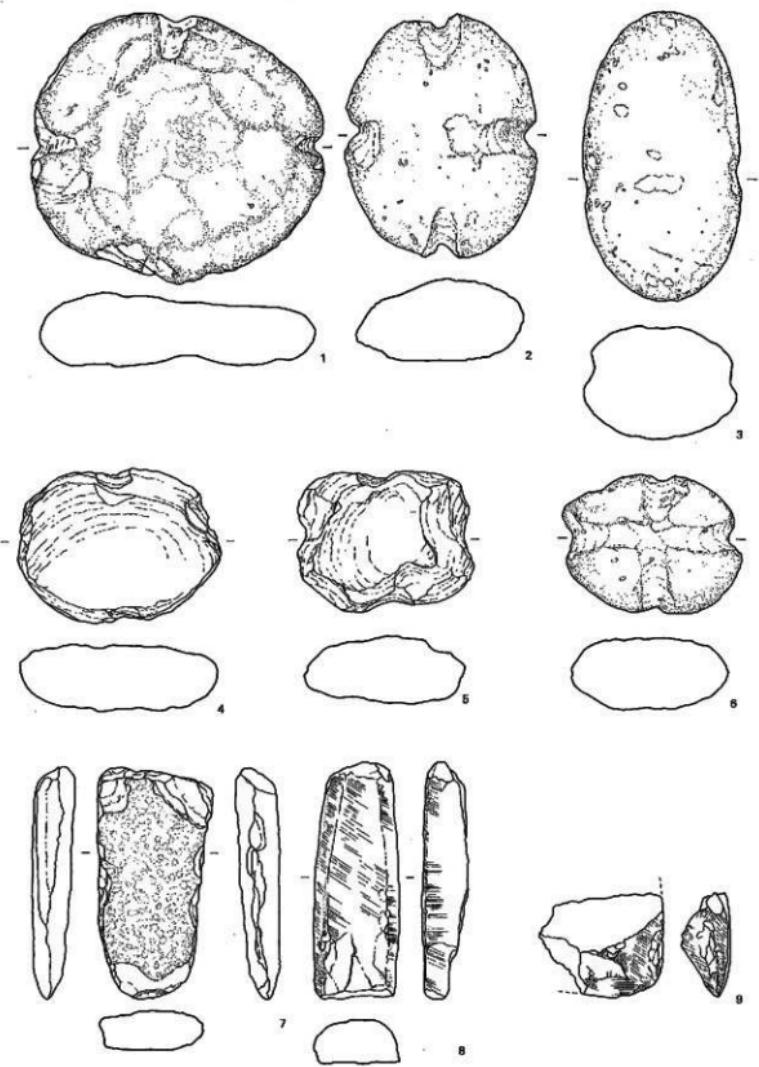
第28図 III-8区の土器外



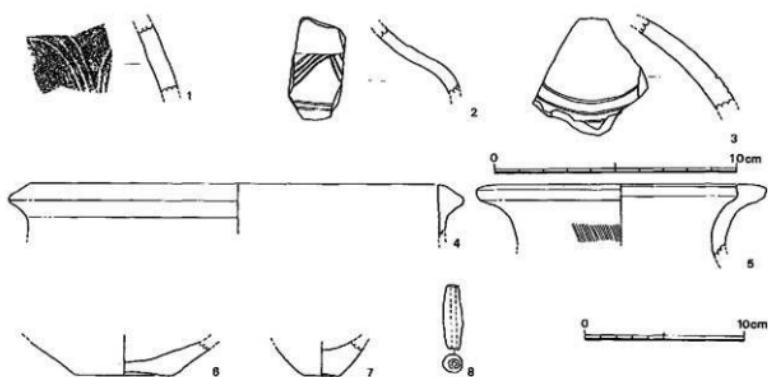
第29図 III-8区の石器①

表9 III-8区石器組成(長さ、幅、厚さはmm・重量はg)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第29図1	石鏸	ハリ質安山岩	41	29	11	6.6	二次加工は素材の剥離面を留めない。左脚欠損
2	石鏸	サヌカイト	35	31	9	11.0	頭部は素材の打面。未製品か
3	石鏸	黒曜石	27	27	7	4.1	形態・製作技法は2に近い。尖頭部欠損
4	石鏸	黒曜石	36	18	8	3.7	背面のみ二次加工。基部に素材の打面残す
5	石鏸	黒曜石	27	16	3	0.8	二次加工が背面に集中し局部的な加工。剝片鏸
6	石鏸	黒曜石	26	16	4	1.2	抉入加工。粗雑
7	石鏸	サヌカイト	27	20	4	1.3	著しい摩耗
8	石鏸	黒曜石	28	20	5	1.6	丁寧な二次加工。両脚先端欠損
9	石鏸	黒曜石	24	18	3	0.9	丁寧な二次加工で裏面に主要剥離面が一部残存
10	石鏸	黒曜石	25	17	4	1.2	片脚欠損
11	石鏸	黒曜石	22	20	3	0.7	頭部・脚部を鋭く作出
12	石鏸	黒曜石	22	19	4	0.9	
13	石鏸	ハリ質黒曜石	26	21	5	1.9	
14	石鏸	黒曜石	19	18	3	0.5	右脚欠損
15	石鏸	暗灰色黒曜石	20	15	4	0.8	左脚欠損
16	石鏸	黒曜石	22	16	4	0.9	尖頭部・両脚欠損
17	石鏸	黒曜石	18	16	3	0.6	
18	石鏸	黒曜石	20	16	4	0.6	左脚欠損
19	石鏸	ハリ質黒曜石	18	16	4	0.9	尖頭部は丸みを帯びる
20	石鏸	黒曜石	20	16	4	0.6	左脚欠損
21	石鏸	黒曜石	18	16	3	0.3	右脚欠損
22	石鏸	黒曜石	27	16	3	0.4	小形で丁寧なつくり
23	石鏸	黒曜石	24	25	5	2.2	左右非対称。尖頭部欠損
24	石鏸	黒曜石	22	20	5	2.4	左右非対称。右脚欠損
第30図1	石鎚	不明	121	110	30	630	左右と上部に研磨による抉り込み
2	有溝石鎚	安山岩	100	80	34	315	敲打による抉り込み
3	石鎚	安山岩	119	65	46	349	側面に長軸に対し約45度で抉入加工
4	石鏰	結晶片岩	84	64	23	199	研磨による抉り込み
5	石鎚	結晶片岩	73	58	25	147	上下と左側が研磨による加工
6	有溝石鏰	安山岩	73	35	19	147	敲打による加工
7	打裂石斧	不明	95	49	16	110	石質はホルンフェルスか。全面に剝離加工
8	磨製石斧	泥岩	97	35	18	102	方柱状に整形し、全体研磨。裏面欠損
9	磨製石斧	蛇紋岩	43	49	20	43	刃部のみ。丁寧な研磨。刃こぼれが認められる



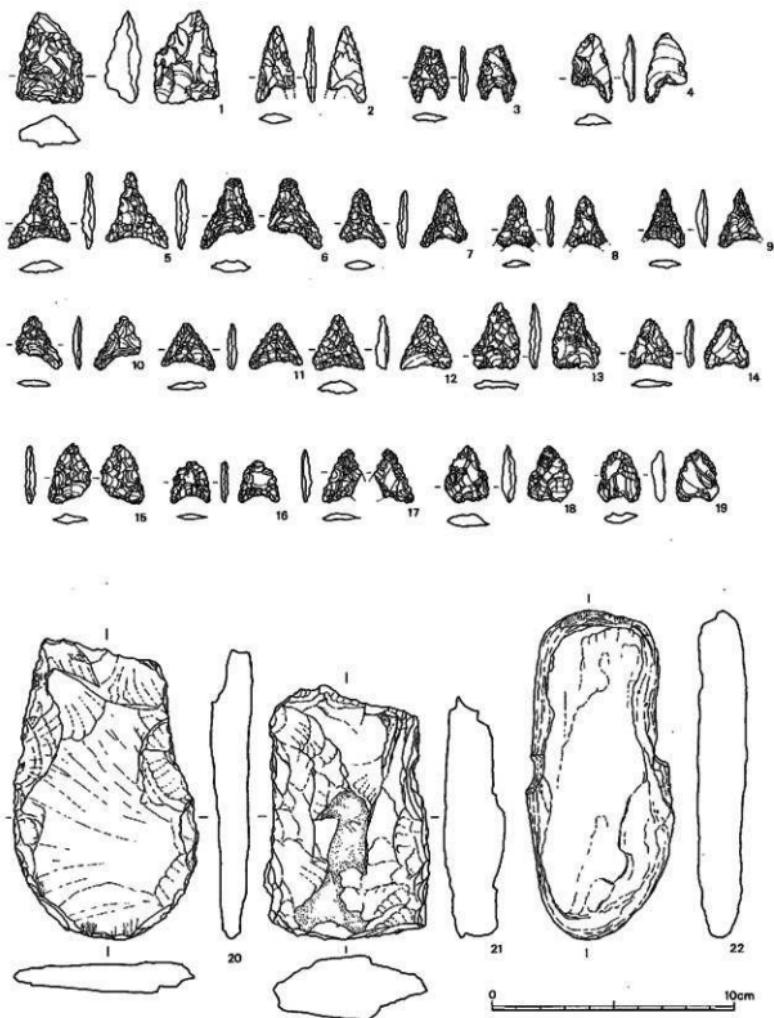
第30図 III-8区の石器②



第31図 III-9区の土器

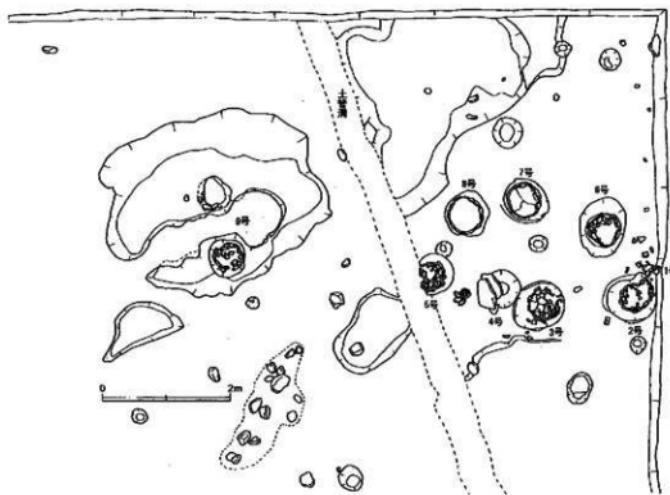
表10 III-9区石器組成 (長さ、幅、厚さはmm・重はg)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第32図 1	石鏃	暗灰色黒曜石	38	27	12	9.5	二次加工が粗雑。原石あるいは石核の転用か
2	石鏃	サヌカイト	31	15	5	1.1	丁寧な二次加工。かなり風化。右脚欠損
3	石鏃	黒曜石	23	16	3	0.8	入念な二次加工。尖頭部欠損
4	石鏃	黒曜石	28	17	5	1.3	側片鏃。二次加工は正面左側に集中。左脚欠損
5	石鏃	黒曜石	31	25	5	1.8	丁寧な二次加工。左右非対称
6	石鏃	黒曜石	29	22	5	1.7	尖頭部が丸みを帯びる。右脚欠損
7	石鏃	サヌカイト	24	19	4	0.9	入念な二次加工。左脚欠損
8	石鏃	黒曜石	21	17	3	0.5	入念な二次加工。7と同様なつくり。両脚欠損
9	石鏃	黒曜石	24	17	3	0.9	裏面に主要剝離面を残す。鋭い尖頭部
10	石鏃	ハリ賀安山岩	22	19	3	0.8	左脚欠損
11	石鏃	暗灰色黒曜石	19	22	4	0.9	やや幅広で左右非対称
12	石鏃	黒曜石	22	21	5	1.6	尖端部は丸みを帯びる
13	石鏃	黒曜石	27	19	3	1.6	裏面は尖頭部・基部に加工集中
14	石鏃	黒曜石	20	18	3	0.8	尖端部は丸みを帯びる。裏面はむずかな加工
15	石鏃	黒曜石	24	17	4	1.2	丁寧な平坦削離。左右非対称
16	石	黒曜石	17	16	2	0.7	周辺は丁寧な二次加工。尖端部欠損
17	石鏃	黒曜石	22	16	3	0.6	側刃が粗削歯状
18	石鏃	黒曜石	23	18	5	1.8	おおざっぱな加工。両脚欠損
19	石鏃	黒曜石	21	18	5	1.2	周辺に微細な加工。尖頭部は丸みを帯びる
20	打製石斧	安山岩	124	76	12	187	丁寧な二次加工。擦形に形成。刃部摩耗
21	打製石斧	安山岩	114	65	27	227	両面に加刷し、短冊状に整形
22	石錐	結晶片岩	135	59	21	253	研磨による抉り込み
第31図 5	石鏃	黒曜石	20	18	4	0.6	左右非対称



第32図 III-9区の石器

ほぼ完全な形で残っている。壺棺はほとんどが頸部を人為的に打ち欠きしており、小児用に使用されたかあるいは二次埋葬されたものと考えられる。



第33図 III-9区の壺棺群

壺棺1号（第34図1、第35図1・2） 調査区の東壁から出土したもので、2個体確認したが、合わせ口等の配置関係については不明である。1は所々にヘラミガキ痕が残る。胎土には他の土器と同様、金雲母が混入する。ともに頭部・肩部を打ち欠く。

壺棺2号（第34図2、第35図3） 頸部の打ち欠きは不明である。胸部にヘラによるミガキが施され、赤褐色を呈する。胸部は球形により近く、頸部に突帯が一条残る。胎土に金雲母を混入する。

壺棺3号（第34図3、第35図4） 2号と同様、打ち欠きは不明である。胸部上部に断面M字形の突帯が巡る。胸部最大径は突帯下に位置し、全体からみてかなり張るものと思われる。ヘラミガキが施され、色調は赤褐色を呈する。

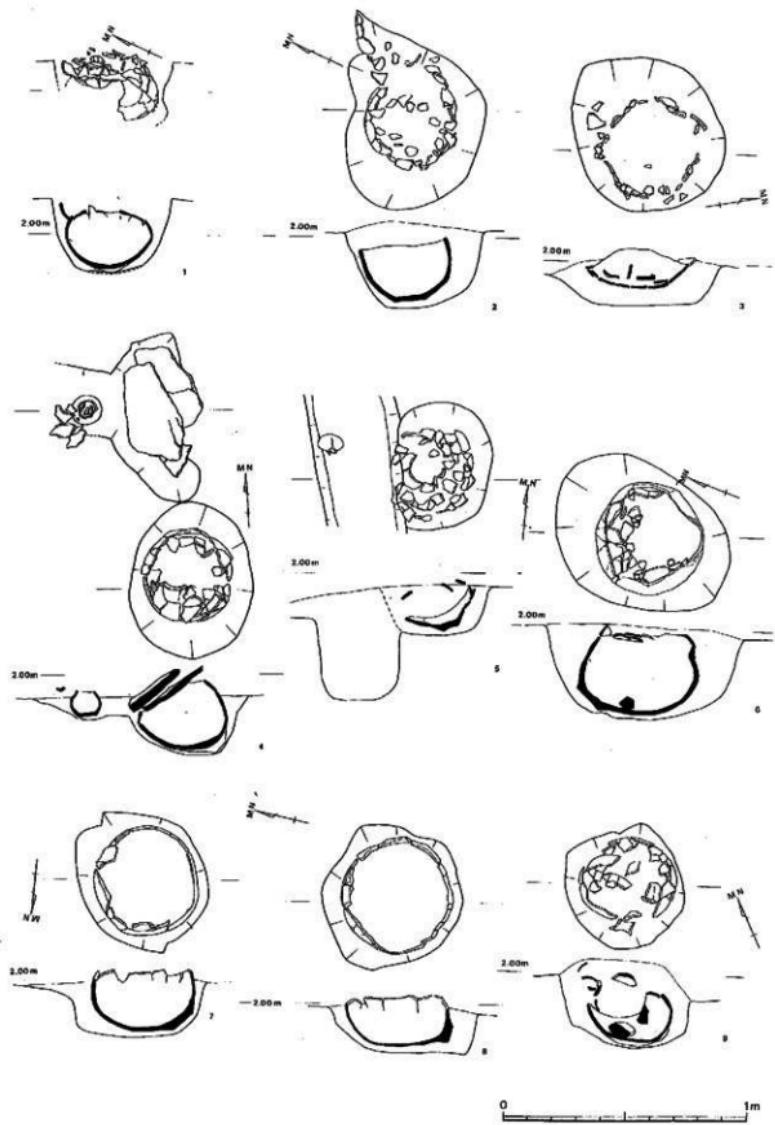
壺棺4号（第34図4、第35図5） 頸部を打ち欠いている。3号と同様な位置に胸部最大径があり、頸部・胸部に一条ずつ突帯が巡る。突帯断面は頸部は鋭く、胸部はカマボコ状を呈する。ヘラミガキが頸部に一部確認できる。この棺には石蓋が伴う。

壺棺5号（第34図5、第35図6） 頸部を打ち欠く。胸部に2ヵ所穿孔し、胸部は急激に張り出す。刷毛目調整後、ヘラミガキを施したようだ。色調は褐色を呈する。

壺棺6号（第34図6、第35図7） 頸部を打ち欠いている。頸部の二状の突帯断面は、鋭い。器壁は比較的厚手で、ヘラミガキを施す。胸部下部に穿孔する。

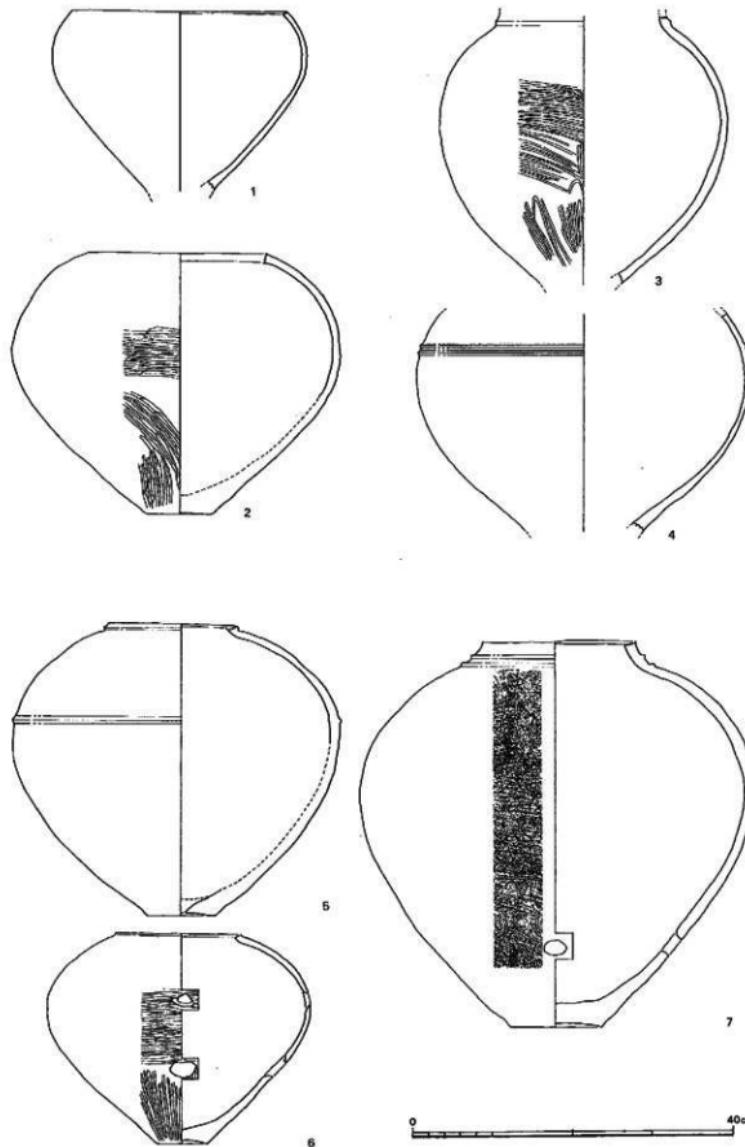
壺棺7号（第34図7、第36図1） 本遺跡中最大級の大きさの壺棺で、胸部最大径が胸部上部に位置する。色調は淡灰褐色で、胎土に金雲母を混入する。

壺棺8号（第34図8、第36図2） 胎部のみであるため、全体の形を推測することが難しい。胎

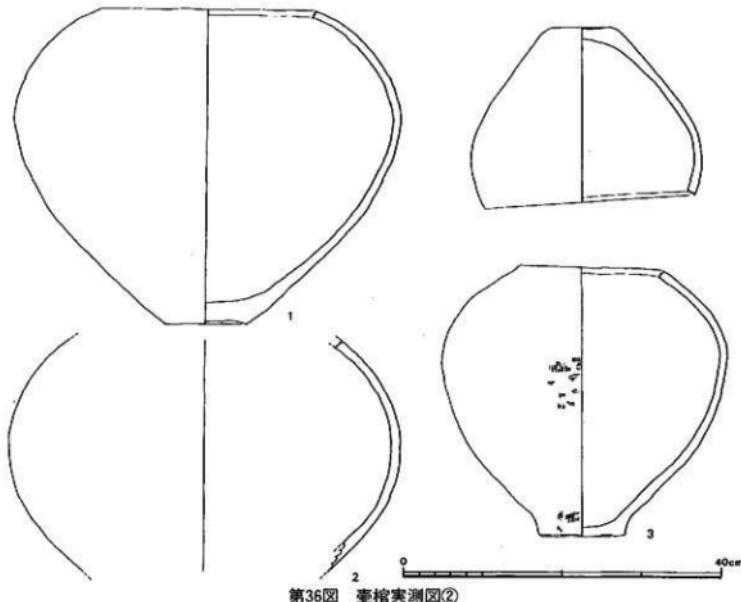


第34図 壇棺 I ~ 9号検出実測図

黒丸遺跡 I



第35図 墓棺実測図①



第36図 壺蓋実測図②

土には長石・白雲母を混入し、色調は褐色を呈する。

壺棺9号 土壌のみ残存するため、棺は出土しなかった。

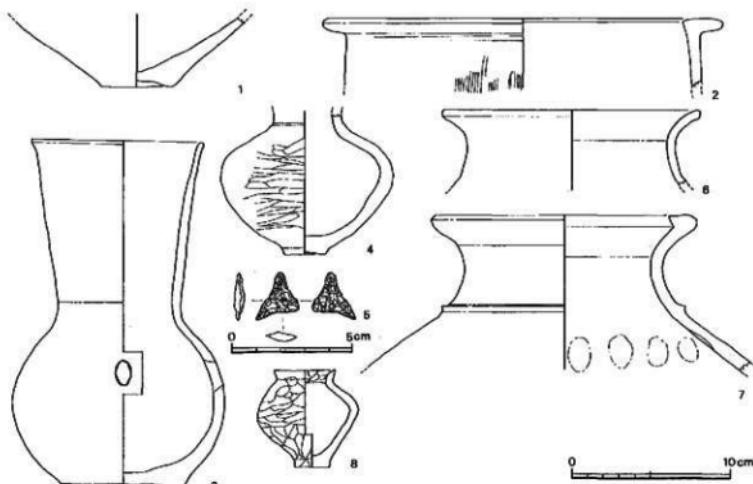
壺棺10号（第34図9、第36図3） 合わせ口壺棺で、2個体とも頸部あるいは肩部を打ち欠いている。両個体ともヘラミガキが施され、下壺は図には示していないが、胸部下端に穿孔されている。底部は上げ底ではないが、しっかりしたつくりである。胸部下端のヘラミガキは粗雑で、刷毛目調整を残している。

副葬品（第37図）

手づくねや一部ヘラミガキ痕が残るもの等、特徴ある遺物が出土した（第37図）。1は胸部がかなり張ると思われる壺の底部である。壺棺2号から検出した。2は壺棺4号から発見され、胎土には白雲母を混入する。3は、丁寧に研磨された長頸壺で、壺棺4号付近でかなり完全な形で発見された。朝鮮系無文土器かと思われたが、色調が暗褐色であること、頸部の屈曲がなだらかであること、研磨が半島のものほど緻密におこなっていないことから、影響は受けているが在地のものであると考えられる。4は胸部が大きく張った小壺で、壺棺5号のそばで発見された。頸部には打ち欠きが施されているものとみられ、その下にはヘラによる沈線が巡っている。胸部はヘラミガキが施されており、底部はやや上げ底である。5の石錠は壺棺6号で検出された。6・7は壺棺10号で出土し、それぞれ中期初頭のものと思われる。7の胸部内壁には指跡が残り、胎土には金雲母を混入する。8は全面にへ

黒丸遺跡 I

ラミガキを施した手づくね土器で、胴下半部にやや光沢がある。この土器は壇棺群からやや離れた所からの発見であったが、完形であること、手づくねであることから関係のある副葬品として扱った。



第37図 III-9区壇棺群の副葬品

III-10区

この調査区は二次堆積によるものとみられる。

縄文土器（第38図1～3）

赤褐色の胎土に結晶片岩を多量に混入した土器片である。施文具はヘラとみられ、阿高系の新しいものと思われる。2・3は口縁部と胴部にヘラによる刻目突帯を巡らした縄文時代晩期末の鉢口縁部である。共伴する遺物のほとんどが弥生中期のものであるため、時期は不確定だが、夜臼II式と考えられる。弥生土器（第38図4～8・10）

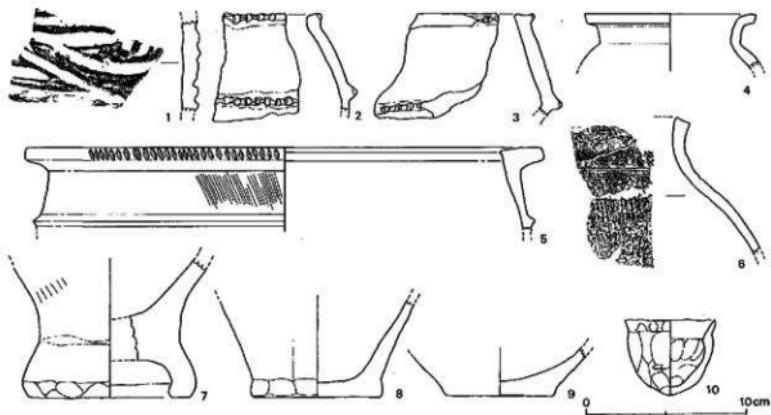
4・6は壇の口縁部であるが、4の口縁は上端が平坦に近づいているため、中期中頃と思われる。6は口縁部下に沈線を二条巡らす。5は口唇に刻目を施し、口縁下に断面三角形の鋭い突帯をつける。7・8は壇底部で、7は上げ底の強固なつくりをし、8は底が比較的薄く仕上げている。8には胴部調整時の指跡がのこる。8は7より時期は下ると考えられる。10は手づくね土器で、粗雑につくられている。III-9区からの流れ込みとも思われる。

土師器（第38図9）

堅敏なつくりで、ミガキが施されている。色調は淡灰褐色を呈する。底部が安定していることから、古墳時代初期と位置付けられよう。

石器（第39図、表11）

1～8は石鎌である。3は丁寧な刃部加工を施したもので、鋸齒状に作出されている。9は小形の石匙で、平坦剝離が丁寧になされている。10～12は石鏟で、打ち欠きあるいは研磨によって抉入加工が施されている。13は打製石斧であるが、正面左側縁の摩耗が著しいため、この部分を作業刃部とする切削器である可能性はある。



第38図 III-10区の土器

III-11区

III-10区と同様、縄文時代から古墳初頭と思われる遺物が出土している。

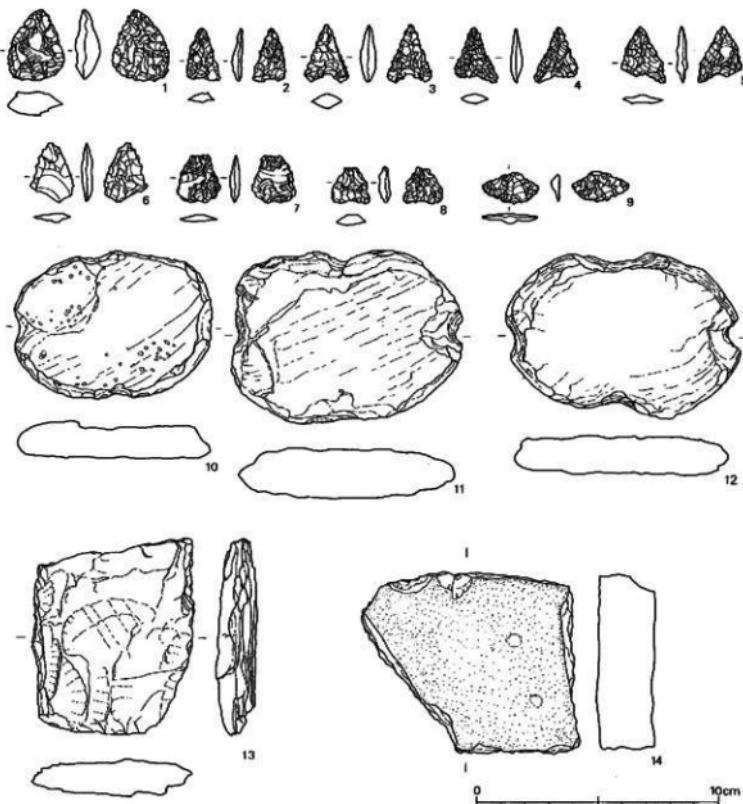
縄文土器（第40図1・3）

1は貝殻条痕で器壁調整された深鉢の口縁部である。口唇は丸く調整され、焼成もしっかりしている。口縁外面に少量の炭化物が付着している。3は丁寧に研磨された浅鉢の口縁部である。堅緻なつくりでしっかりしている。

弥生土器（第40図2・4～8）

2は口縁部に刻目をつけた壺片である。断面コの字形の口縁に不規則に刻目を巡らせていている。前期末から中期初頭と考えられる。5は亀ノ甲型口縁をもつ壺で、刷毛目調整がわずかに残っている。堅緻ではなく、たいへんもろい。4はかなり外反した口縁をもつ壺である。口縁下端のみ刻目を施す。中期中葉と思われる。6は口縁部に不規則な刻目をもつ壺片である。口縁下には浅い沈線が巡る。7はかなり分厚い壺底部である。粗雑なつくりで、白雲母を含む。8は口縁部に二列の刻目を巡らし、口縁下に二条の沈線をもつ大形の壺である。内面には刷毛目調整痕が明確に残り、口縁には内外とも段を有する。口縁上端は平坦ではないため、前期後半に位置づけられよう。

土師器（第40図9・10）



第39図 III-10区の石器

表11 III-10区石器組成 (長さ、幅、厚さはmm・重量はg)

番号	器種	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第39図 1	石鏽	黒曜石	29	23	10	5.0	円基鏽
2	石鏽	黒曜石	22	14	4	0.8	
3	石鏽	暗灰色黒曜石	23	18	6	1.3	鈍齒状鏽
4	石鏽	黒曜石	22	18	4	0.8	
5	石鏽	黒曜石	23	18	4	1.1	左脚欠損
6	石鏽	サスカイト	24	17	4	1.1	脚部欠損
7	石鏽	黒曜石	19	18	3	0.7	先端部欠損
8	石鏽	黒曜石	14	16	4	0.5	先端部欠損
9	石匙	暗灰色黒曜石	24	13	4	0.6	両面に丁寧な平坦削離。つまみ部欠損
10	石鏽	結晶片岩	82	61	15	123	削磨による抉り込み
11	石鏽	結晶片岩	95	71	28	189	打ち欠きによる抉り込み
12	石鏽	結晶片岩	97	67	15	163	打ち欠きによる抉り込み
13	打製石斧	安山岩	81	67	16	108	全体に鋭く、使用痕は確認できない
14	砥石	細粒砂岩	92	74	24	260	作業面はほぼ扁平

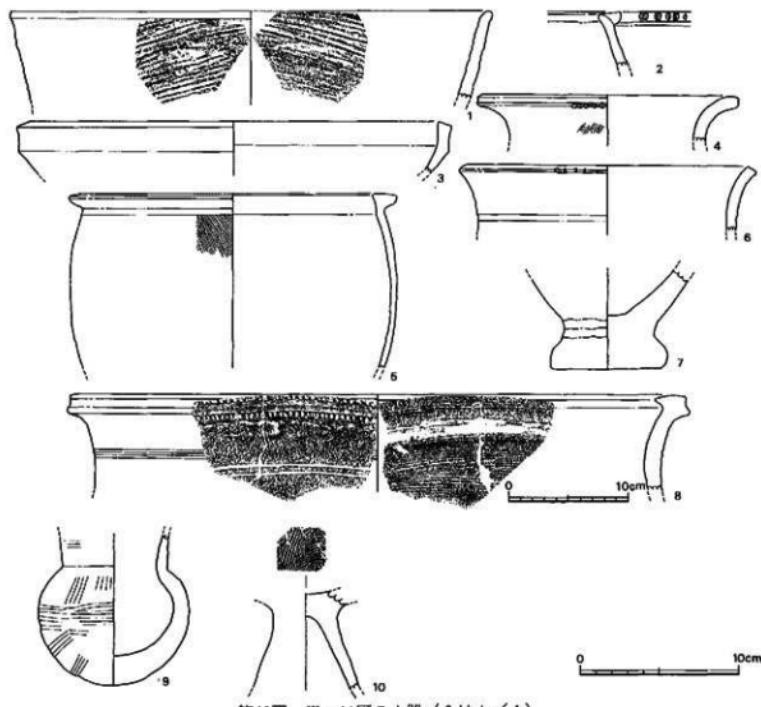
9は小形丸底壺である。底部がかなり厚く、外壁に刷毛目調査、内壁に指跡を残す。口縁部と胴部の境界は明確ではない。口縁はさほど上方に伸びず、すぐに口唇に到達するものと思われる。10は内側に刷毛目をもつ高杯の脚である。やや摩耗しているが、堅緻である。脚部はやや開き気味で下方へ続く。

石器（第41図、表12）

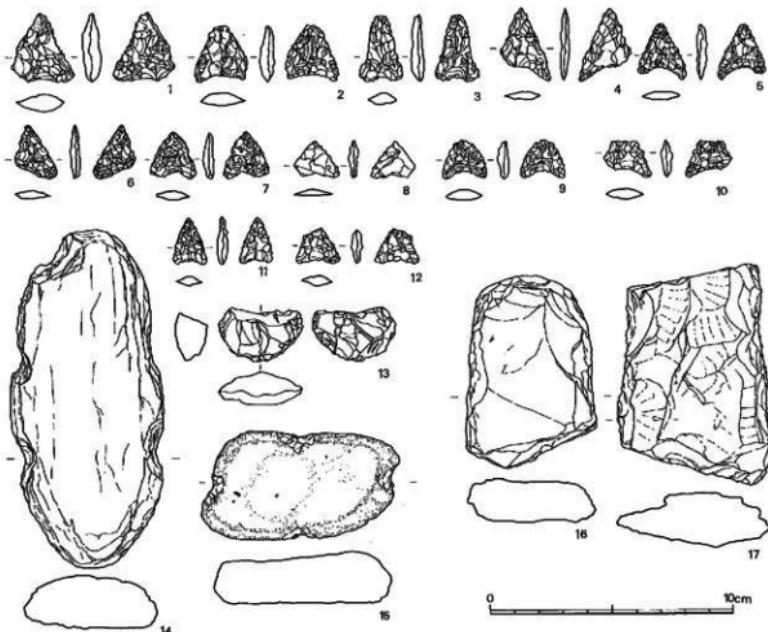
1～12は石鏃、13は両面加工石器、14・15は石錐、16・17は打製石斧である。13は厚手の剥片に両面から二次加工を施している。14は、細長い縫の両側に打ち欠きによる抉入加工をしており、使用痕と思われる摩耗がみられる。15は円縫の四方に敲打加工したもので、浅い抉り込みとなっている。16は基部破片で、着柄によるとみられる摩耗痕が残る。

IV-1・2区

この調査区は南辺に水路があり、それに伴う氾濫原と思われる疊群が検出された。遺物も摩耗したものが多く、二次的な堆積物である可能性は大きい。



第40図 III-II区の土器 (8は1/4)



第41図 III-11区の石器

表12 III-11区石器組成（長さ、幅、厚さはmm・重量はg）

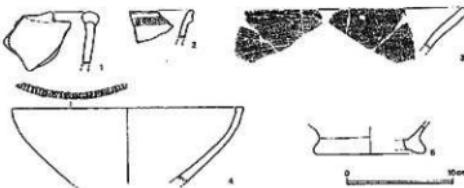
番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第41図 1	石鏃	ハリ賀安山岩	28	25	8	3.7	左脚欠損
2	石鏃	黒曜石	23	21	5	1.9	先端部欠損
3	石鏃	ハリ賀安山岩	27	18	5	1.7	脚部欠損
4	石鏃	ハリ賀安山岩	30	21	3	1.0	入念な二次加工
5	石鏃	黒曜石	23	19	4	1.0	脚部はほぼ半円形状
6	石鏃	黒曜石	21	17	4	0.9	左脚部欠損
7	石鏃	暗灰色黒曜石	19	19	4	1.0	左脚部先端欠損
8	石鏃	サメカイト	15	18	3	0.6	やや摩耗
9	石鏃	黒曜石	15	18	4	0.8	尖頭部は丸みを帯びる
10	石鏃	黒曜石	15	19	4	0.7	尖頭部・左脚部欠損
11	石鏃	暗灰色黒曜石	19	13	4	0.6	丁寧な加工
12	石鏃	ハリ賀安山岩	14	17	5	0.6	尖頭部欠損
13	両面加工石器	鉄石英	34	22	13	8.7	色調は暗赤色
14	石劍	結晶片岩	139	63	21	258	打ち欠きによる抉り込み
15	石鎌	閃綠岩	81	44	21	123	敲打による抉り込み
16	打製石斧	安山岩	80	54	17	109	側片に着柄によるとみられる摩耗痕
17	打製石斧	安山岩	91	63	22	160	両面に加工

縄文土器（第42図）

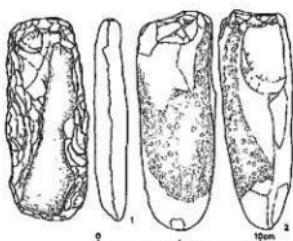
1～3はIV-1区出土の鉢口縁部片、4・5はIV-2区出土の鉢の破片である。1はIII層から出土した。口縁に炭化物が付着しており、胎土には白雲母・金雲母が混入している。口縁にリボン状の突起を伴う晩期中葉の黒川式である。2はIIIb層から出土し、胎土に白雲母・金雲母を多量に混入するかなり摩耗したものである。刻目突帯の位置から、縄文時代晩期末の夜臼式と考えられる。3は粗製土器で、IVb層から出土した。口唇が膨らみ、器壁には内外面とも糸痕を残す。内壁にはモミ圧痕を留める。胎土には金雲母を混入しており、全体の形状としてはかなり口縁部が外反する鉢が推測できる。4はIIIaから出土した。口唇には一定間隔で刻目が巡る。浅鉢である。色調は黄灰褐色であるが、胎土に結晶片岩が多量に混入されているため、土器自体が光っている。無文の並木式と思われる。5はIIIb層から検出した。色調は淡赤褐色を呈し、4は同様結晶片岩が多量に混入する。上げ底をなし、後期の様相を呈する。

石器（第43図、表13）

1は打製石斧で、胸部の稜線は鋭利につくられているが、刃部は使用痕と思われる摩耗がみられる。2は正面から右側面にかけて敲打整形後、入念な研磨を施す。しかし、刃部が作出されていないため、磨製石斧の未製品と考えられる。各所に加筆痕がみられる。



第42図 IV-1・2区の石器



第43図 IV-1・2区の石器

表13 IV-12区石器組成（長さ、幅、厚さはmm・重量はg）

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第43図1	打製石斧	安山岩	125	48	20	160	刃部周辺に摩耗痕
2	磨製石斧	頁岩	135	48	45	460	正面～右側面に研磨

4 V区出土の遺物

1 弥生土器 (第44図)

① 壺形土器 (1)

1は広口壺の口縁部である。外反する口縁に若干肥厚しながら平坦におさめた口唇部がつく。内外面は茶褐色で、胎土には細かい石英を含み、焼成はやや軟質である。内面はハケで調整し、口唇部下の外面はヨコナデをおこなっているが、そのほかの面は磨滅し、調整痕が判然としない。

② 壺形土器 (2~7)

壺形土器はA類からC類の3形式に分類できる。壺B類・壺C類は断面三角形の突帯を口縁部に貼り付けたいわゆる龟の甲タイプの壺形土器である。

壺A類 (2)

刻目は突帯をナデたのちに斜めからの刺突により施されており、施文後のナデはみられない。外面は黒褐色で煤が付着し、内面は灰褐色である。胎土には若干の石英を含み、焼成はやや軟質である。

壺B類 (3・4)

口縁部の貼付突帯が壺A類より大きいもので、突帯が口縁端から口唇部まで水平に張り出すように貼付けられたものである。3の刻目は磨滅部分が多く、判然としないが、斜めからの刺突によるものと観察できる。外面が黄褐色で、胎土に石英を多く含む。焼成は良好である。4の刻目も斜めからの刺突により施文されている。内外面灰褐色で、若干の石英を含む。焼成はやや軟質である。

壺C類 (5・6)

壺B類に比べると、突帯が口縁端より口唇部にかけて垂下するように貼り付けられたものである。5・6ともに刻目の磨滅が著しく、技法は不明である。突帯下のヨコナデが観察される程度で、そのほかの成形技法は判然としない。5・6ともに内外面黒褐色で胎土は緻密で焼成も良好である。

壺胸部 (7)

刻目を施した貼付突帯をもつ胸部破片である。刻目は刺突により、施文後ナデによって整えられている。内外面は暗茶褐色で、胎土には角閃石・長石・雲母をふくみ、緻密である。焼成も堅緻である。

2 繩文土器底部 (8)

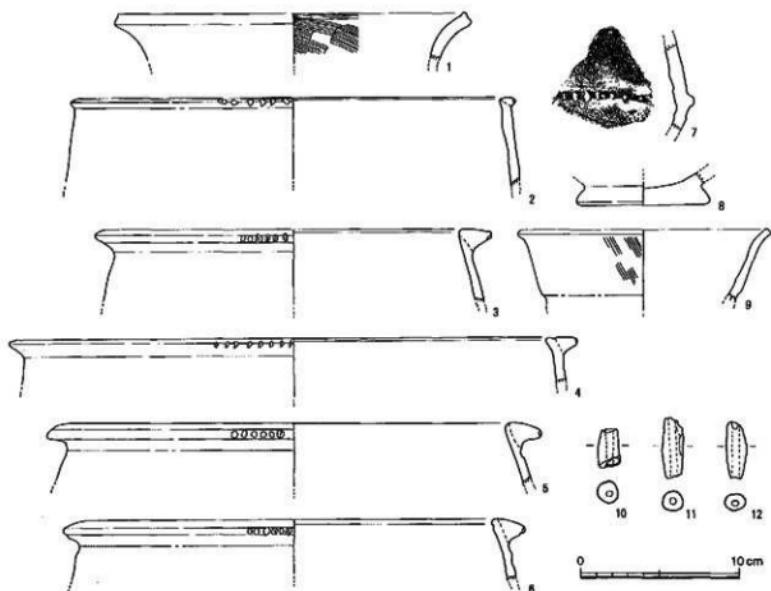
磨滅が著しく、調整痕などは不明である。外面は赤褐色、内面は黒褐色で、胎土には石英・雲母を含む。焼成は良好である。繩文晚期土器か。

3 土師器壺形土器 (9)

壺などの口縁部片と思われる。内外面は暗黄褐色で、表面にはナデの後、ハケ調整を部分的に施している。胎土には若干の石英が含まれているが、焼成は良好である。

4 管状土錘 (10~12)

3点を図示した。10は表面の磨滅が著しいが黄褐色をなし、胎土は精選されている。11・12は赤褐色をしており、胎土はよい。いずれも焼成良好である。



第44図 V区の土器実測図 (S = 1/3)

5 弥生土器小結

5区では、いわゆる亀の甲タイプの壺形土器の出土を報告することができた。いずれも肩部を失しているため、詳細は不明であるが、貼付突帯の形状などから3つに分類した。先行する研究成果にてらすと、壺A→壺B・壺Cという変遷が考えられる。時期的には壺B・Cが前期末から中期初頭、壺Aはそれより先行する時期が考えられる。1の壺形土器の口縁部片も壺B・Cと同時期と考えられる。

【引用・参考文献】

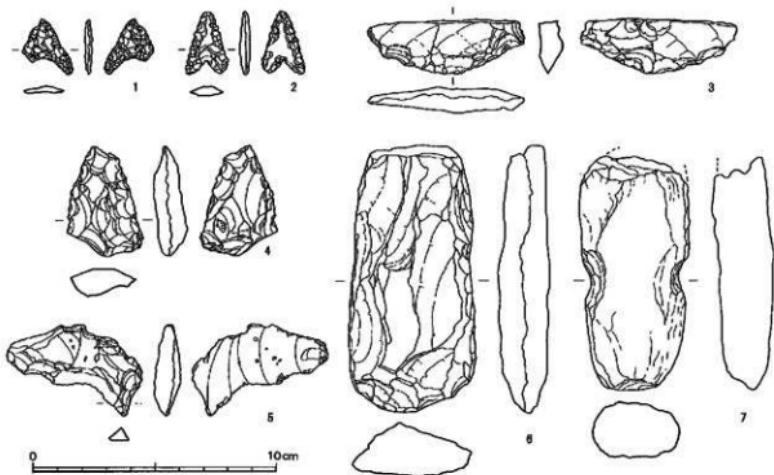
- 久村貞男1994「第5章 遺物」「四反田遺跡発掘調査報告書」佐世保市教育委員会
- 藤尾恒一郎1990「西都九州の割目突帯文土器」「国立歴史民俗博物館研究報告」26国立民俗博物館

6 石 器 (第45図)

① 石鏃 (1・2)

1は両面に入念な平坦削離を施した打製石鏃である。基部は大きく半円形に抉り込まれており、長い脚部が作出されている。黒色黒曜石製である。2は局部磨製石鏃である。丁寧な調整削離を施した後、両面を研磨している。両側辺は微鋸歯状を呈する。暗灰色黒曜石製である。

② 二次加工を有する剣片(3)

第45図 V区の石器実測図 ($S = 1/2$)

サヌカイト質安山岩製の剥片を素材とし、両面から二次加工を施して弧状の刃部を作出したものである。スクレイピング・ツール的な機能を有するものと思われる。

④ 尖頭器(4)

サヌカイト質安山岩の剥片に、粗雑な二次加工を施したものである。尖頭部が左右非対称のため全体にアンバランスな形状を呈している。基部は左側を欠損しているが、ほぼ平基になるものと思われる。

⑤ 石錐(5)

「ノ」字状を呈する剥片の末端部に二次加工を施し、尖頭部を作出したもので石錐と思われる。作業部は断面三角形をなし、わずかな摩耗が認められる。サヌカイト質安山岩製である。

⑥ 打製石斧(6)

短冊形の打製石斧で、幅に比べてやや厚みがある。刃部にはわずかに摩耗痕が認められる。石質は灰色の安山岩と思われるが、酸化鉄による着色が著しい。

⑦ 石鎌(7)

棒状礫の両側ほぼ中央に、敲打あるいは研磨によるとと思われる抉り込みを施すもので、結晶片岩製である。



III区の調査

図版 2



III区の遺構

第 3 部

自然 科 学 分 析

長崎県、黒丸遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 黒丸遺跡の植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_4) が蓄積したものであり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）として土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体（プラント・オパール）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネを中心とするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、1987）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水印跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山、1984）。

ここでは、植物珪酸体分析を用いて、稻作を中心とする農耕史の検討および遺跡周辺の古植生・古環境の推定を試みた。

2. 試 料

試料は、II-4 区東壁の II a 層から IV b 層までの層準から採取された 6 点である。分析結果の柱状図に試料採取箇所を示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾（105°C・24時間）
- 2) 試料約 1 g を秤量、ガラスピース添加（直径約 40 μm、約 0.02 g）
※電子分析天秤により 1 万分の 1 g の精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散（300W・42KH_z・10分間）
- 5) 沈底法による微粒子（20 μm 以下）除去、乾燥
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試量 1 gあたりのガラスピース個数に、計数された植物珪酸体とガラスピース個数の比率をかけて、試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-6} g）をかけて、単位面積で層厚 1 cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値は 2.94（稟実重は 1.03）、8.40、6.31、1.24 である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は 0.48、クマザサ属は 0.75 である。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 1 および図 1 に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

機動細胞由来：イネ、ヨシ属、ウシクサ属（ススキ属やチガヤ属など）、キビ族型、ウシクサ族型、ウシクサ族型（大型）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、タケ亜科（未分類等）

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、莖部起源、未分類等

[樹木]

ブナ科（シイ属）、マンサク科（イスノキ属）、クスノキ科（バリバリノキ？）、その他

5. 考察

(1) イネ科栽培植物の検討

II a 層から IV b 層までの各層について植物珪酸体分析を行った。その結果、II a 層から III b 層までの各層からイネの植物珪酸体が検出された。このうち、II a 層（試料 2）では密度が 12,800 個/g、III 層（中世、試料 3）では 18,500 個/g、III a 層（弥生時代～古代、試料 4）では 24,200 個/g といずれも非常に高い値であり、稻作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている 5,000 個/g を大きく上回っている。したがって、これらの各層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。III b 層（縄文時代～弥生時代、試料 5）では、密度が 500 個/g と微量であることから、上層からの混入の危険性が考えられる。

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族（ムギ類が含まれる）やキビ族（ヒエやアワ、キビなどが含まれる）、ジュズダマ族（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属、トウモロコシ属などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畠作物は分析の対象となっている。

(2) 植物珪酸体分析から見た植生・環境

IV b 層（試料10）では、ウシクサ族型や棒状珪酸体が多量に検出され、ヨシ属やウシクサ族（ススキ属など）なども検出された。IV b' 層（試料7）でもほぼ同様の結果であるが、ネザサ節型やブナ科（シイ属）も少量検出された。III b 層（試料5）ではウシクサ族（ススキ属など）やウシクサ族型が減少し、かわってネザサ節型が増加している。III a 層（試料4）より上層では、前述のようにイネが多量に検出されたが、ウシクサ族型やネザサ節型、ヨシ属なども比較的多く検出された。また、III b 層より上位では、ブナ科（シイ属）、マンサク科（イスノキ属）、クスノキ科（バリバリノキ？）などの樹木も継続的に検出された。

おもな分類群の推定生産量（図1右側）によると、III b 層より下層ではヨシ属が圧倒的に卓越しているが、III a 層より上位ではおおむねイネが卓越しており、ヨシ属も比較的多くなっていることが分かる。

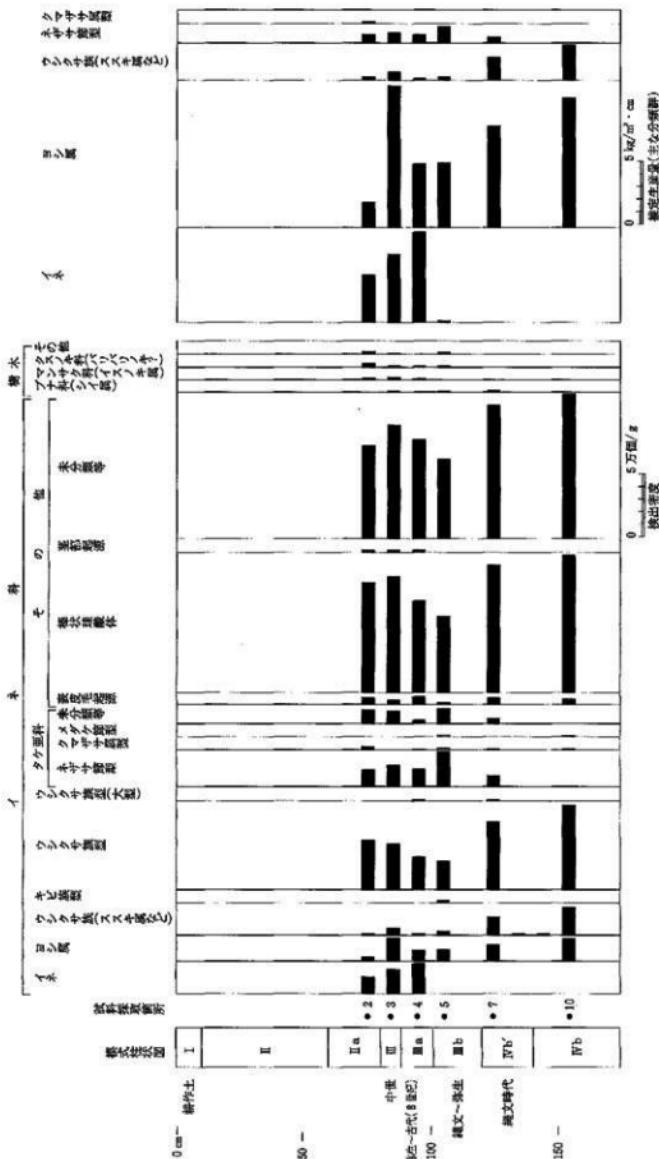
以上の結果から、黒丸遺跡における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。

最下位のIV b 層からIV b' 層（縄文時代）までの堆積当時は、ヨシ属が多く生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺にはススキ属やネザサ節などの生育する草原的なところも見られたものと推定される。

III b 層（縄文時代～弥生時代）でもほぼ同様の状況であったと考えられるが、III a 層（弥生時代～古代）の時期にはヨシ属の生育する湿地を利用して水田耕作が開始されたものと推定される。なお、耕作の開始以降もヨシ属比較的多く見られることから、水田雜草などとしてヨシ属が生育していたことも想定される。当時の遺跡周辺はネザサ節を主体としてススキ属なども見られるイネ科植生であり、ブナ科（シイ属）やマンサク科（イスノキ属）、クスノキ科（バリバリノキ？）などの照葉樹もある程度生育していたものと推定される。

6. ま と め

本遺跡では、III a 層（弥生時代～古代）の時期にヨシ属などの生育する湿地を利用して水田耕作が開始されたものと考えられ、III 層（中世）やII a 層でも継続的に耕作が行われていたものと推定される。



第1図 黒丸遺跡 II - 4区東壁の植物性酸体分析結果

II. 黒丸遺跡における花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、従来湖沼や湿原の堆積物を対象として広域な森林変遷を主とする時間軸の長い植生や環境の変遷を復原する手法として用いられてきた。考古遺跡では、埋没土壌や遺構内堆積物など堆積域や時間軸の限定された堆積物を対象とすることによって、狭い範囲や短い時間における農耕を含む植生や環境の変遷を復原することも可能である。本遺跡ではこれらのこと考慮に入れて植生・環境・農耕の復原推定を行った。

2. 試 料

試料は、II-4区東壁のII a層からIV b層までの各層から採取された8点である。分析結果の柱状図に試料採取箇所を示す。

3. 方 法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて、砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:1濃、硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び水酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm・2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨ててという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)を基本とし、所有の現生標本との対比を行った。結果は同定レベルによつて、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974, 1977)を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類したが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4. 結 果

分析の結果、樹木花粉21、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉19、シダ植物胞子2形態の

計41分類群が同定された。結果を花粉遺体一覧表にまとめ、花粉総数が200個以上の試料は花粉総数を基数とする百分率を算定して花粉組成図に示した。以下に同定された分類群を示す。なお、樹種同定の結果（第III章）ではクスノキ科が同定されているが、クスノキ科は花粉壁が完形では保存されないことから、花粉分析の結果には反映されない。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雜管束亞属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、クルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属—アサダ、ツリーシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亞属、コナラ属アカガシ亞属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ、キハダ属、サンショウ属、トチノキ、ニワトコ属—ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科

〔草本花粉〕

ガマ属—ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属サナエクテ節、アカザ科—ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、セリ科、ナス科、シソ科、オミナエシ科、タンポポ亞科、キク亞科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

单条溝胞子、三条溝胞子

IV b層（試料10）では、樹木花粉の占める割合が草本花粉より多く、コナラ属コナラ亞属が優占する。樹木花粉では他にコナラ属アカガシ亞属・クリーシイ属などが出現する。草本花粉ではイネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属などが出現する。IV b'層（試料7・8）では、花粉がほとんど含まれていないことから、傾向がわからない。

III b層（試料5・6）になると、草本花粉の占める割合が高くなる。草本花粉ではイネ科・ヨモギ属、カヤツリグサ科が優占し、ヨモギ属が上位に向かって増加する。樹木花粉の中ではコナラ属コナラ亞属・クリーシイ属が優占する。III a層（試料4）では、草本花粉の占める割合が高く、イネ属型を含むイネ科の高率に出現する。ヨモギ属がやや減少するほかは、III b層と同様である。III層（試料3）ではイネ属型が減少し、II a層（試料2）ではアブラナ科がやや多く出現する。

5. 花粉分析から見た植生・環境

以上の結果から、植生と農耕の変遷を推定すると次のようである。

最下位のIV b層の堆積当時は、周囲は樹木の多い環境であり、コナラ属コナラ亞属・コナラ属アカガシ亞属・クリーシイ属の森林が分布していたと推定される。このうち、コナラ属コナラ亞属は、ナラガシワやウバメガシなどの暖地に分布する種であった可能性が高い。イネ科やカヤツリグサ科の繁茂する湿地も存在していたと考えられるが、あまり広くはなかったと推定される。

IV b'層（縄文時代）では、花粉がほとんど含まれていないことから、当時の植生は詳細にはわからぬが、下位のIV b 層と同様であったと推定される。なお、花粉が少ない原因としては、堆積速度が速かったことや土壤生成作用によって花粉が分解されたこと、分別作用によって淘汰されたことなどが考えられる。

III b 層（縄文時代～弥生時代）では、イネ科・ヨモギ属・カヤツリグサ科の草本が繁茂する開地が増加したと推定される。ヨモギ属は乾燥を好むため、乾燥した草地も見られたものと考えられる。イネ属型の花粉が出現しているが、低半であることから上位層からの混入と考えられる。コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属の森林の減少と草本の増加が対応しているため、人为干渉により森林が減少した可能性が高い。

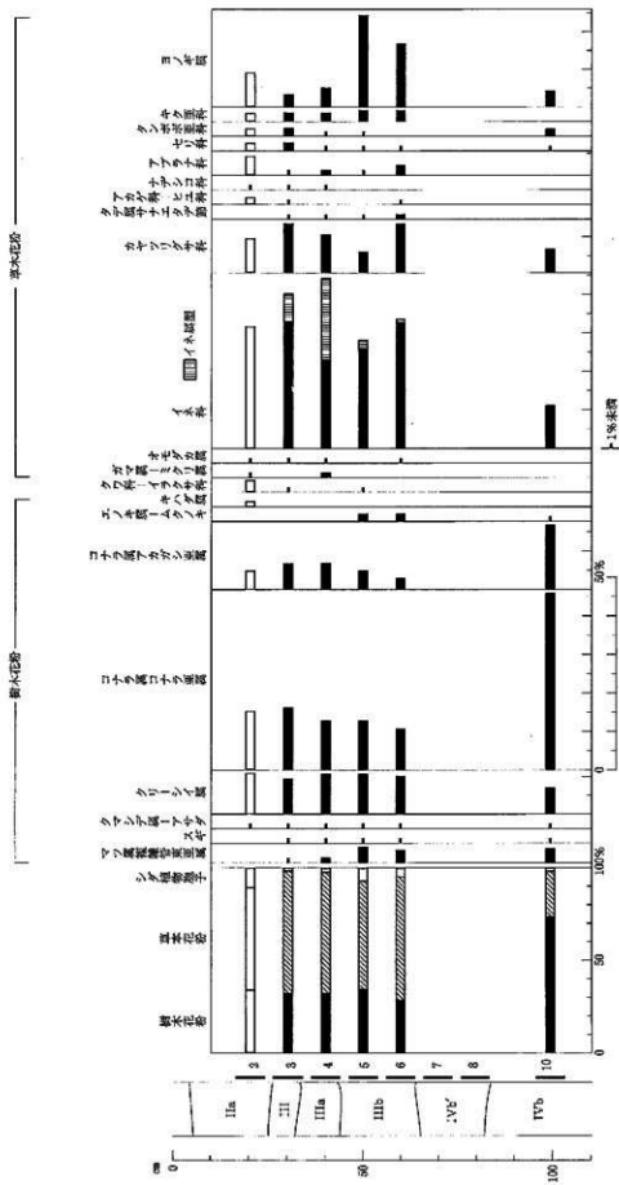
III a 層（弥生時代～古代）では、湿地や草地を折りて水稻耕作が開始されたものと推定される。コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属・クリーシイ属は周辺地域の基本的な森林要素であったとみなされ、周辺の台地や丘陵地などに分布していたと推定される。III層（中世）でもほぼ同様の状況であったと推定されるが、イネ属型の花粉が減少していることから、水稻耕作以外の農耕も行われていた可能性が考えられる。II a 層では、アブラナ科などの畑作も行われていたと推定される。

参考文献

- 中村純（1973）花粉分析、古今書院
- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店。
- 日本第四紀学会編（1993）第四紀試料分析法、東京大学出版会。
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集。
- 中村純（1980）日本産花粉の標識、大阪自然史博物館収蔵目録第13集。
- 中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として、第四紀研究13。
- 中村純（1977）稻作とイネ花粉、考古学と自然科学 第10号。

表2 黒丸遺跡における花粉分析結果

学名	分類群 和名	II-4区東壁サンプル								
		2	3	4	5	6	7	8	10	
Arboreal pollen	樹木花粉									
<i>Podocarpus</i>	マキ属					2	1			
<i>Abies</i>	モミ属					1	1			
<i>Tsuga</i>	ツガ属					1				
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属被管束亞属				1	7	16	6		10
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ				1	3	1			1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressace	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科									3
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属				1	1				
<i>Juglans</i>	クルミ属						1			
<i>Alnus</i>	ハンノキ属						1			1
<i>Betula</i>	カバノキ属						1			1
<i>Corylus</i>	ハシブミ属									2
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシグ属-アサガ			1	1	1	2	1	1	2
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリーシイ属		16	40	55	40	21	4	6	28
<i>Fagus</i>	ブナ属				1					
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属		23	74	61	50	23	7	7	185
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属		7	32	33	17	5	1	2	66
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属ムクノキ					7	3	1	1	1
<i>Pelliodendron</i>	キハダ属			2						
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属						1		1	
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ					1				
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属					1				
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木 · 草本花粉									
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科			5	2		1			
Nonarboreal pollen	草本花粉									
<i>Typha-Sphagnum</i>	ガマ属-ミクリ属				1	5				
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属				4	3		1		
Gramineae	イネ科		47	151	116	99	68	10	14	42
<i>Oryza lutea</i>	イネ属		1	36	110	6	2		1	
Cyperaceac	カヤツリグサ科		13	61	47	18	26	2	8	23
<i>Monochria</i>	ミズアオイ属						2			
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サニエクデ節			2	3	3	2			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科		3	4			1			
Caryophyllaceae	ナデシコ科		1	2	2					
Cruciferac	アブラナ科		7	4	5	1	4			
<i>Ampelopsis</i>	ノブドウ属				1	1				
Umbelliferae	セリ科		3	10	1	3	1	1		6
Solanaceae	ナス科			2		2				1
Labiatae	シソ科					1				3
Valerianaceae	オミナエシ科									1
Lactucoideae	タンボボ科		3	11	3	2		3	3	1
Asteroidae	キク類科		3	7	12	10	5	1	1	6
Xanthium	オノモミ属			1						
Artemisia	ヨモギ属		13	15	23	96	35	12	12	17
Fem spore	シダ植物胞子									
Monolate type spore	単条胞子		17	6	4	27	9	2	6	8
Trilate type spore	三条胞子		2	3	7	7	4	2	4	6
Arboreal pollen	樹木花粉		49	152	165	138	60	13	18	301
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木 · 草本花粉		5	2	0	1	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉		95	310	332	243	145	29	39	100
Total pollen	花粉粒數		149	464	497	382	205	42	57	401
Unknown pollen	未同定花粉		5	4	5	4	1	0	9	
Fem spore	シダ植物胞子		19	9	11	34	13	4	10	14



第2図 黒丸遺跡における主要花粉組成図 (花粉総数が基準)

III. 黒丸遺跡出土材の樹種同定

1. 試 料

試料は、ドーナツ状遺構の木の根（樹木1）と東壁の落ち込みから出土した材（樹木2）の2点である。

2. 方 法

試料はカミソリを用いて新鮮な基本的3断面（木材の横断面・放射断面・接線断面）をつくり、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種同定はこれらの試料標本をその解剖学的形質および現生樹木の木材標本と対比して行った。

3. 結 果

結果を次表に示し、同定の根拠等を記載する。また、各断面の顕微鏡写真を示す。

試料番号	樹種（和名／学名）	
樹木1 クスノキ	Cinnamomum camphora Presl	
樹木2 カヤ	Torreya nucifera Sieb. et Zucc.	

クスノキ Cinnamomum camphora Presl クスノキ科 図版6

横断面：中型から大型の道管が単独あるいは2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。これらの道管を鞘状に囲む柔細胞の内、油細胞と呼ばれる大型のものが存在する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、側壁には交互壁孔が見られ、らせん肥厚が存在する。放射組織は上下の縁辺のみ直立細胞で、それ以外は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺の直立細胞は、しばしば大型の油細胞となる。幅は1～3列である。

以上の形質より、クスノキに同定される。クスノキは暖帯から亜熱帯に分布し、日本では本州（関東地方以西）・四国・九州に分布する。常緑高木で、通常高さ15～25m、径70～80cmであるが、高さ50m、径7mに達するものもある。材は堅硬で耐朽・保存性高く、芳香がある。現在では器具・建築・楽器・船舶・彫刻・ろくろ細工に用いられる。

カヤ Torreya nucifera Sieb. et Zucc. イチイ科 図版6

仮道管と放射柔組織の2種類から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部は狭い。

放射断面：分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1～4個存在する。仮道管にはらせん肥厚が存在し2本対になる傾向を示すが、腐朽のため明瞭でない試料もあった。

黒丸遺跡 I

接線断面：放射組織は單列同性で、仮道管のらせん肥厚は2本対になる傾向を示す。

以上の形質より、カヤに同定される。カヤは暖帯から温帯に分布し、日本では本州(宮城県以南)・四国・九州に分布する。直幹性の常緑高木で、高さ25m、径2mに達する。材は均質緻密で、耐朽・保存性が高く、水温にもよく耐える。現在では器具・建築・土木・船舶・彫刻に用いられ、特に碁盤・将棋盤の最適材である。

参考文献

島地謙・伊東隆夫(1982) 図説木材組織、地球社

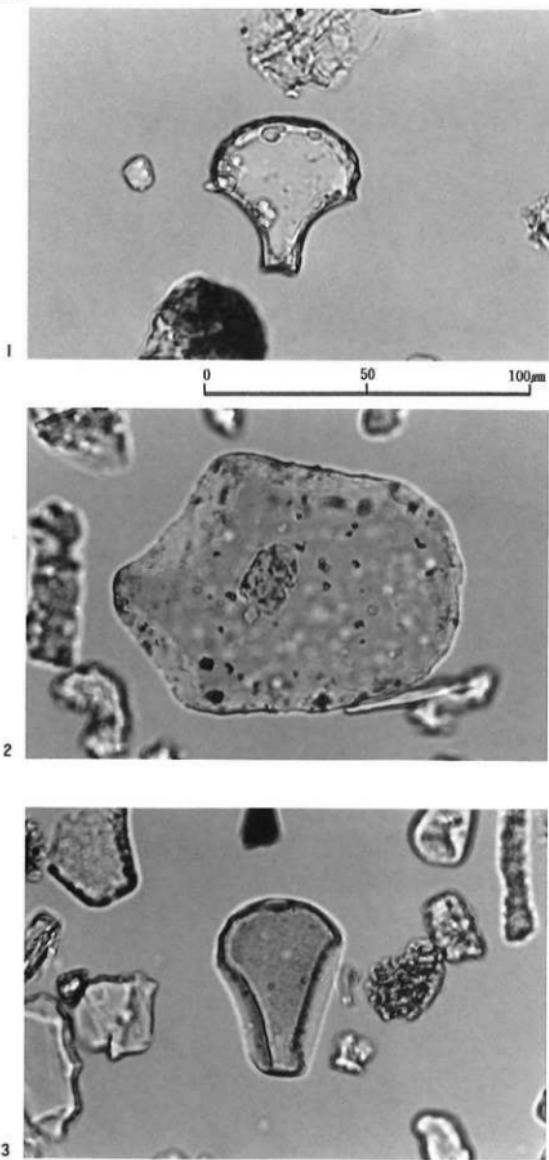
島地謙ほか(1985) 木材の構造、文永同出版

日本第四紀学会編(1993) 第四紀試料分析法、東京大学出版会

植物珪酸体の顕微鏡写真 (倍率はすべて400倍)

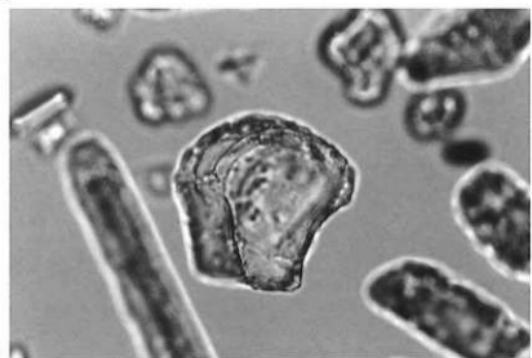
No	分類群	試料名
1	イネ	4
2	ヨシ属	4
3	ウシクサ族(ススキ属など)	7
4	ネザサ節型	4
5	ネザサ節型	3
6	メダケ節型	5
7	棒状珪酸体	2
8	マンサク科(イスノキ属)	2
9	クスノキ科(ぱりぱりノキ?)	2

黒丸遺跡植物珪酸体の顕微鏡写真 1

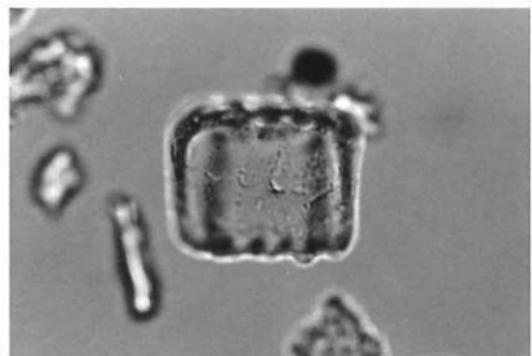


図版 2

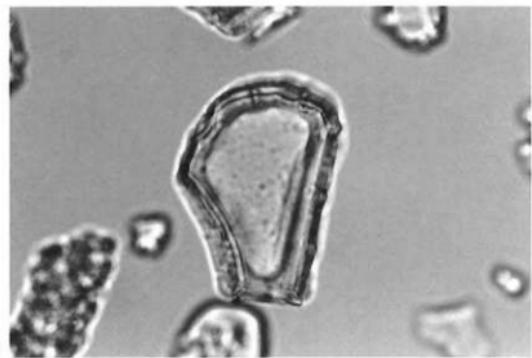
黒丸遺跡植物珪酸体の顕微鏡写真 2



4



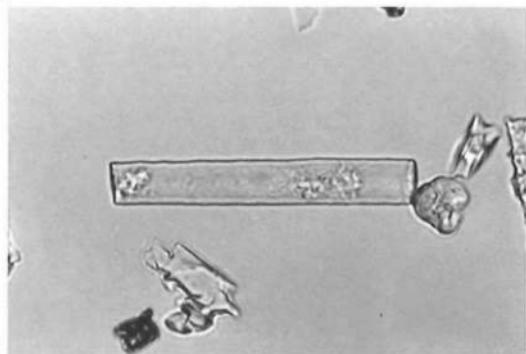
5



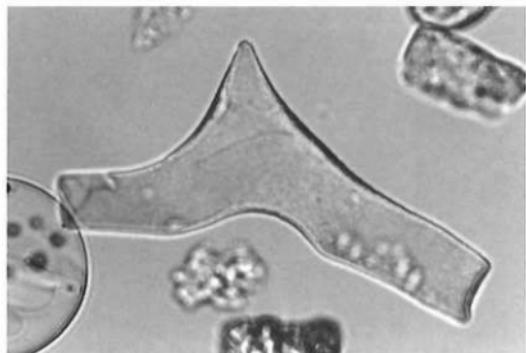
6

図版 3

黒丸連跡植物珪酸体の顕微鏡写真 3



7



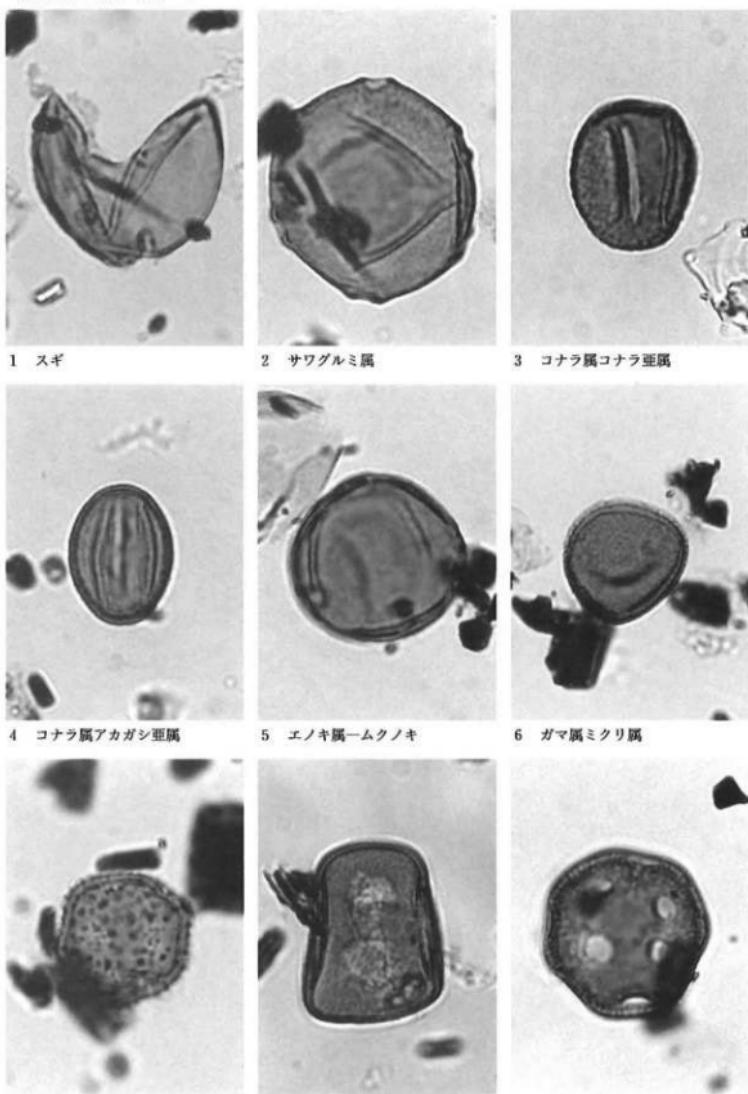
8



9

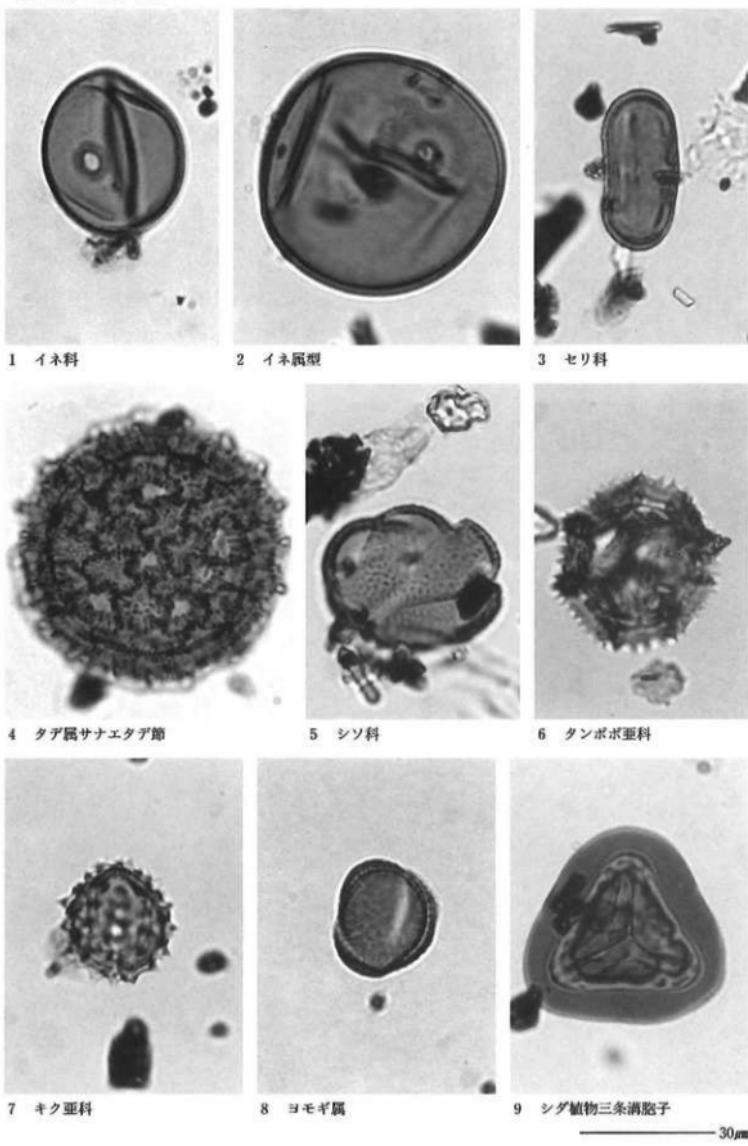
図版 4

黒丸遺跡の花粉・胞子 I



30μm

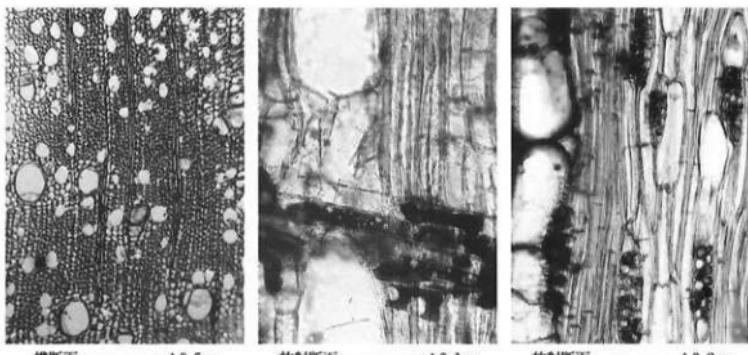
黒丸遺跡の花粉・胞子 II



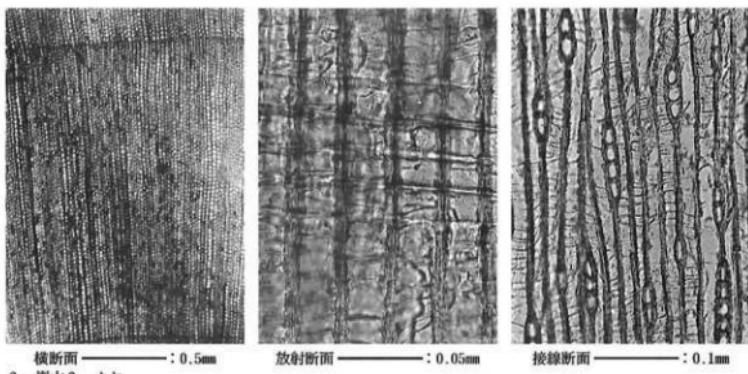
30μm

図版 6

黒丸遺跡出土材の顕微鏡写真



1. 樹木1 クスノキ



2. 樹木2 カヤ

報告書抄録(記載様式)

ふりがな	くろまる いせき							
書名	黒丸遺跡 I							
副書名	都市計画道路杭出津・松原線改良工事に伴う発掘調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第127集							
編著者名	町田利幸・古門雅高・高原愛							
編集機関	長崎県教育委員会							
所在地	〒850 長崎県長崎市江戸町2-13 TEL 0958-26-5010							
発行年月日	西暦 1996年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °°'	東経 °°'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
黒丸遺跡	大村市黒丸町 587番地1-352	42205	5-86	32°57'	(29°56'2")	19901203 ↓ 19960315	6.093m ²	道路建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
黒丸遺跡	遺物包含地	縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代 鎌倉時代	掘立柱建物跡 溝 土壙 井戸 壺棺	縄文時代の土器・石器 弥生時代の土器 土師器 白磁青磁				

長崎県文化財調査報告書第127集

黒丸遺跡 I

1996

発行 長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷 株式会社 昭和堂印刷
長崎市榮町6-23田中屋ビル